農學博士 酒匂常明著

日清貿易實業論 全

發兌元 東京 實業之日本社

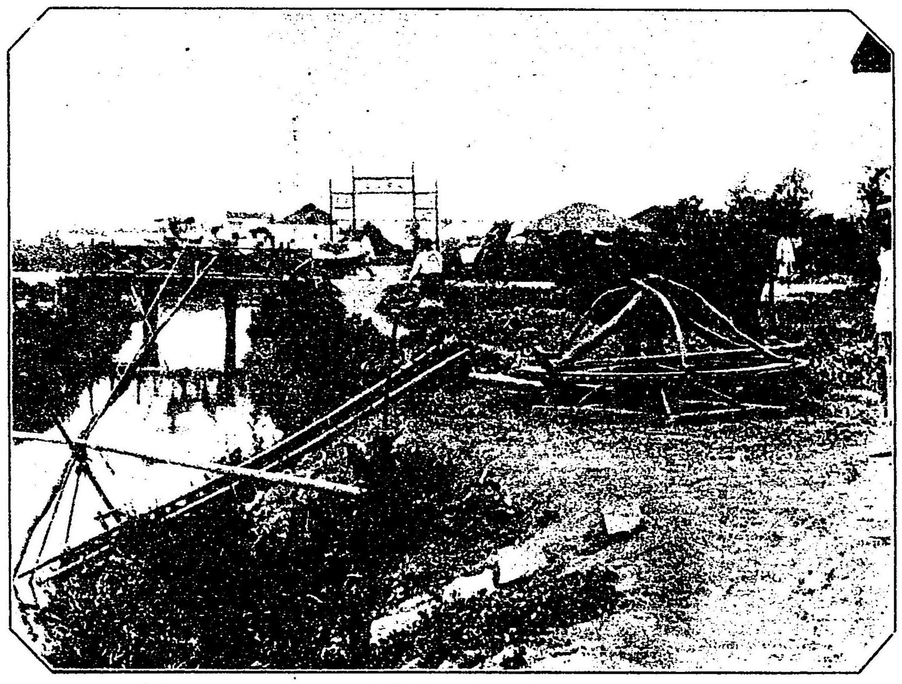
農學博士 酒匂常明著

日清韓實業論

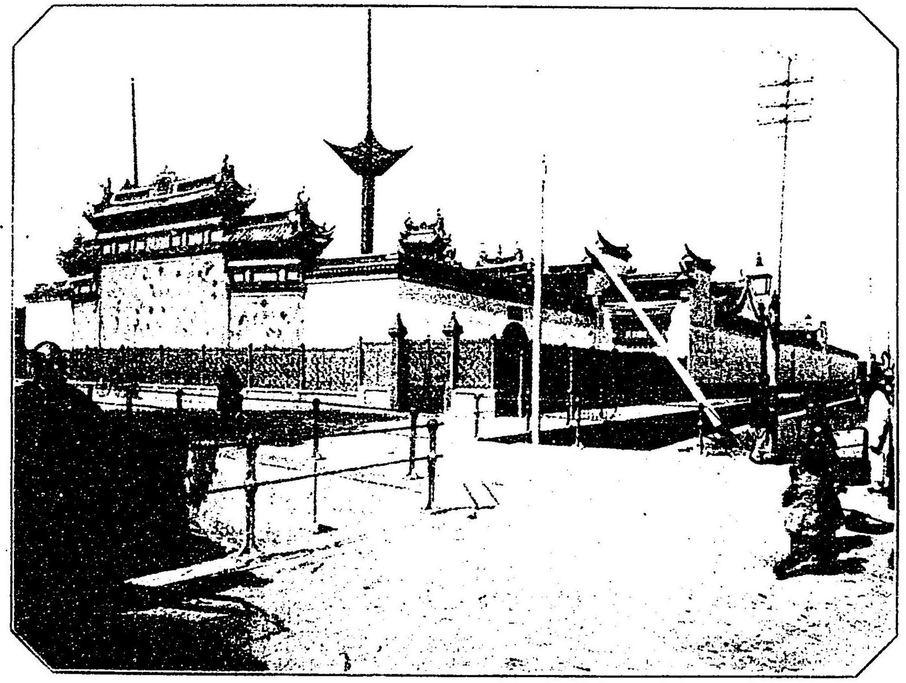
全

發兌元 東京 實業之日本社

清國の農村と會館



齒車仕掛ケニテ牛力ヲ以テ龍骨車ヲ廻傳セシムル圖

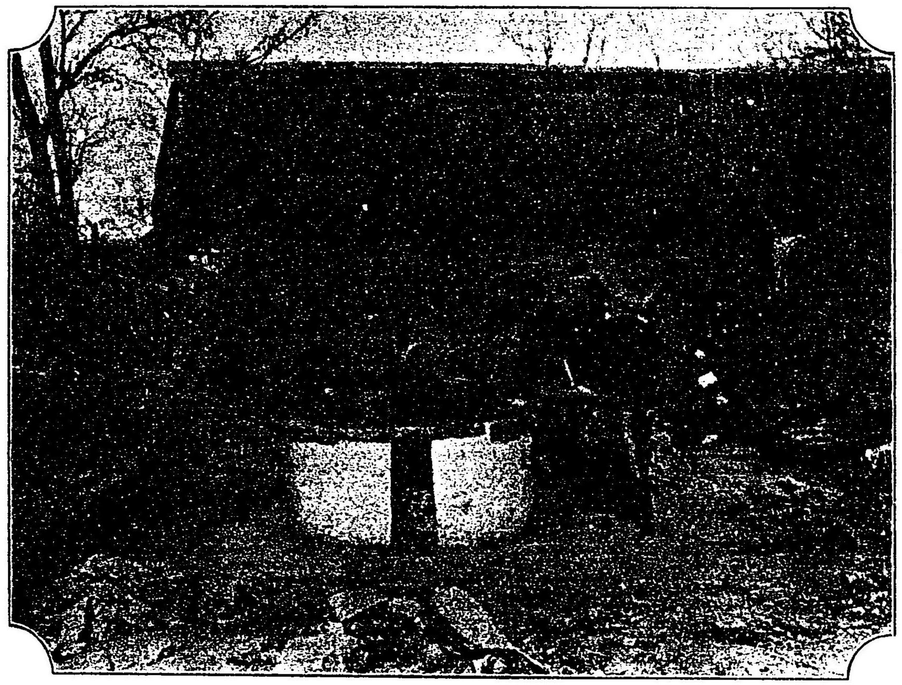


上海ニ在ル某會館

國立國會圖書館藏書

38285

清國の農村

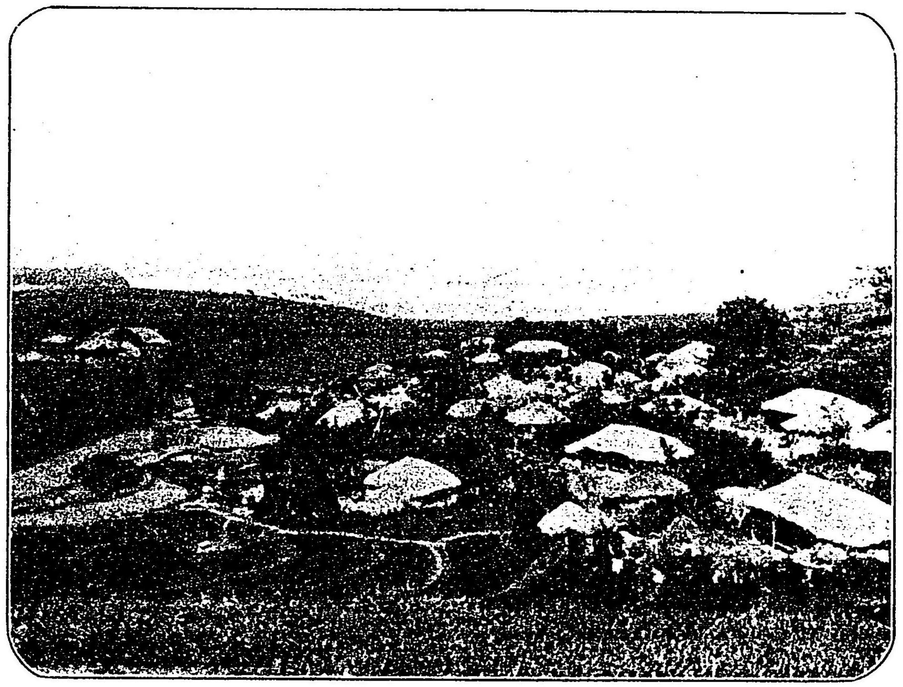


農屋裏ニ粉白チ驢馬ニ廻サシムル圖

打殼庭ニ打臼チ水牛ニ曳カシムル圖

韓國の農業

雜作農植



海邊ノ農村

（東京築地 原田寫眞銅版印刷所印行）

604
S+23n

日清韓實業論目次

第二章　緒言……一
第二章　日本帝國に於ける農業の地位……一一
第一節　農業に從事する戸口は最多數なり……一一
第二節　農業に利用せらるゝ土地は廣大なり……一二
第三節　農業に利用せらるゝ資本は最巨額なり……一三
第四節　農業は公費負擔力の最大要素なり……一三
第五節　農業は强兵を供給す……一四
第六節　農業は社會を健全ならしむ……一五
第七節　農業は內國貿易の主因なり……一五
第八節　村の盛衰は則ち町市の盛衰なり農業者は供給者たるのみならず一大需要者なり……一七
第九節　商工業の資本中農業者の投下せるもの多し……一八

第十節　農業が供給する不加工食料品……一八
第十一節　農業が原料を供給する加工飲食料品……二〇
第十二節　農業が供給する動物生産……二一
第十三節　農業が供給する工業原料……二一
第十四節　農産物又は其加工品は輸出品の要部を占む……二三
第十五節　農産物又は其加工品は輸入品の要部を占む……二四
第十六節　農業の生産は最大生産なり……二六
第十七節　農産は最大生産にして興農策は同時に工商策たり……二七
第十八節　農業に利用し得べき土地の面積は尚廣大なり……三〇
第十九節　土地の利用には方法あり……三一
第二十節　現在の農業又進歩發達すべし……三三
第二十一節　農業勞働者の減少は必ずしも憂ふべからず……三四
第三章　日本帝國及び帝國の農業に於ける米穀の地位……三六
第一節　米は農本なり……三六
第二節　米穀は最利益あり且最安全なる農産物なり……三九
第三節　米穀及び其他の農産は人口の增殖に比例して發達する
を得べし……四二
第四節　米作と人口との關係を再說す……四四
第五節　米作は小農の經濟に適當す……四六
第六節　勞働平均し耕作循環せざれば農業の利益を擧ぐること
能はず……四七
第七節　土地は適當の作物を以て利用することを要す……五〇
第八節　食料農產は外國に於ても農本の地位を有す……五一
第九節　藁は農業に缺く能はざるものとす……五三
第十節　糠の用途も亦輕んずべからず……五五
第十一節　米作の收益を論ず……五六
第十二節　米價の高低は最多の戶數人口に影響す……五九
第十三節　支那米輸出解禁問題の一……六〇

第十四節　支那米輸出解禁問題の二……七一
第四章　清國國土の競爭力(專ら農業に就て)……七九
第一節　人口及び地積……七九
第二節　農產競爭力の原因……八〇
第三節　清國の農地と農產競爭力……八一
第四節　清國農事の改良……八五
第五節　日本に對する競爭力……八六
第六節　滿州……八九
第七節　日清農產貿易……九二
第八節　清國農產物の我國に對する利害關係……九三
大豆及び油粕——棉花及び砂糖——生卵——麻類、棉實、胡麻、滓、菜種
等——動物生產——米、鹽、茶——附我よりの農產輸出品
第九節　輸入農產物の換算地積……九九
第十節　清國の農業及び農政……一〇一
總說——水利——農產物——家畜——蠶桑——農政
第五章　清國國人の競爭力(專ら商業に就て)……一一五
第一節　清人の特長……一一五
簡單——共同——攻守——信用——勤儉及び滿足——結論
第二節　清國の資力……一二二
貧富の懸隔甚し——資本の增殖緩漫なり——投資の目的物は不
動產なり——近時の投資は本國を離る——各種の資本如何——
結論
第六章　日清貿易の方針……一二八
第一節　清國より輸入……一二八
第二節　清國へ輸出……一二九
第三節　清國の貿易力……一三三
第七章　日清貿易の奬勵……一三八
第一節　國民の覺悟……一三八
第二節　輸出見込品……一四〇
第三節　工業……一四四

第四節　鐵業鐵道及び水運……一四九
第五節　調査……一五二
第六節　教育……一五五
第七節　日清協資……一五六
第八節　北清經營……一五六
第九節　我物産の改良及び組合の設置……一五七
第八章　清國雜記……一五八
第一節　人心民情等……一五八
第二節　下層人の性行……一六〇
第三節　衣食住等……一六三
第四節　經濟所感……一六八
第九章　韓國の價値……一七四
第一節　總說……一七四
第二節　農法及び農作……一七七
第三節　農事改良と其手段……一七八
第四節　模範農場……一八一
第五節　人口及び農業見込地……一八三
第十章　對韓方針……一八七
第一節　利害共通……一八七
第二節　陸運水運……一八九
第三節　鑛業、漁業及び工業……一九〇
第四節　商業……一九一

目次終

日清韓實業論

農學博士　酒勾常明述

第一章　緒言

余は本書に於て日本帝國の實業としては農業の方面のみを論究せり。夫れ我實業上、工商業發達の必要は何人も異論なき所なれども、商工立國論の如きは流行に過ぎたるものと謂ふべく、剩さへ農業の地位特質を忘却する者あらんとするが如きは決して看過すべからざる次第、是余が帝國に於ける農業の價値及び其國家關係を說明するの急務なることを認めたる所以なり。

清國に關しては四箇月旅行の淺見寡聞を以て其農工商業を論じたること大膽僭越なるを免れずと雖、內は我農業を顧み外は對清貿易の發達を望むの熱情に於て實に已むこと能はざるなり。其所論にして能く我實業家、就中工商業家奮起の資材となるに値ひせば余の願望乃ち足る。

韓國は農業國なり、其商業は農產物を賣りて其賣りたる金にて製作品を買ふことあるのみ。去れば韓國の實業問題は單純明白にして對韓論の趣味は寧ろ外交問題に存すと謂ふべし。然れども是余の本領に非ざるが故に余は主として世人の疑惑中に在る所の韓國の經濟的價値に就て講究せり。

余惟ふに(一)最上の經濟獨立國は食料、原料製作品の總てを自國に於て生產し剩餘を他國に輸出するものに在り、(二)食料、原料製作品の比較的多分を自國に於て生產し其幾分を輸入し且輸出するもの之に次ぎ、(三)食料、原料共に輸入するものは獨立の實を失ふに近し。第一は米國を推すべく獨佛は第二に入るべく、英國は第三の部類に屬して而して尙能く盛なる所以は殖民地と合せて事實上第一の部類に屬するものなればなり。余は我國の貿易力が人口に對しては勿論、面積に對しても各國の末位にあるを歎ずると同時に、農工商併進の小白耳義國が貿易力の首位にあるを見て我國の前途に希望を懷て聊か自ら慰する所あり。我國の面積、風土、人口を以てしては余は其實業上に於て東洋の白國たらんことを望む者にして、彼の單に地勢により東洋の英國を云々する者に至ては殆ど意味を爲さゞるものとして之を採らざるなり。東洋の英國たらんことを欲せば世界一等の殖民地、軍艦、商船を有せざるべからず遼東は還付し一の殖民地すら有せざるものが東洋の英國呼はりは餘りに隔絕したる將來の希望として寧ろ滑稽に屬すと謂はざるべからず。

請ふ進んで各國農工商業の形勢を觀察せしめよ。

英國は農業を犧牲にして商工業の發達を圖りたるに其の目的を達して大に國富を增進したり。然るに今日に於て利害を考ふるに商工業は米歐諸國爭ふて之が振張に努力し、其終局の目的たる販路の擴張に就ては經營慘憺、恰も戰場に雌雄を決せんとするが如く華主の爭奪は餓虎の肉を貪るに似たり、之が爲に英國商工業の利益線は近年擴張せざるのみならず、動もすれば退縮せんとするの傾あり。而して一方には農業を犧牲にしたるの結果食料及び原料の輸入は停止する所を知らざるのみならず、一朝國難に際しては食物不足の爲に如何の境遇に陷るならんかを憂ふる者あるに至れり。思ふに彼の國は今日に於ては商工偏重の惡結果を悟れるものゝ如く、之を救濟するの策として自國農業の再興策を講ずるの外、頻に帝國主義を唱道して其殖民地と經濟上及び國防上の同盟を強固ならしめんとす、

要するに英國に取りては是最良の策にして食料及び原料の供給は之を殖民地に仰ぎ製造品の販路は之を殖民地に於てするときは英國又始めて枕を高ふして安眠することを得べきなり。蓋し最大の殖民地を連絡保護するに最大の商船戰艦を以てするときは永く一等強國たるの實を保存することを得べし。而して帝國主義に依り其永久の安全を圖らんには絶對自由貿易主義の繼續にては各國の競爭に耐ゆる能はざるに依り今や既に殖民地と共に關稅同盟的保護主義を執るの端緒を開けり。英國貿易の近況は左の如くにして飲食物輸入の夥しきは特に着目すべし。

英國輸出入品中飲食物比較表

		一八九九年	一九〇〇年
總輸入高		四八五、〇三五、五八三磅	五二三、六三三、四八六磅
飲食物輸入高	生畜（食用）	九、五一五、〇〇五	九、六一四、六三七
	無稅飲食物	一六、一四一、〇九八	一七八、五一三、八四七
	有稅全	二五、九九〇、四〇七	二七、二四二、四二一
計		二〇四、六四六、五一〇	二一五、三七〇、九〇五
總高に對する飲食物の百分比例		四二、二	四一、三

		一八九九年	一九〇〇年
總輸出高	自國產	二六四、四九二、二一一磅	二九一、四五一、三〇六磅
	他國及殖民地產	六五、〇四二、四七七	六三、〇九九、二八八
計		三二九、五三四、六八八	三五四、五五〇、五九四
飲食物輸出高		一二、五六六、一四〇	一三、六一二、三六四
總高に對する飲食物の百分比例		三、八〇	三、八三

佛國は其殖民地に於て英國に次ぐ、然るに佛は英に反して多年保護政策を取り又比較的商工業に銳意ならず、農業寧ろ尊重せられて實に佛國の富源を爲せり。蓋し戰敗の結果、普國に交付するに五十億法の償金を以てするを要し、能く其約束を果し且速に瘡痍の癒へたるは國內農產及び農產加工品饒多なるによりて必需食物の輸入の爲に國外に正金を奪ひ去らるゝことなく、內に節儉して外に農產加工品の輸出を力めて以て正金を流入したるに因る。國本既に此の如く強固なり、之に加ふるに人口增殖、商工業の發達を以てせは決して今日の佛國に比して止まざるべきなり。

英の如く商工に偏せず、佛の如く商工に疎ならず、農工商三業の發達を圖りて能く其目的を達し健康國の模範を示せしは米國に在りとす。米國は一切萬事保護政

策を取り輸出は保護して進め輸入は保護して止め、連年農産物を歐洲に輸出して巨額の正金を吸收し、其正金の一部は又農業の發達に使用されて益〻正金吸收の作用を爲し、其一部は商工業に使用されて次第に歐洲製造品の輸入を防制し、今や製造品の輸出金額も亦其輸入金額に超過するに至れり。此に至りても農業の保護奬勵は孜々として怠らず、其水利疏通に力むる又近くは米、茶、桑の生産を始めとし飽くまで國土を利用せざれば止まざるの概あり。去れば歐洲は始め合衆國の農產物を買ふも製造物を賣りて能く差引計算を爲すを得たりと雖、今や彼に製造品を賣るを得ざるのみならず、他方の販路までも彼の侵略を蒙むらんとす。依て歐洲は關稅政策に依て米國農產物の流入を防止し又其製造物の販路を自己の殖民地は勿論後進の諸邦國に求めて活路を得んとせり。左に米國農產物の輸出及び工產物の輸出入を示すべし。

米國農產物累年輸出額表

千八百八十年	六八五、九六一、〇九一	弗
千八百八十五年	五三〇、一七二、九六六	
千八百九十年	六二九、八二〇、八〇八	
千八百九十五年	五五三、二一〇、〇二六	弗
千八百九十六年	五六九、八七九、二九七	
千八百九十七年	六八三、四七一、一三九	

米國工產物累年輸出入額表

	輸入		輸出	
千八百九十年	三四六、六七八、六五四	弗	一五一、一〇二、三七六	弗
千八百九十五年	三一七、二五七、一七六		一八三、五九五、七四三	
千八百九十六年	三二八、九三七、五二八		二二八、五七一、一七八	
千八百九十七年	三二七、三二四、九二〇		二七七、二八五、三九一	
千八百九十八年	二二六、二五〇、〇九二		二九〇、六九七、三五四	

又爰に各國殖民地の近況表を挿入するを便利なりとす。

世界殖民地（保護地ヲ含ム）近況比較表

	殖民地ノ數	其面積	其人口
大英	四八	一一、二五〇、四一二方哩	三四四、〇五九、一二二人
佛蘭西	三二	三、六一七、三三七	五二、六四二、九三〇
獨逸	八	一、〇二〇、〇七〇	一〇、六〇〇、〇〇〇
和蘭	三	八〇二、八六三	三三、九一一、七四四
葡萄牙	九	八〇一、〇六〇	九、二一六、七〇七
伊太利	三	二四五、八七七	二五六、〇〇〇
白耳義	二	一〇四、〇〇〇	六五〇、〇〇〇
洪	二	二三、二六二	一、五六八、〇九二

丁	三	八六、六一四
抹	三	二五五、五五〇
露	四	五六四、五〇〇
土	四	二、八八一、五六〇
耳	五	一六八、二八七
古	四	二一、八二一、三八二
那	四	
支	五	
米	四	
計		

		一一四、二二九
		五、六八四、〇〇〇
		一七、四八九、〇〇〇
		一六、六八〇、〇〇〇
		一〇、一七七、〇〇〇
		五〇三、〇四八、八二四

此際獨逸の關稅政策は實に偉觀なりと謂ふべし。今回の新案に依れば機械、製造品等は比較的增稅少きに係らず、食料品輸入稅の增加は五割乃至四十割に達し、其主要なるもの左の如し。

獨逸食料品新舊關稅率比較表

	舊稅率	新稅率
小麥	〇・六五円	一・〇二円
燕麥	〇・二八	〇・六四
玉蜀黍	〇・二四	〇・七三
蛇麻草	四・三二	一五・八八
乾果	〇・八六	二・二七
生肉	四・三二	一〇・二二
乾酪	四・三二	六・八一

蓋し列國對峙の現勢に鑑み終局の勝利を制せんとするには先づ國本を培養し、防備充實、內顧の憂なからしむるを以て根本的大計畫なりと爲すべし。獨の新關稅は近年の商工偏重を矯め又更に彼國に幸すべし。

列國の保護政策は勿論獨り農業にのみ之を施すにあらず、自國工業品の發達と其販路擴張とに就ては往々穩當の範圍を超へ、隨分極端の奬勵策をも斷行せり、各國對峙競爭の現世に於て苟くも國家存立、實力發達の要素を確定せんには、獨り內國策に滿足せず大に對外政策を振はしめて以て何業に依らず出來得るだけの保護奬勵を加へざるべからず。而して之が爲には又農工商の相互關係あることを知ることを要す。農業保護の爲には幾分食物の騰貴することあるべしと雖、商工は之を忍んで自國の食料を消費することに滿足を表せざるべからず、工業保護の爲には多少外國品よりも高價なる製造品を使用せざるべからざる場合あるべしと雖、農家其他消費者は自國の製造品を需要することに同情を表せざるべからず。斯の如くして始めて農工商併進國家健全なるを得べきなり。左に又各國の食物政策を知るが爲小麥、小麥粉及び牛肉の輸入稅率比較表

各國農產物輸入稅率比較表

十一

十月目二十年大正

	市價百斤	蠶種一枚
支那蠶	一圓六三錢	一錢二厘
佛國蠶	一圓六三錢	一錢二厘
伊太利蠶	一圓六三錢	一錢二厘
平均	一圓六三錢	一錢二厘

十月目二十年大正

	市價百斤	蠶種一枚
支那蠶	一圓五三錢	一錢二厘
佛國蠶	一圓五三錢	一錢二厘
伊太利蠶	一圓五三錢	一錢二厘
平均	一圓五

第二章　日本帝國に於ける農業の地位

第一節　農業に從事する戸口は最多數なり

農業に從事する戸口は少くとも總戸口の六割を降ることなかるべく、帝國總戸數八百十八萬千六百〇八戸（明治三十一年末中四百九十萬八千九百六十五戸、總人口四千四百八十萬五千九百三十七人中明治三十三年末二千六百八十萬三千五百六十二人は則ち農業に從事するものゝなり。されば農利の多寡、農政の善惡は最多の戸數人口に影響するものなりとす。

戸數人口表　（明治二十一年の事實を調査したる農商務省農事調査表に依る但愛知、高知、和歌山、香川、熊本、鹿兒島の六縣を缺く）

	總戸數 六、四九〇、六三六戸			總人口 三四、四〇〇、九四二人	
	農	工	商	其他	總戸數人口に對する農の百分比例
戸數	四、二九一、六五六	四二一、〇三九	八三六、九四一	九七四、〇九九	六六、一二
人口	二三、〇〇五、三一二	一、九九三、九二一	四、〇七九、四五八	五、四七七、一二四	六六、八七

第二節　農業に利用せらるゝ土地は廣大なり

帝國は山嶽傾斜地に富むと雖、現に五百萬町歩の土地は農業に利用せらる。前途に就ては第十八節に述ぶる所の如く尚數百萬町歩の耕作に適すべき餘地なり。

農商務省地質調査所の調査

	總面積	現耕地
本州	二二、六三六、五七八町	三、七七七、三一二町
四國	一、七九〇、三四六、二	三〇五、九五九
九州	三、六七六、三四七、三	八八三、〇〇八
北海道	七、八四八、七八三、四	
全國	三五、九五二、〇五五、〇	四、九六六、二七九

（明治三十二年の調査）

	田	畑	民有原野及牧場	田畑合計
	二、七四四、七八〇町	二、二八六、四四〇町	一、〇七四、七九六町	五、〇三一、二二〇町

原野は其大部分より飼料及び肥料用の草秣を採集して之を農業に利用す。

第三節　農業に利用せらるゝ資本は最巨額なり

農業資本の概算左の如し。

農業資本概算表

	耕地	農具	
	七、〇四七、〇〇〇、〇〇〇円	七五、〇〇〇、〇〇〇円	

農　屋	二八九、〇〇〇、〇〇〇	
家　畜	一七四、〇〇〇、〇〇〇	
	合　計	七、五八五、〇〇〇、〇〇〇

右は主重のもののみを掲ぐ、此他細小、附屬のものを合算すれば八十億圓を下ることなかるべく、此の他に尚流動資本を使用すると少なからず。

第四節　農業は公費負擔力の最大要素なり

農家の直接に負擔する租稅及び府縣稅、町村稅左の如し。之に依て見れば府縣稅賦課額の七割七分、町村稅賦課額の九割一分の弦と全部は農家の直接負擔する所と謂て可なり。其他所得稅、營業稅、酒稅、砂糖消費稅、雜種稅寄附金の如きも亦直接間接に五百萬戶、二千六百萬人の農業者の負擔に歸する部分少しとせず。

農民負擔表

租稅（明治三十三年度現計）

田　租	三三、〇八六、六〇九円
畑　租	七、三一七、七五九
郡村宅地租	三、五二八、七〇三
北海道地租	四三、九二八
雜　種　地　租	九五七、二一九
市街宅地租	一、七五六、六六九

府縣稅收入（明治三十二年度決算）

地　租　割	二〇、七一八、八一七円	賦課額合計　三七、〇五七、〇一二円
戶數割家屋稅	七、九四〇、一〇〇	二八、六五八、九一七円

町村稅收入（明治三十二年度決算）

地　價　割	一〇、一五五、一四一	賦課額合計　三二、二九七、〇二六円
戶　別　割	一八、二二一、一五一	
反　別　割	七七七、三九四	二九、五四一、六〇四円
夫　役	三八七、九一八	

（賦課額合計ノ九割一分四厘八毛）

第五節　農業は强兵を供給す

農籍の兵員は其人員に於て大多數なるのみならず、性質淳良、身體强健、且愛土愛鄉の念よりして從て愛國心に富めり。要するに群集の都市、不潔の巷衢に於て身體の局部運動を爲す所の工商業者に比すれば、開濶の田野に於て全身運動を爲す所の農業者は其體力、其氣宇に於て最良兵たること疑を容れず。

第六節　農業は社會を健全ならしむ

土地に附着して營まるべき產業は農業なり之に依り人口國中に普在して能く國土を守り、能く社會の幸福を保つことを得るも、若し農業衰頽村落荒廢することあ

らんか、人口は爭て都會に集注し、生活の困難、人世の不平は所謂社會問題を惹起して國家に有形無形の負擔を加ふること止む時なかるべし。蓋し都會の職業の間斷盛衰甚しきに似ずして偶々農業の收利少なきことあるも、己れの生産するを以て自ら給養するに足るが故に、農村の人は家族を維持し易く、人口を增殖することも多く、比較的幸福に氣質從て平穩なり。之を藥品に譬ふれば都會の人口は濃厚酸の如く、地方の人口は稀薄劑の如し。此兩種の混合宜しきを得るは社會健康上、最も必要の事なりとす。

第七節　農業は內國貿易の主因なり

農業の供給する食料、飲料、衣料、各種原料、各種加工品等を或は賣買し或は運送し或は加工する直接間接の總ての職業、之に從事する男女、之に要する固定流動の資本之より生ずる利益及び貨幣の融通等のことを調査するときは循環重疊廣大無邊の數量となり、實に內國貿易の主因此に在ることを發見すべしと雖、如何せん此等の調査は目下到底之を爲すこと能はず。唯簡單の一例を擧げんに譬へば米を以て造る所の酒なり、先づ玄米を賣買運送する者あり、之を精白する者あり、其糟糠を賣買する者あり、酒を醸造する資本家あり、又其技師雇人あり、醸造用の甑及麴を製する者あり、醸造桶及び酒樽を製する者あり、酒を運送する業あり、酒卸屋あり小賣屋あり、酒粕を賣買する者あり、酒造の金融業あり保險業あり、清酒を本としたる各種の混成酒あり、酒に依る所の飲食業歌舞業あり、斯の如く各種の事業連綿交涉して窮極する所を知らず。今日の船舶汽車荷車の如きも若し農產物及び農村需要品を運送することなくんば其の大部分は閑散に歸せんのみ。

第八節　村の盛衰は則ち町市の盛衰なり、農業者は供給者たるのみならず一大需要者なり

帝國の五十三箇市明治三十三年末千〇五十五箇町は專ら商工業の地なりと雖、其商業の材料、其工業の原料は主として之を一萬二千九百三十六箇村の農產に仰ぐ。加之其農村への需要品の供給、製造物の販賣は實に町市營業の最大源因にして、又此等に依て荷爲替、預金、貯金貸借の金融業も從て行はる。現に見よ市町の景氣不景氣は農村の豐凶則ち其購買力の反影なり。

農業者の供給に就ては他の各節之を詳にするにより爰に需要に就て說く所あら

んに、農業者が自ら生産せず又は生産不足なるが爲町市の商工業家に就き需要する物品の主要なるもの左の如し。

飲食其他消耗品の部
　鹽、砂糖、味噌、醬油、油、酒、魚、罐詰等

衣類の部
　糸、布巾類、諸織物、毛布等

家具の部
　金屬器、陶磁器、玻璃器、疊襖等

雜品の部
　下駄、傘、紙、木材、藥品、小間物、雜貨等

農業用品の部
　種子、苗木、種紙、鍬、鎌、犁、耙、壺具、驅虫用具、藥品、肥料、飼料、農具等

右は極めて大概の例を示せしに過ぎず。要するに五百萬戸二千六百萬人の需要する所なれば其種類の多き其數量の大なる、其合計金額の夥しき確かに帝國内に於ける商業及び工業の大華主たるの地位を有するものと謂ふべし。

第九節　商工業の資本中農業者の投下せるもの多し

帝國諸會社(銀行をも含む)の拂込資本金六億八千三百八十二萬〇二百二十五圓(明治三十二年)末なり。今數字を以て證明すること能はずと雖、此資本金の重要なる部分は農業者(主として地主)の投下せる所に相違なきは資本金株金は廣く地方に募集且分配せられ、又募集の難易は大に農作の豐凶に關するを以て之を察するに足る。將來に於ても農業收入の剩餘よく商工業に投資せらるゝもの決して少額なりとせざるべし。

第十節　農業が供給する不加工食料品

左に記載するは農業の供給する不加工食料品の主要なるものなり。

米、麥　水稻、陸稻、大麥、小麥、裸麥、燕麥、黑麥、稗、玉蜀黍、蜀黍、蕎麥

豆雜穀　大豆、小豆、豌豆、蠶豆、菜豆、落花生

蔬菜　根菜(甘藷、瓜哇薯、芋、薯蕷、蕗、葡萄、蕪青、胡蘿蔔、牛蒡、蓮根、慈姑、甘露子、蕗、百合、蕨、薇、莪蒁)
　菜菜(菜類、甘藍類、漸苣類、獨活、欵冬、野蜀葵、芹、菠薐草、アスパラガス、メラカブス、石勾柏、蕃、紫蘇、若荷、山葵、筍、石勾柏)

果菜（瓜類、茄子類、莢豆類）
果實類　柑橘、苹果、梨、葡萄、柿、梅、桃、櫻桃、枇杷、李、杏、巴旦杏、
　　蕨、柘榴、無花果、苺等
香辛類　蕃椒、胡椒、「ホップ」、薄荷、乾薑、芥子、麻子、罌粟子
牧草　（家畜の食料）
藥草　人參、牡丹皮、肉桂、黄連、灸茶莫、泊夫藍

第十一節　農業か原料を供給する加工飲食料品

左に記載するは農業か原料を供給する加工飲食料品の主要なるものなり。

茶、珈琲等　綠茶、紅茶、磚茶、咖啡、香煎
糖　蜜　白糖、赤糖、黑糖、氷糖、糖蜜、蜂蜜
精穀、粉、麵、乾物類　白米、挽麥、精穀、蕎麥粉、乾餅、素麵、乾饂飩、
　　乾麩、腐皮、凍豆腐、凍粉、寒天、切干
乳汁の製品、肉類の貯藏品　牛酪、煉乳、粉乳、燻腿、鹽肉、肉「エキス」、罐詰
蔬菜果實等の貯藏品　漬物類（砂糖漬、鹽漬、醋漬、酒精漬、粕漬、麹漬
　　芥子漬、味噌漬、糠漬）
　　煮物類（「ジヤム」、「ツエリー」を含む）
　　乾果類（乾柿、乾杏、乾葡萄、乾無花果
菓子、飴　菓子、乾菓子、掛物、咖啡入角糖、「パン」、「ビスケツト」菓子種

醸造品　清酒、濁酒、醋酒、味淋、白酒等、麥酒、
　　葡萄酒、「サイダー」其他果酒、酒精、燒酎其他火酒、醋、醬油、味
　　噌、たまり、納豆等
　　製麹、麥芽

第十二節　農業か供給する動物生産

左に記載するは農業の供給する動物生産の主要なるものなり。

蠶卵
繭
家　家畜　牛、馬、綿羊、山羊、豚、駱駝、騾、兎
家禽及其卵　鷄、鴈、鴨、七面鳥、ホロホロ鳥、「パリケン」
蜜蜂
皮、毛、羽、角、骨、蹄、膠、胱

第十三節　農業か供給する工業原料

左に記載するは農業の供給する工業原料の主要なるものなり。

綿、麻　實綿、繰綿、大麻、苧麻、亞麻、黄麻
製紙の原料及糊料　楮、三椏、雁皮、藁、黄蜀葵、糊の木

藺藁稈其他纖維類　七島藺、備後藺、燈心、工作用麥稈、蔓心
煙草原料（葉煙草）製品（刻煙草、紙巻煙草、葉巻煙草）
染色原料　藍（葉藍、蓼藍、藍玉、泥藍）
製油原料　茶種、胡麻、荏、綿實、亞麻仁、向日葵、苣麻子
鳳梨、芭蕉、椋櫚、帝蜀黍、絲瓜、杷柳、菁蒲、麻稍、蜀黍莖

第十四節　農產物又は其加工品は輸出品の要部を占む

更に眼を轉じて農產と外國貿易との關係を攻究するが爲、百萬圓以上（三十一、三十二、三十三、三十ヶ年平均）の輸出品を左に揭出す。

內國產輸出品表

品名	價格	別
生絲	四九、七七七、三八七円	農工
棉織物	二三、〇七五、七六二	農工
石炭	一六、七八八、五八九	鑛
羽二重	一五、〇九六、九六六	農工
熟茶	一〇、三七二、八五〇	農
銅	八、五八三、四二二	鑛
米	六、五九二、九二二	農
ヤツチ	五、九七五、一六〇	工
絹製手巾	三、七七八、四一三	農
地蓆	三、六五五、三二七	農
麥稈眞田	三、〇六六、四四六	農
厨料	二、五一六、四九四	工
硝子器及陶器	二、二一四、六七三	工
樟腦	一、九九九、九二三	林
鰹節	一、二六三、〇四〇	水産
製斗糸	一、一二三、九五一	農工

其第一は生絲の凡そ五千萬圓（三十四年は七千五百萬圓に上りたり）にして、是れ純然たる農產に幾分加工したる者なり。次は綿織絲の二千三百萬圓にして其原料は農產品なりと雖、今や專ら之を輸入に仰ぐに至れるは甚遺憾とする所なり。次の石炭は鑛產品なれとも、第四の羽二重は又其原料を農產に仰ぎ、第六、第七の茶及び米は純然たる農產品なり。其他は表に依て知るべく、斯の如く輸出品の要部は農產又は其加工品に屬するを以て、將來輸出を擴張するには益々農業の發達に依らざるべからず。

第十五節　農産物又は其加工品は輸入品の要部を占む

先づ三ヶ年平均（明治三十一三十二三十三）百萬圓以上の輸入品を左に掲出す。

外國產輸入品表

品名	價格	業別
綿糸	五五、〇九二、〇七〇円	工
砂糖	二四、三一八、八四九	農
米	二一、〇六七、一七〇	農
兵器、時計、學術器具器械	一四、五三三、二四四	工
石油	九、八七七、八九二	鑛
綿織物類	六、八五一、三一九	工
豆油粕（肥料）	六、六〇三、五九九	農
綿糸呉呂	五、七〇一、〇七七	農
流船	五、三六三、三〇七	工
生金巾	四、五八五、七七〇	農
煙草	四、五〇五、二三三	農
鐵板	四、四〇九、九〇〇	工
鐵條及竿	四、〇五六、〇六一	工
羅紗	三、九六九、六〇九	工
羊毛	三、七二九、〇〇七	農
鐵軌條及附屬品	三、二九五、六四六	工
乾鰯	三、〇六九、四五五	農
麥粉	三、〇二五、七三三	農
綿糸	二、四二五、二六一	農
釘	二、一七一、七七四	工
鐵筒及管	一、九五六、二七三	工
印刷料紙	一、七五六、〇二三	工
靴底皮其他皮	一、六八九、四九〇	工
酒精	一、六四〇、〇五三	農
更紗	一、六三〇、九四四	工
鐵橋梁其他建築用材	一、五三九、二五五	工
鰯魚	一、三五八、二三八	農
苧麻	一、三三五、八二五	農
アニリン染料	一、一七八、六五八	工
石炭	一、一五〇、五三四	鑛
イタリアン、クロース	一、一四五、四四五	工
フランネル	一、一〇七、一九四	工
毛糸	一、〇七二、八六三	工
	一、〇五九、〇二一	農

以上三十四品中二十一品は農若は農工品にして金額も亦多分を占む。故に輸入

品を防ぎ又は之を減ぜんと欲せば農業の發達を促すを以て最良策なりとす、就中砂糖、羊毛、諸織物の原料、棉、米、豆、油糟、藍、酒精、苧麻の如き殊に臺灣北海道等を併せて觀察するときは概ね本邦に於て生産し得べきものに屬す。

第十六節　農業の生産は最大生産なり

試に一年間農業生産を概算するに凡そ十億圓の巨額に達するを見る。其內譯左の如し。

農業生産物價格概算表

種類		金額	合計
田作	米	四四五、四三九、〇八七圓	五七〇、三〇四、三一五円
	麥類	四六、三五二、六七六	
	菜種	五、一二六、九二〇	
	稿稈	七三、三八五、五三一	
畑作	麥	七七、七一一、五九九	二七六、〇〇六、四四三円
	大小豆	三五、九五二、二八三	
	重要農作物稿稈	一〇六、九八五、四八四	
	其他農作物稿稈	四一、七六〇、二四六	
蠶業	繭	一三、五九六、八三〇	一〇五、四一六、二二一円
	蠶種	九三、六一八、九九一	
	桑條及蠶砂	三、八四四、一二六	
		七、九五三、一〇四	
茶業	製茶	二、〇四五、九一〇	一四、六一一、九九九円
畜産	牛（當才）	二、四九五、九二〇	
	馬（當才）	四一一、七〇三	
	綿羊、山羊、豚（生産）	一〇、四一七、三九三	
	屠畜	二、一二三、〇〇一	
	畜廢棄物	二五六、八三一	
	役牛馬	三、二七〇、七一五	四四、〇二四、三四四
	牛乳	一二七、三〇六	
	乳製物	三六二、九二六	
	肉製物	一、二六四、八〇〇	
	廐肥	一、七九三、六七八	
	食用家禽	八、四二八、一六一	
	卵	七、〇〇〇	
	羊毛		
全計			一、〇一〇、三六三、三二一

第十七節　農產は最大生産にして興農策は同時に工商策たり

農工、水鑛各生產物の重要なるもの左の如し(價格は明治三十、三十一、三十二の三箇年平均)

農、工、水、鑛生產物	價格	農、工、水、鑛生產物	價格
米	四六七、三五九、〇六九圓	反物	一二〇、五九四、四七三
大麥	四三、六二八、七七六	帶地	一三、七五八、四二九
裸麥	四六、二三七、五三四	棉絲	二〇、七〇九、四〇七
小麥	三一、二五四、一四六	漆器	四、八七七、二四五
大豆	二六、八四六、〇三〇	陶磁器	五、三三二、〇四〇
葉煙草	一六、五五二、八八二	青銅器	一、二三六、二三一
菜種油	六、八四四、八七〇	摺附木	六、二八八、三八七
生蠶絲	二、六八〇、七二四	和紙	一二、三三六、三二七
茶	七七、六七八、一二七	西洋紙	三、五二六、三九七
白砂糖	一八、二九五、四八二	疊表花蓙類	五、四八一、七六九
赤砂糖	五五三、六〇九	小計	一九四、一四〇、七〇七
牛(屠)	一八三、三五〇	水產製造物	二九、三五七、六三八
馬(屠)	五、八五五、四七〇	食鹽	八、六二二、〇七五
豚(屠)	五五一、四四四	小計	三七、九七九、七一四
小計	八四六、九九九	鑛產物	三四、一〇四、六七三
	七四五、三六八、五一七	合計	一、〇一一、五九三、六一二

〔備考〕農產物生產價格は統計年鑑に依りたるものにして前節の特に調査したる農產價格とは多少の相違あり

假に農業なしとせんか則ち十億圓の最大物產を失ふのみならず、之を外國より輸入するが爲に十億圓の正金を支出するを要するにより、併せて二十億圓の國損となる。然ども是は極端の例なるが故に姑く米のみに就て論せんに、其生產五億圓、若し其一半を減して之を外國より輸入せざるべからずとせば二億五千萬圓の生產減損にして之に加ふるに同額の購米金を外國に支拂はざるべからず、則ち五億の損失や至大にして國家既に倒產するに至る。何となれば內は地主其收入を失ひ、農家其基礎を轉覆し、農民其購買力及び負擔力を消耗し、村落の荒廢は町市の衰頽となり、外は輸出品の全金額(凡そ二億二千萬圓)を投ずるも尙米を購ふの費用に足らず、帝國の正金數年を俟たずして其全部を流出し慘狀名狀すべからざるに至るべし。實に悚然として恐れざるへからざるなり。右は米穀現產額の一半を購入するものとして論じたれども、其十分一即ち五千萬圓の常時購入を爲すものと見るも之を償却するの財源豈新に容易に得べけんや。輸入之が爲に常に輸出に超過し、正金次第に消散して工商業發達の機會及び餘資なきのみならず、恐慌年を期して至るべきなり。其實例近く明治三十一年にあり暫く軍國の獨立問題を外に

する。も、我帝國の經濟上に於て農業の保護奬勵は根本の富國策なりと謂ふべし。然るときは其利益と後援とに依て工商業も亦鞏固なる發達を爲すことを得べく、農業策は同時に工商策たるべきなり。

第十八節　農業に利用し得へき土地の面積は尚廣大なり

以上は多く農業の現在點に基きて說述したり。以下は將來に涉りて觀察を施すべし。農業の將來を疑ふ者に第一に起る所の問題は尚開拓すべき餘地あるや否や是なり。一部の觀察即大道旅行者の眼を以てすれば平地は勿論、時としては丘頂又は山の半腹まで開作せらるゝを見て、最早開拓の餘地なしと斷定すべしと雖我國の農牧用土地面積は國土全面積の一、割七分に過ぎず、歐洲諸國の農牧用地概ね六割乃至七割なるに比較して甚だ寡少なり、又耕地のみに就て言へば我現耕地は國土總面積の一割五分に充たざるに、歐洲諸國は四割乃至五割なり。我國如何に山岳多しと雖斯の如く農地の僅少なるは必ずや其原因あるべく、之を以て決して開拓の極度なりと斷定するを得ず。果せるかな頃日地質調査所土性課の調査

成り我國には尚殆ど現耕地に一倍するの開墾見込地あることを知るを得たり。但し此調査の方法は比例尺五十萬分一の全國圖を基礎とし種々の方法に依り約十五度以下の面積を算出し、尚河川、崖地、都市敷地、荒廢地等を四割と見込み之を控除し殘數を以て平地と假定したるものなり。

對國土總面積耕地表

	總面積	現耕地	平地に對する現耕地百分率	同未耕地百分率
	概測約十五度以下の平地			
本州	二二、六三六、五七八、一町	五、六〇二、七八六町	六七、〇	三三、〇
四國	一、七九〇、三四六、二	四三九、六七一	六九、〇	三一、〇
九州	三、六七六、三四七、三	一、一〇二、六六六	八八三、〇〇八	二〇、〇
北海道	七、八四八、七八三、四	二、三八三、八八九	—	—
全國	三五、九五二、〇五五、〇	九、五二九、〇一二	五二、〇	四八、〇

〔備考〕北海道の概耕地は小面積なるに由り合計に算入せず

人口饒多、土地不足、農業古舊なるに拘らず、何故に斯の如く不利用地多きやと云ふに其主因蓋し三あり、第一土地の利用上智識、資本、機械の應用足らざること、第二畜產發達せざること、第三園藝幼稚なること是なり

第十九節　土地の利用には方法あり

去れば將來未開地の利用を增進せんには右の三點に注意するを最必要なりとす。

今其要領を說かんに第一土地の利用上天然に於て缺點ある所は人爲に依て之を改善すべし、就中運輸交通の不便なる所は道路、運河、鐵道等に依り其便利を通ずべし。灌漑排水の不充分なる所は水路を通じ「ポンプ」を用ひて之を補充することを得べし。概言すれば智識と資本との應用に依りて農業土木の發達を圖るにあり。第二畜產は將に發達の緒に就けり、其主なるは軍用の馬に於ける、乳用肉用の牛に於ける、肉卵の家禽に於ける、人力に代る所の牛馬に於ける等なり。又豚羊蕃殖の如きも新に興起せんとす。畜產に依て大に土地の利用の增進せらるゝは必然の勢なり。第三園藝は蔬菜を作ることは早くより開けたるも、果物に就ては至て幼稚なるものなりしに、近年果物の需要俄然として起り又其改良發達も意外に速なる者あり、園藝產物は明治二十五年に輸出六萬四千圓、輸入四萬二千圓なりし者、明治三十二年には輸出六十二萬八千圓、輸入九十六萬二千圓となれり。蓋し內國の副食用のみならず更に葡萄酒、柑橘等を亞細亞諸國に輸出するの途開くる時は其栽培又無限の發達を爲すべく、園藝は殊に傾斜地の利用に適當せり。此三點の外

人口の增殖、工業の發達は又益〻飮食品及び原料の需用を增加し、從て土地利用の增進を來たすべきなり。

第二十節　現在の農業又進步發達すへし

唯り未開地の將來のみならず現在の土地及び農業に就ての前途も亦多望なり。

我國に於ける農牧地一町步の收入は凡そ百二三十圓程度なるが如し。然るに英吉利は百五十圓、獨逸は百六十圓、佛蘭西は百八十圓の概算なりとす。我國の農業は頗る集約にして間作を爲し二毛作をなし風土佳良なるに尙且斯の如くなる所以は、必竟我農業が勞力的集約なるのみにして、智識資本は未だ多く之を應用せざるに因る。試に種子、肥料、農具、收穫物、家畜、耕耘の方法等に就き仔細に觀察を下す時は何ものか完全なりと認め得べき、又耕地は依然千百年來の狀態を保存して進步的農業を行ふに適せざるなり。去れば耕地を整理し農法に改良を積む時は現時の五百萬町步よりして尙幾多の生產を加ふべし。之に加ふるに四百五十萬町步の未開地を利用する曉は能く現今に一倍せる人口を養ふに足るべく、工業用の原料も亦敢て缺乏を感ずるとなかるべし。

第二十一節　農業勞働者の減少は必しも憂ふへからす

或は曰く農業の勞働者は次第に減じて工商業に移り農業隨て衰微すべしと、勞働者の移轉は或る程度までは事實なるべしと雖、之が爲に農業衰微すべしと言ふは一を知て二を知らざるの論定なり。夫れ我國は比較的小作人多く又五反百姓水呑百姓など云へる細農少からずして農家一戸の平均耕作地は一町歩未滿なりとす。是農業者過多の徴にして、斯る細農に對して農業の進歩を希望するは寧ろ困難なり。耕地を整理し牛馬を使役し器械を使用し農法を改良し勞働法を變更するときは一人の功程大に進歩し、一戸にして家族のみの力に依るも忙事に助手を用ふるときは平均二町歩を營むを難しとせざるべく、又少くも二町歩以上の農場にあらざれば子弟を敎育し適當の流動資本を備ふるの餘裕なく、且智識機械を應用するの餘力なかるべし。簡易なる計算に依て之を示さんに、一町歩の田地より二百五十圓、一町歩の畑地より百五十圓を收入するとせんに、合計總收入四百圓に過ぎず、自ら役して利益五割ありとするも二百圓にして一箇月十六圓六十錢に當るのみ。されば今日五反百姓の困究は想像するに餘あるべし。思ふに農業敎育の進むに從て地主中自ら五町十町の農業を經營する者あるに至るべく、小作人も亦一町は二町に、二町は三町と次第に規摸を增大すべし。是寧ろ進運に屬するものと謂ふべく、勞働者の減少は幾分其誘因となるの利なしとせず。唯變動の急激に來ることあらんか、或は其結果收拾する能はざるに至るあらんことを恐る。是爲政家の注意を要すべき點なり。

第三章　日本帝國及び帝國の農業に於ける米穀の地位

第一節　米は農本なり

農は國本の語に對して米は農本なりと謂ふべし。日本人種は一般東洋人種に於けるが如く米食者にして、米の需要は必要的に人口に伴隨し、人生と米穀とは離るべからざる關係を爲せり。去れは人口增殖し土地開拓せらるゝ毎に先づ作らるゝものは米穀にして、之に續ひて他の農產物の生產せらるゝを見る。實に米穀は帝國の最大物產にして同時に農產物の王なり。米を作る田の面積は二百七拾四萬五千町歩にして畑地二百二十八萬六千町歩に對し四十五萬九千町歩を超過し其法定地價に於ても一反歩三十五圓九十八錢は畑一反歩九圓五十三錢に比し二十六圓四十五錢の超差を有し、全面積の計算なれは田九億八千七百七拾四萬三千九百七十五圓、田畑二億千七百八十五萬四千六百六十三圓にして其差七億六千九百八十八萬九千三百十二圓なり。而して一年の生產は凡四千幾百萬石、五億圓にして、畑及び牧畜の全生產に比して相讓らず。關係斯の如く至大なれは米穀の利害は則ち農事の利害にして、決して小生產物の消長に於けるが如く唯其物の盛衰に止るのみにあらず、實に農事の振興又は破壞に價するものなることを思ふべし。今此の道理を一目瞭然ならしむるが爲に左に重要農產物の面積を比較數字と圖とに依て示すべし。

日本全面積一に對する重要農產物作付面積比較表

日本全面積	一、〇〇〇
米	〇、〇七三〇
麥	〇、〇四六六
大小豆	〇、〇一四八
桑	〇、〇〇七九
甘藷	〇、〇〇六九
粟	〇、〇〇六一
蕎麥	〇、〇〇四五
菜種	〇、〇〇三八
茶	〇、〇〇一五
藍葉	〇、〇〇一二
煙草葉	〇、〇〇一一

日本全面積に對する重要農作物作付面積比較圖

日本全面積

米　二、八三九、五五〇、町二段

大麥、小麥、裸麥　一、八〇九、八二二、六

甘藷　二六八、〇七〇、町五段

粟　二三八、七四二、〇

蕎麥　一七六、一四四、四

菜種　一四八、四〇四、八

大小豆　五七五、二五一、一

桑　三〇七、〇八四、七

茶　五七、八八三、一

葉藍　四七、八二四、八

葉煙草　四一、六四七、二

備考

一、日本全面積　二萬四千九百九十八方里、入(臺灣及澎湖島を除く)なり第十九統計年鑑に據る

二、作付段別　明治三十二年の調査にして第十六次農商務統計表に據る

第二節　米穀は最利益あり最安全なる農産物なり

米穀は農家の生産物中最利益あり又最安全なるものに屬す。先つ其安全なる所以を說かんに(一)稻は土地と水とあれは比較的容易に生育するものにして農家の

功拙に拘らす米を作ることを得へし。(二)去れば之に加ふるに人爲を以てし能く土地を耕耡し、能く水を灌排し種子を撰ひ、適當の肥料を施し、收納及ひ調製に注意するときは品質愈善良となり收穫益々增加す。之を一言すれは大に利益增加の餘地あるなり。例は人爲を加ふること少ふして一反歩一石を生產する土地は人力を加ふること多きときは能く三石以上を生產するに至るへし。(三)或は曰く稻は病蟲害に罹り易しと、是人爲問題にして唯病蟲害の蔓延するに一任するときは勿論收穫に影響すへしと雖、耕地を整理し排水を能くするときは概ね病害を豫防し得へく、又卵、蟲、蛹、蛾の絕滅に注意すれは蟲害を驅除し得へきことは現に明確なる所なれは、苟くも農家其本分を盡すときは病蟲害の爲に米作の安全を失ふの憂なし。(四)又曰く稻は風水害即ち天災を蒙り易しと、然とも稻は比較的風水害に能く耐ふる者なり。又今日の風水害は一部分は天災なりと雖大部分は山林荒廢に源因する所の人災なり。今や山林回復及治水の問題は世の洽く着眼する所にして、又漸く其緒に就かんとするに至りたれは、將來は次第に風水害を減して稀に眞の天災あるに止まるへきなり。(五)米は人生と離るへからさるものなるにより其需要も亦廣大且確實なり。去れは米を作りて賣れさるの例なく、上作のときは價下落すと雖其收穫の多きに依て償ひ得へく、又剩餘は能く之を貯蓄することを得へし。加之當時は海外輸出の途あり、而して凶年には價額騰貴するが故に收穫に於て失ひたる幾分は價額に依て之を償ふことを得べし。(六)多くの物產は他に賣却して始めて利益を收むべく、若し販路なきときは投賣又は廢棄に附せざるべからずと雖、米穀は之に反して販路澁滯の場合には自家の食料に消費して糊口に窮せざるを得べきなり。(七)是等の安全と利益とは則ち米農本たる所以にして、尙實地の說明を爲さんに、例は一家五口の農家ありて二町歩の畑地を耕作するとせば一反歩五圓の純益ありとして百圓を得べし、而して五石の米を購求するとせば之が爲に忽ち五十圓を支出するを要す。加之畑作のみなるときは勞力不平均又蓆俵、繩、草鞋等一切の藁細工品を他より購入せざるべからず、萬一其畑產物の販路閉塞する如きことあらば忽ち糊口に窮せざるを得ざるなり。之に反して此農家若し一町歩の田地五反歩の畑地を耕作するとせんか、其の田地三反歩の生產を以て自家用の食米に充て殘り七反歩より凡そ七十圓、畑五反歩より凡二十五圓の純益

を得べし。且米作と畑作と自ら忙期を異にするが故に自然勞力を平均し、又冬期は藁細工を爲し時間を利用し藁細工品に向て現金を支拂ふことを要せず。

第三節　米穀及ひ其他の農産は人口の增殖に比例して發達することを得べし

人口の增殖は既往の比例に依るときは明治五十年に於て凡そ左表の如くなるべし。

人口增加豫定表

次年	人口	前年比較增
三十三年	四四、七〇四、〇〇七	四四三、四〇三
三十四年	四五、一五一、八五二	四四七、八四五
三十五年	四五、六〇四、一八三	四五二、三三一
三十六年	四六、〇六一、〇四六	四五六、八六三
三十七年	四六、五二二、四八六	四六一、四四〇
三十八年	四六、九八八、五四八	四六六、〇六二
三十九年	四七、四五九、二七九	四七〇、七三一
四十年	四七、九三七、七二六	四七五、四四七
四十一年	四八、四一四、九三六	四八〇、二一〇
四十二年	四八、八九九、八五七	四八五、〇二一
四十三年	四九、三八九、八三七	四八九、八八〇
四十四年	四九、八八四、六二四	四九四、七八七
四十五年	五〇、三八四、三六八	四九九、七四四
四十六年	五〇、八八九、一一九	五〇四、七五一
四十七年	五一、三九八、九二六	五〇九、八〇七
四十八年	五一、九一三、八四〇	五一四、九一四
四十九年	五二、四三三、九一三	五二〇、〇七三
五十年	五二、九五九、一九六	五二五、二八三

本表の年々人口の增加率は一〇〇に付一、〇〇一八なり其算出左の如し

二十二年より三十一年に至る十ケ年人口　二十三年より三十二年に至る十ケ年の人口增加數

418,106,528＝　418,594＝100＝1.0018

斯の如き勢を以て增殖する人口に對し、我國の小土地は到底其衣食乃至工業の原料を供給するに足らざるにより、宜しく今に於て其計を爲すべしと言ふ者あり。然ども前來示す所の如く我國土は非常なる生產餘力あることを記憶せざるべからず、今より十五年の後の人口假に盡く帝國內に現存すべしとするも、今日に比し七百萬人の增加にして平均八斗三升九合の米穀消費（農商務省の調査に依るなり）として、今日よりも五百八十萬石の增收を要す。去れば今日の田地二百七十五萬町步に付一反二斗の增收あれば之を供給するに足るべく是耕地整理及び農事改

耳の結果容易に期し得べきことにして、之を加ふるに新田の開發を以てすれば決して前途の米穀其他原料の供給不足を告ぐるの恐なしと謂ふべし。

第四節　米作と人口との關係を再說す

衣食住の三者中最移り難きものは食物なり。衣服及び家屋には開國以來時々變遷ありしが如く、又今日に於ては全く從前と異りたる洋風の家屋に住居し、洋服を常用する者少からざるのみならず、其風益々流行す。食物に至りては否らず、日本に在りて米食を廢する者は絕無と謂ふべく、又貧賤者の是迄米食を爲し得ざりし者は米食を爲すを以て生計の進歩なりと爲せり、稀には三食の中一回は麵麭を用ひ乳を飲む者ありと雖、概に一小部分に過ぎずして米穀の消費は現在及び將來に於て變ずることなく、人口の增殖と共に益々增加すべきなり。然らば我農業は將來增加する所の人口に對して能く米穀を供給し得べきや如何は、則ち世人の最知らんと欲する所にして而して前諸節に於て土地の餘裕あること、農事の改良に依り增收を期し得べきことを述べたり。要は則ち米作の利益あるや否やに在りて其利益ある間は土地新たに拓かるべく、多額の資本も投ぜらるべく農事の改良も

絕えず行はるべし。勿論土地の面積には制限あるに依り無限に人口增殖に耐ふべしとは云はず。然ども人口の一國內に增殖するにも亦自ら制限あり、主として國內の事業に伴ふものにして而して國內の事業は土地に制限あるが如く又或る制限あり、英國の隆盛を以てすと雖其國內に增殖する人口悉く國內に止まらずして、事業を求めて世界の各方面に殖民又は移住せり。獨り移住の盛ならざるは人口の年々減少する佛國のみにして、獨逸の如きは農工商業相共に發達するに拘らず、年々幾萬の民は外國に移住して東北方は勞働者の拂底なるに苦めり。伊太利亞より出つる移住民の多きは又皆人の知る所なり。去れば人口は理論上無限に增殖すと雖決して無限に其產地に在留する者に非ざることを信ずると同時に我農業は能く我國民に食物を供給するの力を有するものなりと斷言せんとす。既に一昨年の如きは米作豐收を告げたる爲秋末大下落を爲し韓國にすら輸出を爲せり、以て我米產の餘裕あるを知るべし、而して農事改良され、新地開墾され、災害減少するに於ては我米產の增加は又殆ど際限なからんとす。唯其實際に際限なく增收を見ると否とは前に言ふ如く米作の利益如何に在りて存す、（人口と米穀との

關係數量に就ては明治三十四年十一月十三日の官報上農商務省の調査報告あり）

第五節　米作は小農の經濟に適當す

我農業は悉く小農なり。去れば我國には小農に適するの經濟策を以てせざるべからず。其策如何と云ふに力めて現金を支出することを節減するにあり。之が爲には先づ食料（米、麥、野菜、豚、禽等）を自ら生産するを以て第一要義とす。近く北海道の實例に依て論ぜんに、北海道は當初米を作ることをなさざりし故に平均凡三町歩の畑地を經營するの農家大小豆、麥、亞麻、甜菜等を作りて數百金を得たるも、自家の必需品は之を他より買入るゝの方法を取りしにより、其收入の大部分は米と酒とに奪ひ去られ、且貨幣を以て物を買ふの習慣は益々浪費奢侈に流れ易く常に窮々として生活し、農事の改良を爲し遂ぐるの餘裕を見出すこと能はざりき。然るに近年米作行はるゝに至りて其米の自家用に供したる殘餘と畑の收穫物とを賣りて現金を收入し、而して此の現金は日常の必需品に對して支拂ふの必要なきに依り或は節儉貯蓄し或は家屋を改築し倉庫を建て乃至家族の衣類を改め、馬を買ひ、農具を新にする等の費に供し、初めて農業經濟の途立つに至れり。去れば畑

のみの村落と田畑兩存の村落とは一目して發達の狀況を異にするを認むべく、今や北海道の米作は益々發達し、田地の地價は畑地に數倍するに至れり。之を以て農業の安全及び農家農村の健康なる發達には米作の缺ぐべからざるものたることを了解すべし。資本を以て營ふればこと田作は固定資本の如く畑作は流動資本の如し、兩資を合はせて始めて經濟的農業行はるべきなり。主副を以て營ふれば米作は主、畑作は副にして、此主作ありて他の產物、工業原料等も廉價に生產され得べく、米作も亦此副作ありて利益的に營まるゝなり。

第六節　勞働平均し耕作循環せされば農業の利益を擧くること能はず

勞力の平均と、耕作の循環とは農事上最切要なる事件なり。如何に有利なる作物も之を年々耕地の全部に耕作するときは需要供給の度を失ふて損失に歸するは勿論、農事經營上爲すべからず、爲し能はざるのことたり。元來我國の農業は耕作循環に餘り重きを置かざるの習慣なれども、是は作る毎に畦條を代へ、根の直下に肥料を施し、奇麗に除草する等必竟勞力の充分なるに乘じて行ふ所の農法にして

之が爲に地力の損害を補ふを得たりと雖、追々勞力不足し、牛馬耕を行ひ、肥料を土地の全面に施す樣になりては今日の如く連年同一作物を同一地に作ること能はざるに至るべし。去れば土地の利用に於ては一は畑、一は田を備へ、畑は各種の畑作物を輪作し、田は夏は米、冬は乾かして麥、菜種、綠肥作等を作るべし。今の田地は米一作の場合を多しとし二毛作を爲すは二割七分に過ぎずと雖、耕地整理普及し、乾田の利を悟るときは二毛作は次第に擴張すべく、田は一年間に米作地と畑作地と二度の効用を務め、田地の利益彌〻增進すべし。又勞力の平均上田畑の混合は極めて好都合なり。何となれば米作の忙期は田拵へ、移植收穫並に時々の除草の場合に在りて其他の閑時は普通畑作の多忙なる時期なればなり。而して冬期は田畑の事業共に閑なるにより、此の時を以て農産物を整理し、人工を加ふる等の事を爲す、就中何れの農家にも必要なる藁細工品は自ら生産したる藁を以て此閑時を利用して一年內の需要に對し準備するは大に農家の經濟を助くるものなり。是等の道理を知らざる者の間には往々暴論を爲すことあり、米田を廢して桑田となすべしと云ふが如き是なり。現今の桑田凡三十萬町歩は尙次第に增加するを期望すと雖、今俄に二百七十萬町歩の桑田を新に拓くべしとせば、現今の九倍の地積なり、假に一倍六十萬町歩なりとしても如何にして此桑園を管理經營することを得べきや、如何にして此桑葉を利用して蠶兒を養ふの廉價なる勞力を得べきや、又如何にして其生產物を處分することを得べきや至難の問題なり、言ふべくして行ふべからずとは斯かる暴論の謂ならん。養蠶專門家は皆謂へり養蠶は大規模の專業と爲すときは必ず失敗す、宜しく農家の副業として春夏秋蠶を以て農閑の時と及び强き勞働に適せざる婦女老幼の手足とを利用するときは最生產費を減し又安全なりと、是則ち勞力平均及び利用の眞理より生れ出てたる實際の結果に外ならざるなり。我農家經濟の狀況を一言すれば猶職工が或勞働に服して一定の賃錢を收得すると同じく、つまり農業と云ふ勞働に服して相當の賃錢を得るに異ならず。去れば農產物の收支計算に於て人夫賃を差引くときは何れの農作も利益あること稀なり、而して尙能く農業の成立する所以は其人夫賃は農家自ら收得するを以てなり。去れば勞力の一年全部に渉りて平均し、且多量なるは農家の所得多き所以にして農家經濟上最重要なる點なり。是他の職業に於ても同一の理

にして元來人の勞力功程には制限あり、一日にして數十日の勞働を爲し遂げんとするも能はず。去れば何職業を問はず繁閑平均して勞働一年に渉らざれば一年の所得を占むること能はざるを知るべし。元來我が國は人多く土地少く、地價從て高貴なるに依り、殖民地又は廉價の土地と異なりて切に土地を尊重し、最其經濟的利用に注意せざるべからず。蓋し土地高價なれば生産物も亦從て高價なるの理なれば、土地の利用及び勞力の平均に依て生産費を減ずること最必要なり。今日農産物の比較的廉價なるは我農業に在ては此二點に於て稍や要領を得たるに依る。例ば米麥に次ぐの生産たる蠶絲の如き他の農業就中米作と雖て之を行ふに依り生産費を減じて能く外國の競爭にも耐へ得るなり。今の農産を悉く單獨事業たらしむるときは其成立するもの稀なるべきなり。

第七節　土地は適當の作物を以て利用することを要す

各作物は土地に好惡あり、又之に依て各種の土地を利用することを得べし。傾斜地は牧場、桑園、茶園、果樹園等に利用すべく、平地は其用最廣しと雖、卑低の部分は之を米作に利用すること最可なりとす。米田を變じて桑園と爲すべしとの言の暴なるは前に論じたるが如く、又其地位よりして今の米田には桑園に適せざる所多し。一朝米作の衰退する場合ありとせんか、之に代るべきもの斷してあらざるなり。近年棉作、蔗作の衰ふるや、素と棉蔗は水利の不十分なる平低の砂土に作りたるが故に、之を米田に變ぜんには水足らず、多くの畑作物には地味適せず、農家の困難名狀すべからざるものあり、僅に陸稻、甘藷、落花生の如きを塞ぐと雖、當時の棉、蔗に比すれば大に其利益を減じ地價も亦下落せり、其盛時に於て十萬町歩なりし棉作が今減じて三萬三千町となり（甘蔗は耕作面積不詳なれども中國四國の衰頽は世人の熟知する所なり）し場合に於て既に此困難あり、二百七十萬町歩の水田が敢て全部と云はず、其十分の一即ち二十七萬町歩を減じたりとして之に代るものを見出すこと能はず。されば米田の衰退は農業の破壞なりと斷言するを憚からざるなり。

第八節　食料農産は外國に於ても農本の地位を有す

我農業と米穀とに於ける如き關係は外國に於ても之を見るべし。唯彼は米を食せざるに依り田を有せず、其畑作としては常食に供する各種の麥を以て最主なるものとし、又肉食を常とするに依り多くの牧場を有せり。牧場は獨り食用の肉乳を產する外、又生きたる動物、毛皮等の需要ありと雖、其安全事業たる所以は主として常食の肉乳を生產するに在り。各國に於ける麵麭の主材料たる小麥の作地と肉の生產地たる牧場とは左の如し。

各國耕地牧場比較表

一八九五年

	耕地	牧場
	百万エーカー	百万エーカー
英	二〇	二八
佛	六七	二三
獨	六五	二三
露	二五五	三三五
墺	二	三三
伊	三八	一五
西班牙葡萄牙	三六	二九
米	二二六	三九七

一八九六年

	小麥作付反別	百万エーカー	耕地百に付牧場	耕地百に付小麥作付反別
	一、七		一四〇	八、五
	一七、一		三四	二五、五
	四、八		三四	七、四
	三一、九		一三九	一二、五
	一〇、九		六三	二一、〇
	一一、三		三九	二九、七
	八、五		八一	二三、六
	三四、六		一七六	一五、三

第九節　藁は農業に缺く能はざるものとす

米穀と農業との關係を審にするには米作の副產物たる藁と農業との關係も亦併せて之を觀察するを要す。藁の價額は勿論遠く米穀に及ばずと雖、其必要の點に至りては又之を農業より缺くこと能はざるなり。農家若し藁を缺くときは從來慣用の藁細工品を失ふて之に代用するものを得るが爲には幾層倍の高價を拂はざるべからず。而かも藁細工の如き實用に適するものは他に其比を見ざるなり。先づ米穀其他總ての農產物を包裝するに俵を要す、總ての結束を爲すに繩を要す農民が穿つ爲めに草履、草鞋を要す、農產物を處理し物を貯ふるに蓆を要す、其他蓋座、折藁、春、馬沓、屋根葺藁等の用あり、而して俵、繩、屋根葺藁の如き獨り農家の用のみにあらずして廣く一般に用ひらる、又貴賤を問はず日本の家屋に附隨せる疊床は藁を以て編製するものにして、廉價に多量を得らるべく又彈力あり冷熱に感せずして疊床に適當すること藁の如きものあらざるなり。蓋し藁の產額は每年略ぼ二十五億貫、七千萬圓なるべく、其內重なる用途凡そ左の如し。

稻藁用途比較表

	數量	價格
稻藁	二、五三五、四九六、六四〇	六九、七二六、一五七
俵	八九、七一二、三九八	八、四一〇、五三七
疊床	五三、四五三、一六九	六、四九〇、七四二
繩	一七、五〇〇、〇〇〇	一、三六一、一一一
草履、草鞋	一〇、五〇二、五九六	二、三六三、〇八四
蓙、折薬	九、七四五、三〇七	三四一、〇八六
馬沓	三、三三四、一六四	一八三、三七九

右の外尚藁の缺くべからざる關係あり、即ち家畜の飼料寢藁幷に之より生ずる肥料の用途是なり。藁は滋養を含み柔軟にして且彈力あり、家畜之を嗜食し草と共に飼料敷料の基礎を爲す、而して糞尿を混じたる寢藁は植物必要の諸成分を總有し、效能徐次又肥料の基礎とす、且土質に遊機物を附し理學性の改良を爲し、何れの土地何れの作物にも施用すべし。若し此藁なくんば牛馬を養ふこと殆と困難なるべく、少くとも大に家畜の利益を削減すべし、前表に記載せざる殘餘の多量の藁は則ち專ら飼料、寢藁及び肥料に利用せらるゝものと知るべく、此萬能貴重なる藁は其進退を米作と共にするものなり。

前に米作を爲さゞる北海道農業の不經濟なることを述べしは啻に米穀に因て然るのみならず、又此藁を缺くに因る。去れば北海道に米作行はれ始めたる際、農家はたとひ穀粒稔らざることあるも藁を生產して自家の用に供し、殘餘を他に賣却するの利益を以て滿足なりと言へり。明治三十二年は北海道の米作地八千七百六十三町歩、收穫九萬八千三百四十二石に達したりと雖、尚藁細工品を輸入すること凡百十三萬圓、靑森縣は其主なる輸出地にして非常の利益を占む、或は曰く麥稈を以て藁に代用すべしと、麥稈は其の性質を異にし家畜の用を除きては決して稻藁に代用する能はざるものなり。

第十節　糠の用途も亦輕んずへからす

藁に次ひて糠に就き一言すべし。糠は皮膚を洗ふべく、野菜を漬るべく、又肥料と爲すべし。是米の副產物にして比較的廉價なるに依り廣く利用せらる。糠の生產凡そ一億千六百十七萬九千八百三十二貫、其價千七百四十二萬六千九百七十五圓、或は皮膚を洗ふには石鹼を以てすべく、肥料には他の物を以て之に代ふれば可なりとする者あらんなれども、同一の目的を達するに高價を拂ふことを要し、漬物に至りては貴賤に論なく之を食用し、貧賤者に在りては米と漬物のみを以て生活

を續くる者あり、其漬劑所謂糠味噌に於ては糠に代用するものあらざるを以て見れば、糠も亦大なる社會的關係を有するものと知るべし。

第十一節　米作の收益を論ず

米作の收益如何は最重大なる問題なり。明治三十四年秋農商務省農事試驗場員に托して最寄地米作收支計算を調査せし結果は左の如くなり。

米作自小作人收支計算表

地方	總收入	玄米一石の價	小作人利益 人夫賃を支拂ふものとして	人夫賃を自ら收入ふものとして	自作人利益	田地時價	時價百圓に對する自作人利益の比例
	円	円	円	円	円	円	円
陸羽支場	一七、一二	一〇、〇〇	△一、〇七	三、五一	六、七〇	一五〇	四、四六
北陸支場	三〇、六二	一〇、二五	△〇、〇九	六、七八	九、七六	二〇〇	四、八八
山陰支場	二五、四〇	一〇、〇〇	△〇、〇三	五、四〇	八、一八	二一〇	三、八九
東奥支場	二二、七〇	一〇、〇〇	△一、八四	五、七三	六、三一	一〇〇	六、三一
東海支場	二六、七九	二二、六〇	△三、六三	三、〇六	三、二五	九五	三、四二
畿內支場	三二、二二	一一、〇〇	△〇、九七	九、九五	一二、八二	一七五	七、三二
山陽支場	三〇、二五	一一、〇〇	△〇、五五	八、六〇	一二、九八	三〇〇	四、三二
四國支場	三一、五〇	一二、〇〇	七、五八	一四、八〇	一四、三〇	二五〇	五、七二
九州支場	三三、二五	一二、五〇	一、六九	九、三四	一三、八〇	二七五	五、〇二
東京本場	二三、六〇	一二、〇〇	一、二〇	六、六〇	一〇、八九	二五〇	四、三五

〔備考〕△印は損失なり

前表に依て觀察するに氣候温暖、農業集約なる地方は隨て總收入多し、之に對する經費も亦從て多しと雖純益も亦之に相當せり。此表に於て四國支場の利益特に多きは經費を低く積りたるやの疑あり、又畿內支場の地價に對する利益の比例稍や高きは地價を低く積りたるやを疑ふ。然ども前表は大躰の觀察を爲すに妨なく、先づ小作人より論ぜんに、人夫賃を全部支拂ふものとすれば概ね損失となる、又自ら人夫賃を收入するものとして一反畧ぼ七圓の利益なり、然るに植付收穫等の忙期には多少勞力の補助を要すべきに依り、人夫賃の全部を收入し得ることは稀にして之より多少純益を減ずべし。自作人の利益は凡十圓にして最可なりと雖小作人は即ち土地を所有せず、地主は自ら耕作する者稀にして自作者の存在すること少きは甚遺憾なり。將來は力めて自作を奬勵するの方針を採らざるべからず。然るに土地の時價に就て論ずるときは自作人の收入も僅に不動產の五分に當るに過ぎず、蓋し小作人が五六圓の純益を以てしては僅に一町歩內外を以て生

活する者の難況察するに堪へたり。自作者と雖一反十圓の純益ありとして三町歩を耕作せざるは尋常の生活を爲す能はざるべし。次に他の階級即ち地主に就て觀察せしに

米作地主收支計算表

地方	小作料 數量	小作料 價額	公租 地租地方稅及村稅	小作料より公租を引去りたる殘額即ち地主の利益	地價百圓に對する地主利益の比例
	石	円	円	円	
陸羽支場	一、〇〇	一〇、〇〇	二、四九	七、五一	五、〇〇
北陸支場	一、三五	一三、八四	三、九九	九、八五	四、九三
山陰支場	一、六〇	一六、〇〇	七、八〇	八、二〇	三、九〇
東奥支場	一、〇〇	一〇、〇〇	二、八五	七、一五	七、一四
東海支場	〇、八〇	一〇、〇八	三、二〇	六、八八	六、七七
畿內支場	一、三〇	一六、五〇	四、六五	一一、八五	四、五一
山陽支場	一、六〇	一七、六〇	四、〇七	一三、五二	二、六九
四國支場	一、〇〇	一二、〇〇	五、二八	六、七二	
九州支場	一、六〇	二〇、〇〇	七、八六	一二、一四	四、四一
東京本場	一、〇〇	一二、〇〇	二、三一	九、六九	三、八七
平均	—	—	—	九、三五	五、〇五

地主の利益も亦殆ど自作者の利益と近似し、一反歩に就て九圓餘、土地の時價百圓に付五圓なり。然ども地主の利益は常に小作料の減額を強求せられて約束の收入を得ること稀なれば、地主の所得五分は寧ろ最上の場合にして之を下ること多しと認めざるべからず。以上は總て米價十圓乃至十二圓五十錢の計算なり。若し米價十圓を下るが如きことあらば農家の立行かざるは明瞭にして、又諸物價及賃銀の騰貴せる今日米價十二圓を以て略ぼ平準と見做すべし。夫れ米價騰貴すれば小作人、自作人、地主皆利益し、之が爲に開墾の企業心を誘起し、又一般農事改良の氣運を養成すべし。前に縷述するが如く米作は農業の基礎にして地主も亦米田の收入を以て最確實且多量なりとするが故に、米價の維持乃至適當なる騰貴は農業問題に於て最希望すべき點なりとす、殊に國家及び地方の經費は世運の進歩に連れて益々增加するを免かれざるにより、農家の負擔力は力めて之を養成せざるべからず、之が爲にも亦米價の維持は極めて必要にして、何等かの原因により米價下落し米作衰退することあらんか、之と同時に負擔力は減退てし公費を支ふること能はさるに至ること必せり。

第十二節　米價の高低は最多の戶數人口に影響す

米價の高低は果して何等の影響ありやと云ふに一石一圓の差は四千萬石に對し四千萬圓にして、一反歩二石取の田地なれは一町歩の耕作者には忽ち二十圓の差益となる、而して之が利益の派及する部面は實に五百萬戸、二千六百五十萬人なり。之に反して米價の騰貴の爲に痛痒を感する者は下層商工業勞働者にして其數比較的僅少なり。又彼等に取り一石一圓の騰貴は一年五石を消費する家族に對し僅々五圓にして、一日一錢三厘七毛の差に過ぎず。其消費合計五百萬石なりと爲すも五百萬圓の差なり、此の少數少額の利益の爲に多數多額の利益を犧牲に供する能はず、況んや農家好況なるときは其購買力を增加して利益の多分は之を商工業に分配するものなるをや。

第十三節　支那米輸出解禁問題の一

清國は年來米穀の輸出を禁ぜり。然るに昨年清國と各國と通商條約改訂の時機を利用して其禁を解かしむべしとの說ありて當時之に雷同附和する者少なからざりし。余は其際即ち清國旅行前に於て本問題に付論述せし所の要領左の如くなりし。

抑も米田、米產の我農地、農產の過半を占むるは、米穀は邦人の常食物にして常食物の生產は常に農業の主眼たるに因る。尙麵麭と肉とを常食とする所の外國に於て麥畑と牧場とか農地の多分を占むに等とし。米產と他の農產とは恰も主副の如く又固定資本と流動資本との關係の如し。米穀を生產して自己の食料に供し且之を賣りて經常收入とするによりて始めて安全に且利益的に他の農產をも營み得るものとす。例は養蠶は最有利なるものと認めらるると雖、之を專業と爲す時は失敗に歸するは實驗上專門家の唱ふる所にして、則ち之を有利的に營まんには先づ米を作り又多少の畑作を爲して而して兼て養蠶を副業とする時は一般農業の餘暇を利用し老幼婦女の手足を使役して、以て比較的有利に且廉價に生產することを得るなり斯くてこそ又我蠶糸をして外國との競爭場裏にも優勢を保たしむるものとす。又米穀と同時に藁の必要と利益とを悟ることを要す。俵、薦、繩、草鞋等皆稻藁を以て冬期の閑時を利用して造るものにして、我家屋と離るべからざる疊床も稻藁なり。總て是等は麥稈にては辨すべからず。北海道が尙米を作ること少きにより一年百十三萬圓の藁細工品を輸入するを見て、其有無は如何に農

家の便否と農家の經濟とに影響するかを察知すべし。去れば我農家農民は他の農産こそ風土の適否等により之を作るものと作らざるものありと雖、米穀に限りては全國に通じて之を作らざる者なし。我輩は常に米は農本なりと稱せり。米の盛衰は則ち農業の盛衰にして、米の利害は農業の利害なれば、凡そ米に就て論ずる者は則ち農業に就て論するの心得を以てせざるべからず。今進て帝國に於ける農業の地位を觀察せんに、農業に從事する戸口は少くとも全戸口の六割を超へ五百萬戸二千六百萬人以上の最多數なれば、農利の多寡、農政の善惡は忽ち國民の最大部分に影響するものと知るべし。農業に利用せらるゝ資本は八十億圓の最巨額なり。農業は四千餘萬圓の地租の外、府縣稅收入の七割三分即ち二千八百六十六萬圓、町村稅收入の九割一分即ち二千九百五十四萬圓の殆ど全部を負擔し、其他所得稅、營業稅、酒稅、砂糖消費稅、雜種稅、寄附金等も亦其負擔を分つが故に、實に公費負擔力の最大要素なりと謂ふべし。土地は農業に依て最廣大に利用せられ、強兵は農村より供給せられ。社會は濃厚酸の如き都市と稀薄劑の如き村落との調和に依て健全なるとを得。農產物及び之が加工品の供給は內國貿易の主因たるのみならず、農業者は又一大需要者なるに依り五十三箇市、千五十五箇町の盛衰は則ち主として一萬二千九百三十六箇村の盛衰に基因す。諸會社銀行の現資本凡そ六億八千萬圓、是又地主の投下せるもの多く、既往將來農業收入の剩餘より直接間接に商工業に投資せらるゝもの決して少からざるは株金資本金の募集の難易は常に農產の豐凶地方の景氣不景氣に關するを以て知るべし。我農業の生產は不加工食料品に、加工飮食料品に、動物に、工業原料に正に十億圓を超ゆるの最大生產なり。又外國との貿易をも見よ、輸出入品の要部は何れも農產物又は其加工品に依て占めらるゝが故、農業の發達は輸出を增進し輸入を減少するの作用を爲すこと疑を容るべからず。農業の現在斯の如く、其前途も亦極めて多望なり。先づ今日の土地の利用法及び農法に改良を施すべき餘地多々あること世人の能く知る所、彼の農業勞働者減少の問題の如きも現今は一戸一町步平均の比例なるにより、個人の功程進步するによりて一個平均二町三町に上るは寧ろ農業の發達農家の幸福上望むべきことにして、今日より力めて其準備を爲すときは深く恐るゝに足らず、又傾斜十五度以下の平地にして尙農業に利用すべき土地凡そ四百五十

萬町歩あり、是灌漑、排水、機械の應用、畜産、園藝の發達等に依り開發さるべきものにして其利用さるゝと否とは則ち農利の多寡に關す。農利の多寡とは取りもなほさず農産物の價額にして價格貴ければ則ち利益多し、元來我農業の收利は低少にして判然企業の利益資本の利益等を認むるを得ざるを以て見れば、農産物の價格善良ならざること明なり。先づ現情に依て論ずれば矢張職工の勞働賃銀に於けると等しく農業なる職業に依て儲け得る所の賃錢を以て收利とするに過ぎざるものとす。然るに人の勞働には制限ありて一日に數日或は數十日分の勞働を爲し遂ぐること能はざるにより、勞力に依て收入を仰ぐ所の者は農業、工業、何業を問はず、繁閑平均し職業全年に渉りて日々適當の勞働を爲すを以て最健康最多利なりとす。米作の必要又此所に在りて、春稻種を蒔き夏除草灌漑し、秋收穫し冬藁細工を爲す時は勞力一年に渉るべし。之に加ふるに畑作、養蠶、豚禽飼養等を爲して勞力を平均し且功程を多くし以て一年の收入を增加すること農家經濟の最宜しきを得たるものとす。去れば米作の安全、米價の善良は實に絶對の必要事なり。而して米價一石一圓の差は四千萬圓に付四千萬圓に當り、實に二千六百萬人五百萬戶の現在農家と將來の農業の振否とに影響す。加之米價善良なるの利益は地主、自作者、小作人皆之に均霑すべく、少數の貧賤勞働者が米價の下落を喜ぶの比にあらざるなり。且又前にも言へるが如く農家は一大需要者なるに依り、米價騰貴の利益は農家の購買力に變形して其利益の多分を商工家に分配するは必然の結果なりとす。

以上の如き國家に重大の關係を及ぼすべき事件なるを思はずして、進んで解禁を提議すべしなど輕卒に論下する者あり。我輩其者流の理由とする所を一括して批評を加へんに(一)に輸出米解禁は支那の利益となり、支那の農業を發達せしむべしと云へり、如何にも善隣國の利益は之を希望せざるにあらずと雖、我れ自ら損して彼の利益を圖ること能はず。彼の農業殊に米作の發達は則ち我の米作結局農業の衰退を意味するとを知らざるべからず。又支那の利益も一の疑問にして中清、南清は果して利益すべきも其剩餘米が運送便利價格善良なる日本國に流入し之が爲に北清奥清に缺乏を來す如き事ありとせば、清國に取りて大に考慮すべき問題なりとす。(二)に支那米の輸入は我米價を下落せしめ我米穀の輸出を增進す

るの二重の利益ありと云へり。我輩は之に答ふるに支那米の輸出解禁は我米價を下落せしめ我輸出米の販路を奪ひ去らるゝ二重の損失ありと云ふを以てすべし。(三)に凶年には我米穀確かに不足し、價格暴騰するにより、宜しく支那米の輸入に依て之を防壓すべしと云へり。成程凶年に米穀不足し價格騰貴するは事實なりと雖、稀に起る所の凶年の爲に常時の大不利益を顧みざるが如きは國家の大計を誤るものと謂はざるべからず。又凶年に米價の騰貴するは或程度迄は之を是認せざるべからず。何となれば是れ農業保險の如きものにして、之に依て幾分か收穫の減少を償ふを得べく、若し凶年の米價豐年と同一ならんには農家必死の困難を感ずべければなり。(四)に米價は變動甚しく從て諸物價の動搖を來し、有害なるにより支那米を輸入して平準を保たしむべしと云へり。然ども米價の急變動は全國幾多取引所の空相場に基因し、外國米種の增加は寧ろ相場の材料を增加するに均しからん。(五)に我物價近年大に騰貴せること米價の騰貴に原因するが故に支那米の輸入に依りて之を低下せしめざるべからずと云へり。何ぞ知らん、今日の物價は米價の爲に騰貴せしにあらずして、貨制改革戰後通貨膨脹及び其分配の狀況に基因するものなることを、又今日の米價貴きに過ぐると言ふ者あるも是れ貨制改革を忘れたるの論にして、又他の物價との比例、賃銀、生産費等により觀察する時は決して然らず、小作人は米作賃銀の全部を收入し得ざる場合多く、地主は土地時價の五分以上を收入する場合少し、加之前に言へる如く米價騰貴の利益は最多數の人口に影響し、農業の現在及將來の隆昌を來し、都市の繁榮を招くものとす。(六)に印度米朝鮮米は既に輸入の道開けたるに支那米のみ之を拒むの謂れなしと謂へり。否らず、印度米は我産米と其品質を異にするより下層の需要凶年の補充として之を用ゆるに妨なく、朝鮮米は未だ多く我農業を害するに至らずと雖若し有害の現象あるに於ては其時に於て手段を施すべし、獨り支那米は其品質價格及び分量に於て優に我産米と競爭し遂には我米作を壓倒するの勢力あるを想像することを得るに、何の必要ありて輸出解禁を提議せざるべからざるや。(七)に我米産衰退するとするも之に代ふるに有利の桑蠶業ありと云へり。是れ暴論にして我米田二百八十萬町歩を悉く桑園と爲すは地狀之を許さゞるのみならず、如何にして之に對する蠶絲業の勞力及び資本を得んとする、又如何にして其生産物

の販路を見出さんとする、二百八十萬町歩はさてをき現在の桑園の生産物は之を內國と外國と兩方に消費すと雖、新開三十萬町歩の生産は概ね之を輸出に當てざるべからざるに、俄かにかゝる大需要を見出すこと能はざるは勿論なるにより、一方には價格暴落投賣の結果となり、一方には一時に蠶絲業を膨脹したる爲勞力拂底生產費昂上して折角の蠶絲業に一年を俟たずして破滅に歸すべきなり。(八)に輸入棉糖の爲めに我棉、蔗の耕作衰微したるに拘はらず、農家は別に困難を告げざりしと云へり。是事實を誤れるものにして、甘蔗は其面積を詳にせざるも畿內、山陽、四國等は大に衰へ、棉作は其盛時十萬町歩なりしも今は三分一に減じたるに元來棉蔗は水利の不足せる砂土に作りしが故に之を米田に變ぜんには水足らず、一般の作物には土質適當せず、漸く陸稻、甘藷又偶々落花生、煙草などを作りて其土地を利用すと雖、收利は舊時の棉蔗に及ばざること勿論なり。棉花七萬町歩を減じたる結果尙此の如し。今米作二百八十萬町歩とは言はず、其十分の一の二十八萬町歩を減じたりとするも之に代はるべき有利の農產を見出すこと決して能はざるなり。(九)に若し解禁を害ありとせば關稅政策に依り必要の場合に重稅を課することゝせば可ならんと云へり。既に此疑懼ありとすれば何ぞ始より解禁を提議することを爲すや且課稅すべきや否は年の豐凶等に依り時々生起する問題にして、其可否及び程度に就ては其都度議論沸騰、價格激變徒に投機恐慌の種子を蒔くに過ぎず。(十)に結局我農業生產は到底增殖人口の需要を充たすに足らずと云へり。我輩は之に答ふるに今より十五年の後則ち明治五十年の未來を以てせん

に既往の比例に依り當年の人口は今日に比し凡そ七百萬人を增加すべく、一人八斗平均として此消費米五百六十萬石を供給するには現在の田地二百八十萬町歩をや。故に國家の政策として農業の奬勵を爲し、地主、農民其職業に怠らざるときか僅に每反二斗を增收すれば則ち足る、況んや別に新田の開發さるべきものあるは唯米穀のみならず必要の工業原料を供給するの目的は容易に之を達するを得べきなり。或は尙進んで人口は無限に增殖す、我農業は克く之にも堪ふるや否やを問ふ者あらん。我輩又之に答ふること易し、夫れ人は其生活と幸福との爲めに職業を求むるの性質を有す。故に理論上人口は無限に增殖すべしと雖、事實上國內の限りある職業に附着して其儘本國に存在するが如きことなし、必ずや職業を

求めて他の土地に移住或は殖民すべく、要するに茫漠たる前途は日進の今日に於て之を論定するの必要及び價値を有せざるものとす。

最後に一言を加へん。試に思へ支那米の爲に我米産の衰退を來すこと今日の産米四千餘萬石五億圓の全部とは云はず、僅に十分の一の五千萬圓に當る生産を減じて之を輸入に仰ぐとするも、生産に五千萬圓、購入に五千萬圓併せて一億圓の國損なり、而して能く之に代るの農産乃至他の生産あるや、決して近き年月に之を期することと能はず。五千萬圓の毎年の正金流出を償ふの財源豈容易に得べけんや管に農業の衰退のみならず商工業も亦發達の餘資なく、兌換の基礎は危殆となり斯かる狀態の下に外資の輸入は尚更夢想に歸すべきなり。夫れ國家の健康及び繁榮は農工商三業の共に發達するに依るが故に國家は力めて此調和を計らざるべからず。其發達の爲めには農工商共に適當の保護奬勵を加ふるの必要ありて時としては商工家は稍や高き食物を消費せざるべからざる事あるも、自國の生産物を常食と爲し得ることを以て滿足し、工業の經濟は一に食物の廉價に依賴することを爲さずして資本智識機械等の適用に依て生産費の節減を計るべし。農家も亦之と同じく工業奬勵保護の爲め稍や高き製造品を使用せざるべからざる事あるも、其自國の生産に屬することを以て之に同情を表すべし。農工商の相互關係は宜しく此の如くならざるべからざるものと信じて疑はざるなり。

第十四節　支那米輸出解禁問題の二

余は清國に渡ては米作上實地の觀察を遂げんことを欲せしも、主なる米作區域六省に亘りて容易に其一班だに窺ふことを得ざるに困しみしに、恰も上海の日本總領事館は我各領事館に通牒して米作に關する種々の報告を蒐集しつゝありたり。余は之を以て頗る時宜に適せる事務なりとし、又別個に各領事を煩はすことをせざりし。而して余は歸朝後其僅に爲し得たる觀察と經濟上の推理とによッ左の趣旨を以て世上の質問に答たり。（明治三十五年十月十二日の各新聞紙上に在り）

第一に將來清國に於て大に米作を擴張すべき餘地あるか否やと云ふことは最初に起るべき問題なるが、余の觀察では支那本部は殆ど開け盡したと謂て誤らずと思ふ。而して地形と云ひ、水利と云ひ、氣候と云ひ米作の適當地はどうしても揚子江一帶の土地で在て、上流の四川を始め、湖北、湖南、江西、河南、安徽、江蘇、浙江

の諸省が其主要地てある。而して此諸省は風土良好、人口稠密て清國中最能く開けて居る、其他の諸省は或は氣候適せず、或は地形、水利不便なるのみならず、既に他の作物を以て土地を利用し、人民又畑穀物を食ふに慣れたるにより俄に米作新興すべしとは思はれず。要するに將來米作擴張の餘地は一言すれば甚だ少しと云ふことに歸する。

第二に現在清國産米需要供給の釣合如何と云ふに、一昨年は千三百十七萬兩、昨年は七百五萬兩の米穀を輸入した。又昨年楊子江下流洪水の爲甚しき減收となり、今夏漢口上海等の都會は勿論田舍の小市街に至るまて米價沸騰し、人氣不穩とまてなれるは余の親しく實見したる所てある。此等の事情より觀察すれば格別なる豐凶の場合の外需給畧ぼ平均し他に溢出すべき剩餘なきことを想像するに足ると言て宜しい。

第三に改良事業に就ては蒸滊唧筒的の灌漑排水を行ふなり、堤防を築くなり、幾分米作地を增加する手段もあらん。又種子を撰び、肥料を加へ收穫法を更むるなど改良の餘地綽々として品質を善くし、收穫を增すを得ることを確信すると雖、凡そ何事によらず改良と云ふことは清國に於て最困難とする所で殊に農事に至ては頗る遼遠に屬することを疑はない。

以上說くが如く餘地少く、剩餘乏しく、改良遼遠なりとすれば少くとも影響急激ならず、解禁又何の恐るゝ所なきかの如くにして然らざるの理由が別に存するのてある。夫れ惡貨が良貨を驅逐するは流通貨幣の原則で、又金銀兩本位貨幣ある場合に金が銀に對して騰貴すれば金貨流出して銀貨のみ殘るは世人の普く知る所である。一體清國の産米を以て盡く所謂南京米則ち西貢、ラングウン邊の米穀と同品位のものなりと思ふが誤りの原因で、清國主要米産地産米凡そ三億萬擔一擔は上海地方にて百六十斤なり)の十分の三即ち九千萬擔を産出すと稱する江蘇省は特に良米を産する所で、我普通米に比敵すべきもの決して少からぬのである浙江省の一部の米も隨分宜しい。此江蘇米こそ即ち今云ふ所の良貨又は金貨に該當するもので在て、一たび解禁の上は忽ち清國より驅逐されて日本に聚積すること必然てある。此場合清國はどうするかと云ふに或は西貢、印度米を輸入し、或は米食の減少を以て補足することになるのてある。彼

の解禁さるゝとも輸出すべき剰餘はなく、剰餘ありとしても世界の米穀市場に印度品位の下等米を增加するに止りて日本に向て格別の影響はないと言ふ者は、是清國米に善惡二種あるを知らざる謬見と言はねばならぬ。

併し解禁論者の胸中には其日本への流入こそ望む所にして、我米價下落すべしと早合點する者もあらんか、是亦要領を得ざることになるのである。現に韓國に於ける米穀貿易を見よ、安かりし韓國米は今は大坂米價との差額誠に僅少となり、見すゝ無智の韓民に左右されて我商人の利する所殆ど無くなつた。是れ我商人の拔け駈け、競買ひの自業自得果なる如く、清國の米穀も亦我より買煽るに相違ない、且清商は韓人の類でなくして有力、明敏、團結的の者であるから高からず安からず丁度日本に輸出し得べき程度に米價を繫ぎ、我農作上の困難を增長するのみにて虻も取らず蜂も取らざるの結果に陷る事明瞭である。

唯我凶年に彼の有餘を仰ぐを利とするの說は一理ある樣なれども、臨時の出來事に備ふる爲に平素の利益を犧牲にすることは出來ぬ。又日本の凶年は大概朝鮮米と印度米とで都合がつくから今後は法外に米價の沸騰する憂はない。

序に朝鮮米の事を一言するか余は之を我常食物に融通することは國是の上から自然の結果と認めて居るのであるが之は別論に讓ることにする。右樣の譯で在て加ふるに解禁の結果として清國米價の騰貴は該國の現狀に於て地方官の大困難となり、引て由々しき大事をも生じかねまじきは本年の模樣でも別かつて居る(三十五年五月上旬盛宣懷機關上海新聞報に連載せる論說參照)斯かる兩國に益なきことに强て解禁を迫まる樣な、つまらぬ策は我賢明なる政府の斷じて爲さゞる所なることを確信せんと欲する中には清國の米を高く買て彼の購買力を增加してやるなどの片腹痛き慈善論もあるが、支那の購買力は決して心配に及ばず。我慈善を待たずして大に發達しつゝある。現在の清國の購買力すら日本は善隣、同種、同文でありながら一割二分を利用して居るに過ぎずてはないか。抑も現在の購買力は支那の口岸のみで各國經營の鐵道は今や清國の脊推に併行し、四肢にも脈絡を通ぜんとして居る、而して此等の企業國は無論力めて內地の購買力を利用せんとするのであるが、我國民就中商工業家は之に對して如何の覺悟かある、願くは食物低價などの消極觀念を一掃して彼

が無限の購買力を利用するの積極的勇氣を奮ひ大に準備をすゝめてもらひたきものである云々。

余の意見右の如くにして今後調査試驗又は觀察せんと欲する事項は左の如し。

一　日本人の需用に適當すべき米穀を產する地方及數量の調査(若し其數量にして眞實僅少ならんか、余のグレシャム原則により推定したる急激の危險は消滅するものなり。)

一　淸國に於ては良米を產し得ざるや、及產し得るやの試驗(現在に於ては熱帶地方の米穀は概して惡質なり、又一年二收の米穀も然り、然ども長江筋は熱帶にあらず、且二收もあれども一收多し、余は彼の地味氣候を以て充分良米を產し得ることを信ずる者なり。我國に於ても九州米は善良にして又近年鹿兒島縣下の米穀の改良の如き實に驚くべきものあり。米國南方の熱帶近接地に於ても我九州米種を栽培して好結果あり。畢竟淸國の現產は多年毫も種子の交換、種類の改良等のことに注意せざるに因る。而して試驗の結果果して能く良米を產し良價を占むるに依て靡然として其栽培を擴張せんか所謂一敵國なり。)

一　余は淸國の將來は人口增し、富力加はり、交通發達するに從ひ北方に亘て益々國內米穀の需要を增加するの傾を有すと思惟す。依て此國內需要增加と他日解禁の場合の輸出とに充るが爲新に水田を增加すべき土地及水利の有無方面等の觀察及調査。

外務省は明治三十五年十月二十七日發行通商彙纂第二百三十六號を以て上海總領事館の第一回報告を公示せり。是余が前に言へるものにして淸國米調査としては最精密なるものに屬し、能く緊要の項目を網羅し頗參考するに足ることを認む。之に依て余は又余の不十分なる米作調査を茲に登載することを廢するの幸を得たり。但し先年上海總領事館の報告に於ては江蘇外六省の主要米產地收穫を三億萬擔と見積り、今回は全國の產米を五億萬擔と推算せり。其根據は四億の人口が平均一日二合を食すると見たるにあれども、一日二合は一年七斗三升にして少しく多きに失するを思ふ。何となれば我國人は一般に米を食し殊に北方人は米を專食する者なるに尙全國平均九斗に滿たず。淸國に於ては北淸は米食の

量極て寡少なり、其他一般に麥黍粉を用ふるの習慣あるにより一人一合五勺餘即ち一年五斗五升位を以て實際に近しとせんか。然るときは一億二千百萬擔を減じて三億八千萬擔となる。又同報告中清國耕地の推算を全面積の凡そ二割となせりと雖、余は之を四割以上と認むること後に詳述するが如し。

第四章　清國國土の競爭力（專ら農業に就て）

第一節　人口及地積

先づ人口及び地積より觀察せんに、清國人口四億萬人とは久しく唱ふる所にして最新の調査は四億二千五百萬人なりと云ひ、一說には七億を超ゆべしと云へり。勿論人口地積共に明確の調査なきにより諸說を參酌して左の表を掲く。

清國人口地積表

	面積	人口	一平方哩人口	面積	人口	賠償金割附の爲め今回清國政府に於て調査せしと稱するもの
	（從來の記錄に依るもの）			（賠償金割附の爲め今回清國政府に於て調査せしと稱するもの）		
本部十八省	一、三三六、八四一方哩	三八六、〇〇〇、〇〇〇人	二八八、七人	三、九七〇、〇〇〇方英哩	四〇七、七三七、三〇五人	
滿洲	三六二、三一〇	七、五〇〇、〇〇〇	二〇、七	九四二、〇〇〇	八、五〇〇、〇〇〇	
蒙古	一、二八八、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一、五	三、五四三、〇〇〇	二、五八〇、〇〇〇	
西藏	六五一、五〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇	九、二	一二〇、〇〇〇	六、四三〇、〇二〇	
準噶爾	一四七、九五〇	六〇〇、〇〇〇	四、〇清方哩ト一、三ルキスタン	一、四二六、〇〇一	二、〇〇〇、〇〇〇	
東トルキスタン	四三一、八〇〇	五八〇、〇〇〇				
計	四、二一八、四〇一	四一二、六八〇、〇〇〇	一一、〇八一、〇〇〇		四二六、四四七、三二五	

蒙古西藏等は暫く現下の問題外に置き、支那本部と滿洲とに就て觀察を下さんに支那本部のみにて既に我臺灣を含みたる面積（一六二、三七三方哩）及び其人口（凡そ

四七、二六〇、六〇四人)の八倍餘を有す。滿洲に就ては後節に詳なり。

第二節　農産競爭力の原因

然ども人口地積の多大は未だ必しも其國土競爭力、就中農產競爭力の强大なるを示すに足らず。農產競爭力の强大は先づ地積廣大に、而して之に比して人口少く農法良巧なるに因るにありて、北米合衆國其適例なり。歐洲諸國は農法良巧なり、と雖土地廣大ならず人口稠密なるが故に反て多少の農產物を外國より輸入せり。左表は能く此事理を說明することを得

各國人口農地比較表

	人口	農地	人口一人ニ農地
	人	町歩	一反歩
日	四二、二七〇、六二〇	七、二二九、六九四	四ヶ二ヶ
獨	五二、二七九、九一五	二五、七六九、〇〇〇	四ヶ四ヶ
英	三八、一〇四、九七五	一六、六三四、四七五	八ヶ五ヶ
佛	二三、八九五、四一三	二〇、二三八、〇〇〇	九ヶ六ヶ
伊	三八、五一七、九七五	三六、九七七、〇九八	六町二ヶ六ヶ
米	六二、六二二、二五〇	三九二、〇〇〇、〇〇〇	

右に依て北米合衆國農產競爭力の絕大なることを知るべく、歐洲諸國をして戰慄せしむるの故ありと謂ふべし。獨、佛、伊の諸國が尙能く或る農產競爭力を有するは製糖釀造、纖絲等の加工生產を爲すに因り、英國が比較的多量の穀物を輸入するは其農地の多分を牧畜に供用するに因る。而して我國が少面積の耕地と多數の人口とを以て、未だ甚しく他國の農產物を輸入せざるは其農地の大部分を人の食物生產に供用して家畜を飼養すること少きと及び集約農法を行ふことゝに歸すべし。若し夫れ淸國は如何。

第三節　淸國の農地と農產競爭力

淸國農地に就ては凡そ七十年前に屬する戶部の調查ありて、之に依れば畧ぼ五千萬町歩なりと云ふと雖、余は全然之に信を置かず。左の前提に依て推定を下さんとす。

（一）土地廣大且多く平坦なり、農法は日本より粗にして收穫從て少し、力役に動物を使用すること多し、普く畜禽を飼養し其飼料は專ら耕作物に仰ぐ、此等の事情なるが故に歐米の如き牧草地なしと雖、人口一人に對する農地は日本に倍すべし。

（二）人口衆多なるにより北米大陸の如き農地比例を保つこと能はず、之を歐洲

大陸諸國に比するを以て事實を得るに近しと爲す。

右の前提に從ひ余は清國人口一人に付少くとも三反五畝の農地ありと推定す。今支那本部の人口を四億人と概算するときは農地一億四千萬町歩となり、全面積三億四千九百萬町歩の四割に當る。試に各國總面積に對する農地百分比例を見るに左の如し。

對總面積各國農地比較表

	耕地	放牧地及牧草地	合計
以	六二、七	一一、一	七三、八
洪	四三、七	二三、三	六七、〇
白	五三、五	一三、二	六六、七
獨	四九、三	一六、四	六五、七
關	三一、五	三三、三	六四、八
	五三、三	一一、一	六四、四
佛	二八、七	三六、三	六三、〇
英	三七、六	一九、二	五六、八
澳	一九、〇	三七、三	五六、三
瑞	四		四三、〇
米			三八、六
露	二四、〇	一四、六	

各國既に斯の如し、支那の大陸的地勢と其衆多の人口とを以て余は農地比例の四割を下ることなきを信ずるに躊躇せず。但し十八省中の各省に就て論ずるときは勿論粗密あり、例は南部廣西、貴州、雲南の三省、北部甘肅、陝西の二省は或は地勢山岳に富み、或は地質磽确其他氣候險惡、交通不便、人口寡少等により他の十三省とは大に異なる所あり、依て今此五省を除き他の十三省に就て見るときは人口三億五千萬人一人に付農地三反歩として一億五百萬町歩となり、總面積二億三千三百萬町歩の四割五歩に當る。之に反して五省の人口四千二百二十六萬人一人に付農地一町歩として四千二百二十六萬町歩となり、總面積一億二千六百八十五萬町歩の三割三分となる。思ふに少なき所は總面積の三割多き所は其五割平均四割は蓋し事實に遠からざるを信ず。

尙觀察を要する他の方面あり、即ち人口と國土面積との比例にして各國の比較左の如し。

各國一平方哩人口比較表

國名	一平方哩人口
白耳義	五八八、〇
英吉利	三四三、九
日耳曼	二九九、四
伊太利	二九三、三
支那本部	二九二、〇
西班牙	二六九、九
墺地利匈牙利	二二六、〇
瑞典諾威	二〇七、五
瑞西	一八九、〇
佛蘭西	一六〇、〇
丁抹	一五三、〇
洪牙利	一五〇、六

國名	一平方哩人口
希臘	九七、三
西班牙	九一、五
歐羅巴露西亞	五一、〇
瑞典諾威	二九、七
米國	二一、七
諾威	一八、〇
墨西哥	一六、二
智利	九、六
アルゼンチン共和國	七、四
秘露	六、六
ブラジル	四、五

清國の人口は世界諸國中最稠密なる部に屬すること此表に依て明なり。各國人の支那旅行記中にも到處農民の多數なると土地の開けたるとを記し、重慶地方の如きは巖上に物を作り、余の目撃せる地方に於ても低き山は大概耕耨せり。故に曰く支那本部は到底北米合衆國的の農産競爭力を有せずと。

第四節　清國農事の改良

清國の農地は既に開けたり、其農産と國內の需用と略ぼ平均せり。然とも同一面積に於て收穫量を增加すると品質を改良するときは後節に述ぶる所の如く尙十二分の餘地を存す。何となれば其農法、其器械、又其種苗、動物皆舊慣古物に屬すればなり。去れば今日より農事改良に意を傾け、農業敎育を始むるが如きは清國に取て得策なるや疑なしと雖、其改良進步の結果を見るは之を近將來に期すべからず。或る外人の書に清國の農民は斷じて動植物の種族を改良することを爲さずと記せり。余の見る所に依れば清人は獨り動植物の種族のみならず事物、風俗、習慣總て之を變更することを好まざる者なり。夫れ農事改良の極めて必要なるに拘らず其難くして遲きは何れの國に於ても經過を同ふする所、今や我國は農事改良の機關稍備はり農民の耳目確かに一級を進めたりと雖、進步の實蹟は自他の希望するが如く著明ならざるにあらずや。況や頑固の特性を有し、無敎育なる數億の清民をして改良の途に就かしめんとするは抑も至難の事と謂はざる可らざるにより、農事改良の結果として清國農産競爭力の發達を見るの時期は前途長久な

るべきを思ふ。

唯爰に農事の改良進歩と云はずして別に農産の發達を促すの一誘因あり需要即ち價格是なり。夫れ利益の念は人の常慾なるにより需要あるときは蠻人と雖或る生産を爲す、況や利慾の念全身に滿ちたる清國人に取ては此誘因の感化を受くること隨て敏捷にして、之が爲に強力なる農産競爭力を惹起することあるを忘べからず。何となれば利益少き甲の農産を止めて利益多き乙のものを以て之に換へ、所謂作物轉換を行ふべければなり。現に亞片生産の爲に四川其他各地に於て米田を減少し、又自國及日本の紡績業興れるによりて他作を減じ棉作を擴張するの傾向あるが如き是なり。

第五節　日本に對する競爭力

以上一般觀察に依れば作物轉換の一事の外清國農産の競爭力に於て目前恐るべきものなきが如しと雖更に對日本の事實問題として考究するときは其歸着之と異ならざるを得ず。

夫れ清國本部人口四億の八割を農民として三億二千萬人あり、又其面積三億四千九百萬町歩の四割を農地なりとして一億四千萬町歩あり、之を我人口四千五百萬人の六割を農人として二千七百萬人なると面積四千二百四十萬町歩の二割を農地として八百四十萬町歩なるとに比し、既に大數に於て彼は絶對の優勝者なり。

尙左表に就て各省の土地人口を觀察せよ。

清國人口面積各省比較表

省名	一平方哩人口	各省面積	各省人口
福建	五七四人	一〇、〇五三、八九〇町歩	二二、一九〇、五五六人
山東	五五七	一七、〇〇一、二五九	三六、二四七、八三五
湖北	四七三	一八、三九七、三一三	三三、三二二、八五〇
江蘇	四七〇	一一、六二〇、七三〇	二〇、九〇五、一七一
安徽	四二五	一二、六五五、一〇六	二〇、五九六、二八八
四川	四〇六	四三、五五八、一五二	六七、七一二、八九七
廣東	三七七	二〇、七四九、一四〇	二九、七〇六、二四九
江西	三四〇	一八、八四八、〇四一	二四、五三四、一一八
河南	三四〇	一七、四七三、六六一	二二、一一五、八二七
直隸	三〇四	一五、三九三、九四二	一七、九三七、〇〇〇
浙江	二九六	一〇、二二三、六三一	一一、五八八、六九二
湖南	二二八	一九、四〇七、九二五	二一、〇〇二、六〇四

山	二三一	一四、六九三、八二六	一二、二一一、四五三
陝	一二六	一七、〇〇〇、八三六	八、四三二、一九三
貴	一一八	一七、八五七、六三一	七、六六九、一八一
雲	一〇八	三八、一九五、〇二四	一、七二一、五七六
甘	七四	三二、七六〇、〇一三	九、二八五、三七七
廣	六五	二〇、四三四、二〇五	五、一五一、三二七

四	四	四一、四六六、七三四石	米
四	四	二〇、三九一、六七三石	麥
州	州	三、五六二、一七六石	大
南	南	一、八〇五、九九六	桑
蘇	蘇	四五七、六七四	甘
四	四	三〇〇、七八九	藷
		二七一、四四〇	粟
		二四五、七三九	蕃
		一六八、九九六	薯

四川は一省にして我全國より大なり、其他は二省若は三省を合すれば孰れも我國に伯仲す。清國本部平均人口一平方哩二百九十二人、我國の二百九十七人に比し畧ぼ粗密の度を均ふすと雖、其大陸的平地に富めるや毎人農耕地從て我に倍し比較造出力に於て超越せり。

事情をして一層明白ならしむるには我重要農產物の農作情況を示すに如かず。

日本農產物作付反別及收穫表

	種	作付反別	收穫
豆	小豆	二、八二八、四七九町歩	一、一九三、八三九石
畑	稗	一、八〇五、九九六	八六六、四四八石
藍	茶	四五七、六七四	八六四、六〇一石
蕃薯	葉	三〇〇、七八九	諸製茶七、六一二、一八八貫
煙草	馬鈴	二七一、四四〇	一六、五八二、二三〇貫
棉	黍	二四五、七三九	七一、七七五、四三三貫
麻	蜀	一六八、九九六	一〇、八四六、四五二貫
	大		三八四、四五二石
	麥		四、八九四、三二三貫
	蜀		二、六五二、七七四貫
	黍		一五三、〇七〇
	大		一二二、七八六
	麥		七二、五三八
	桑		四九、二六六
	園		四六、一八〇
	三		三八、二六二
	十		三七、一八三
	萬		三四、四一四
	町		二八、二六二
	歩		一八、二〇三

米二百八十萬町歩、麥百八十萬町歩、大豆四十五萬町歩、桑園三十萬町歩を以て面積の大なるものとし、其他は三十萬町歩を超ゆるものなし。蓋し清國の農地は我農地の二十倍以上なるべきにより其大生產の幾分を割きて我小需要に充つること現今既に難からず、況んや彼にして土地の利用に一層の進歩を加へ、農產競爭の實易思想を發起するときは我農地に對する打擊は實に測度すべからざるものあり と謂ふべし。

第六節　滿洲

支那本部のみにて既に斯の如し、之に加るに滿州ありて黑龍江省約十九萬方哩、吉林省約十一萬方哩、盛京省約六萬方哩合計三十六萬二千三百十方哩より成り土地總面積九千四百六十萬町歩、實に我總面積の一倍餘なり。ホシイは滿洲可耕地五分の一以上は未だ耕やされざるべく、盛京に於ける可耕地の十分の六七、吉林に於ける其一半、黑龍江省の小班點のみ開かれたるに過ぎすして、其黑龍江省の面積は他二省の面積よりも大なりと云へり、滿洲の地勢を察するに吉林山多く、盛京起伏ありと雖、黑龍は平原に富み又嫩江松花江、遼河の本支流は滿洲の水利を助くるに依て能く總面積の五割を耕し得べし。然るときは可耕地四千七百萬町歩となりホシイの說に從へば其五分の一即ち九百四十萬町歩の未耕地あるべき理なり。滿洲の人口に就ては諸說一定せずと雖其發達は清廷の特に重要視する所にして力めて移住開拓を保護奬勵し、例は釐金局なく其他賦稅を輕くし、從て年々著しく人口の增加を爲すにより或は七八百萬と云ふに拘らず、余はホシイの千七百萬人說に贊同す。然るときは一人の既耕地五反五畝歩となり事實に近きが如しと雖、元來滿洲は氣候寒冷、農法粗大なるべきにより余の想像は人口一人に付略ほ八反歩の農地あるべき見込なるが故に若し人口に誤謬なしとせば既耕地は尙多かるべし。試に滿洲の將來を推測するに一人の農地二町歩平均（既墾地は多く盛京吉林にあり、未墾地に富む所の黑龍は益寒冷粗大なるべきにより平均二町歩とせり）として二千三百五十萬人を入るべきが故に、資本智識に乏しく又新世紀の機械を使用せざることの外は略ほ北米合衆國の狀態に似たりと謂ふべし、其農產競爭力の强大なるは支那本部と同日の談にあらず就中豆類、麥類、黍粟類、蕎麥、麻、藍、煙草、果物、畜產物等の生產は最注目を要するものなり。滿洲に就て尙一言を加ふべきことは淸國農民就中山東、直隸人の忍耐、勤勉、且開墾に巧なること是なり、彼等が缺乏なる智識と資本とを以て能く廣大の地面を墾成するは其勤儉なるは勿論、主として能く動物を使役し能く舊式の器械を運用するにあり。彼等は騾馬と舊式の器械とを以て能く數百間の眞直なる畦條を作り、又五七頭の動物を木製車に繫ぎて道路なき地上に遠距離の運送を爲す。蓋し彼等の伎倆と忍耐とを以てせば我北海道の開拓の如きは容易のみ、滿洲の土地尙多く未開に屬し假に諸國人に自由移住を許すことありとするも露人と言はず日人と

言はず到底農業に於ては清人に比して劣敗者なり、若し成就する者ありとせば新世紀の大農法に慣熟したる米國人のみならん。夫れ東清鐵道は既に要部を貫通し、又松花江遼河等の水運あり、滿洲の將來多望なりと謂ふべし我は即ち農業上に於て防禦の途を講じ、商業上に於て進取の策を取らざるべからざるなり。

第七節　日清農産貿易

明治三十四年清國より日本への輸入左の如し

日本輸入清國農産品表

油	六、九二七、四三七円
綠大豆	六、四九九、〇一四
砂糖	二、六七六、七四四
生棉	一、四七〇、三四二
苧麻	一、二九三、五六五
米	八七七、五八二
棉卵	八六七、二七二
羊毛	五七一、六八五
柞蠶	四三三、六三七
絲	四三三、一八四
棉	三七四、一七三
豆	八五、八一九円
麻子	八三、九四九
毛	八二、二六二
牛皮及水牛皮	五七、二〇九
苴麻子油	四五、二〇〇
豚毛	三九、二七四
皮	三七、五九二
龍腦及艾片	三六、四一八
甘草	三二、八七六
諸油及蠟	二七、四六九
諸食物	二二、四八八
參稈鼠鬚	八五、八一九円
獸毛	八三、九四九
牛皮及水牛皮	八二、二六二
苴麻子油	五七、二〇九
豚毛	四五、二〇〇
皮	三九、二七四
龍腦及艾片	三七、五九二
甘草	三六、四一八
諸油及蠟	三二、八七六
諸食物	二七、四六九
茶	二二、四八八

蘭	三四二、四六九
胡麻子	二七五、六七三
漆	二五九、〇九二
骨獸（肥料用）	二〇四、八八八
古棉及屑棉	一六五、七一七
天蠶絲	一〇四、六四九

明治三十四年日本より清國への輸出左の如し。

清國輸入日本農產品表

人參	二九七、八三三円
鹿茸	二二二、六二五
番茶	七九、五〇八
大黃	五四、二九一
棉線及苧麻線	一五、三七二
棉	一五、三一六
羊	一四、二三四
生果乾果及核子	一二、三七四
大黃	四一〇、一六九
他の雜穀物及種子	
絲	四五、七二四円
茶粉	四一、九六九
茶	二〇、二五二
米	

右の如く農產物の貿易は全然片貿易にして此趨勢は益々強度を加ふべし。

第八節　清國農產物の我國に對する利害關係

前表に示すが如く清國より我國へ輸入する所の農產物は其種類甚だ多く、其金額又少からざるものなり。今其主なる各品に就て利害關係の觀察を下すべし。

◎大豆及び油粕

油粕は豆粕を多しとし、大豆と共に專ら滿洲の生產に屬す。元來大豆は我國に於ては米麥に次ぐ所の重要なる農產にして、其作付反別も五十萬町步に近し。故に大豆及ひ大豆粕の輸入は現下の大問題なり。抑も農產物は原料にして肥料は又其生產材料なるを以て見れは、肥料の增加は內國產なると輸入品なるとを問はず甚だ喜ぶべきことにして、其輸入の爲に損害を蒙むるものありとすれば比較的高價なる他の肥料のみなるが故に、農工商總ての殖產上の利益の爲に之を忍ばざるべからざる所なりとす。去れば魚粕は高價なるのみならず今後增加の見込少く人造肥料並に其材料は不十分に、又土地に比し人口多く多數の家畜を飼養し得ざる我國に取ては油粕の輸入は寧ろ奬勵すべき事にして、現に七百萬圓の無稅輸入あるも亦將來之を增加するも敢て驚くを要せざるなり。思ふに支那產油粕は比較的廉價にして實際諸作に肥效あり。將來燐酸質肥料と併せて之を用ふることは益々盛なれば我農產の收穫を增すこと又愈々多かるべし。

然るに今や食料及ひ肥料用として現粒大豆も亦漸く滿洲及朝鮮より輸入を增加せんとす。今日の勢を以て推すときは前にも述たる如く滿洲農產競爭力の强大なる遂には我五十萬町步の大豆作を壓倒し、唯畦畔作と農家自用作とのみ殘て市上の大豆は悉く輸入品を以て塡充するに至ることなしとせず。然るときは農家の普通作物として全國に普く、殊に北海道に於ては最大切なりとする我大豆生產に由々しき影響を來すが故に、之に對し講究すべき手段は左の如くなるべし。

一　油粕の輸入稅は依然無稅とし、現粒豆類には我豆作を害せざる程度の輸入稅を課すること

一　我國に於て輸入大豆を以て豆粕を製造するときは戾稅を爲すこと。

右の如くなれば肥料用豆粕の需用には毫も障害なく、而して能く我豆作を確保するに足るべし。勿論肥料用大豆の輸入は之が爲に妨げらるべしと雖既に豆粕あれば粒豆を要せず。

斯の如き方法に依て滿洲產の豆粕を肥料に利用するときは、我は經濟上廣大なる地積を滿洲に獲得したるに同じ。明治三十二年は最多く豆粕を輸入したる年にして二百六十一萬六千五百五擔六百四萬七千二百三十八圓なり。此豆粕を製造するには大豆約五十五萬六千一石を要し、大豆收穫一段步五斗として耕地積は十

一萬千二百町歩を要す。而して此大豆作の爲に多數の動物を要し、其動物の飼料として高粱を作ること夥しきにより、略ほ二十萬町の滿洲地方に償すべきなり。豈大なる利得にあらずや。

◎棉花及ひ砂糖

棉花輸入稅を全廢したる以來、我十萬町歩の棉作は三萬町歩に衰退せり。之が爲に棉作地方の農家は大に困難し來し、換るに甘藷、陸稻等を以てすと雖、當時棉花の利益に比すれば遠く及ばず。今日僅に殘る所の棉花は自家用と中入れ綿の一部に供するのみ。然ども爾來棉絲紡績業の發達は幾分此國損と民業の妨害を償ふに足り、將來益々綿絲紡績を發達せしめ尙棉布製造を隆盛ならしむることを得は我棉作の利害最早言ふに足らず、却て棉花輸入數量の多きを見て工業の發達を慶賀すへし。要するに支那棉花輸入に就ては余は死兒の齡を數ふることを爲さゞるべしと雖、日本に適當すべき種類の試驗研究は尙其必要を存すと謂ふべし。

砂糖は對世界問題にして支那の僅少なる輸入は特に意に介するに足らず。

◎生卵

支那の禽卵生產は實に夥し、就中鷄卵鴨卵をす。鴨は往々百千群を爲して水陸運送せらるゝを見る、水ある所の農家は皆之を飼ふ、鷄は大規模の飼養なしと雖、各農家十羽乃至二十羽を養ひ、或は自ら孵化し、又は人工孵化業者の產雛を買ふて普く農家の副業と爲す、其產卵の多量且廉價なるは蕪湖、漢口等楊子江沿岸に四五の蛋白製造所ありて、卵黃、卵白を製して歐洲に輸出するを以て察知すべし。本邦に輸入する生卵は多く江蘇、浙江就中上海附近の產に係る、其未だ北淸より輸出せざるは一は生卵を安保する籾殼の缺乏と及び之を荷裝するの木箱の高價なるとに因る。支那卵に就ては既に本年より輸入稅を增加したるに依り暫く其結果を見るの外なし。

◎麻類、棉實、胡麻、漆、菜種等

其他各種の農產又次第に輸入量を增加し、殊に金に對する銀の下落は愈々其輸入をして容易ならしめんとす。此等は第二位第三位の生產品にして其需要量も隨て限あるものなるにより支那の大地積、大生產よりして、我需用量を供給するの餘裕を出だすこと至て容易なり。然るに我國に取ては需用の確實なる必要の生

産なれば敢て其觀察を忽せにすることなく、一は益々我農法を改良して競爭に堪へしめ、其已むを得ざるものは別に我生産を保護するの途を講ぜざるべからず。

◎動物生産

獸骨、獸毛、牛皮等は勿論羊毛と雖我畜産の現程度に在ては其輸入を抑制するの謂はれなし。羊毛の如きは北海道其他北地に於て之を振興するの望ありと雖、今尚試驗時代に屬するが故に之に重稅を賦して製絨業を挫折するが如きは不可なり。

◎米蠶茶附我よりの農産輸出品

右の如く各種の支那農産物は滔々として我國に侵入し來ると雖、其著しきものは或は農業の原料となり、或は工業の原料となり、未だ我農業の根幹を侵蝕するに至らず。而して一方に於て我國經濟の能く聾固なる所以のものは我自ら米、蠶、茶を生産して他の供給を仰がざるに因る。夫れ我は米を常食し、茶を常飲し、及び中流以上は絹を常着するが故に此三者の一若は其一部分と雖之を他より輸入すると きは莫大の定額仕拂を要し、所謂農業の根幹を侵蝕し、國家の經濟を危殆ならしむるものなり。且又蠶茶は外國より正貨を吸收し貿易の平均を保つべき重要輸出品なるにより獨り內國市場に支那產を防がざるべからざるのみならず、外國市場の競爭に於ても亦優勝の地位を占めざるべからず。然るに此の三品は支那に於て我と同一品質のものを寧ろ經濟的に產出するの狀態なるを以て最警戒を要し又絕對に保護奬勵を加ふべきものなりと斷定す。柞蠶絲と雖我蠶絲業に危害を與ふるの懸念あるに於ては看過すべからざるなり。米蠶茶の如何に重要の物產なるやは左の數字に依り知るべし。

明治三十三年度計算

	米	生絲	茶
內地消費價額	四四九、三七四、〇二五円	一三、四五〇、七九〇円	五、五七六、一八〇円
輸出價額	三、五七六、五六九	四四、六五七、〇二九	九、〇三五、八一九
外に組織物二三、五二二、一一八			

若し夫れ我より彼に輸出すべき農產物としては屈指すべきものなし。最多金額の人蔘と雖三十萬圓を出でず、之すら過度生產、拔賣の結果益々價格の下落となり遂に人蔘「トラスト」を組織して僅に防禦するの有樣なり。

第九節　輸入農產物換算地積

左の表は各國より我國へ輸入する重要農産物を生産面積に換算して示せるものなり、之を我國の生産面積と對比して如何の感ある、輸入棉花の生産面積の如き實に我生産面積の二十一倍なるにあらずや。余は緒言に於て經濟獨立に言及したり、請ふ獨り清國よりと云はず元來農産輸入の國家經濟上至大の影響あることを看過するなからんことを。

日本輸入農産物換算地積表

品名	年度	輸入量ヲ生産地積ニ換算スル反別	平均	我生産面積に對する輸入品面積の百分比例
米	明治三十三年 同三十四年	六四二、九五、九 八七、三五三、六	七五、七四三五 町	
小麥	同三十三年 同三十四年	一〇七、八六、一 四二、六一	七四三、三五	
麥粉	同三十三年 同三十四年	六七、五六九、九 五〇、四八、五	五八、九六七、七	小麥
大豆	同三十三年 同三十四年	九五、三四六、二 二一、六三、二	一〇三、四七、九	
油粕	同三十三年 同三十四年	一三七、八五四、八 二一〇、二〇七、八	一四四、〇三、三	大豆
麥芽	同三十三年 同三十四年	二三、四八、二 二、七〇三、二	大麥三、五〇八、五	

品名	年度	本邦生産地積（臺灣を含ます）作付反別	平均	我生産面積に對する輸入品面積の百分比例
米	同三十三年 同三十四年	二、八六四、四九、三 二、八四七、五五、六	二八三、九二、五 町	米 二、六六
小麥	同三十三年 同三十四年	四六八、四六八、二 四六六、八四四、九	四七、六七、六、六	小麥 一三、九三
大豆	同三十三年 同三十四年	四七、六七二、七 四七、九五三、三	大豆 四五、八三〇	大豆五、三六
大麥	同三十三年 同三十四年	六四四、五九五、五 六四四、八五九、六	大麥 六四六、九四六	大麥 〇、三六

品名	年度		平均	
砂糖	同	同三十三年 同三十四年	四八、九四、一 五二、一五五、九	甘蔗
精糖	同	同三十三年 同三十四年	六四、八四四、〇 八六、四〇八、三	甘蔗 七五、一〇六、一
棉	同	同三十三年 同三十四年	五五六、六二五、〇 五五三、三四〇、一	實棉 五五九、九七、六
棉子	同	同三十三年 同三十四年	七二、八九、三 六四、四〇六、五	大豆 二五、五〇九、三
麻類	同	同三十三年 同三十四年	一四、九八八、七 一三、八三四、一	大麻 一四、一八六、一
繭	同	同三十三年	九六八、三 七〇六、一	桑園 八三、三
乾藍	同	同三十三年 同三十四年	八二四八、三 五五四〇五	鞣藍 六八九四四
生卵	同	同三十三年 同三十四年	一〇六九五、二 一一、二〇二	一〇、九〇六
羊毛	同	同三十三年 同三十四年	四五二、三五〇、〇 四九五、二三〇、〇	四七二、三五〇
乳膏	同	同三十三年 同三十四年	四、七〇〇、〇 四、三七八、〇	牧場 四七、八六三、〇

品名	年度		平均	
砂糖	同	同三十三年 同三十四年	四八、九四、一 五二、一五五、九	甘蔗
精糖	同	同三十三年 同三十四年	六四、八四四、〇 八六、四〇八、三	甘蔗 七五、一〇六、一
棉	同	同三十三年 同三十四年	五五六、六二五、〇 五五三、三四〇、一	實棉 五五九、九七、六
棉子	同	同三十三年 同三十四年	七二、八九、三 六四、四〇六、五	大豆 二五、五〇九、三
麻類	同	同三十三年 同三十四年	一四、九八八、七 一三、八三四、一	大麻 一四、一八六、一
繭	同	同三十三年	九六八、三 七〇六、一	桑園 八三、三
乾藍	同	同三十三年 同三十四年	八二四八、三 五五四〇五	鞣藍 六八九四四
生卵	同	同三十三年 同三十四年	一〇六九五、二 一一、二〇二	一〇、九〇六
羊毛	同	同三十三年 同三十四年	四五二、三五〇、〇 四九五、二三〇、〇	四七二、三五〇
乳膏	同	同三十三年 同三十四年	四、七〇〇、〇 四、三七八、〇	牧場 四七、八六三、〇

品名	年度		平均	
砂糖	同	同三十三年 同三十四年	四八、九四、一 五二、一五五、九	甘蔗
精糖	同	同三十三年 同三十四年	六四、八四四、〇 八六、四〇八、三	甘蔗 七五、一〇六、一
棉	同	同三十三年 同三十四年	五五六、六二五、〇 五五三、三四〇、一	實棉 五五九、九七、六
棉子	同	同三十三年 同三十四年	七二、八九、三 六四、四〇六、五	大豆 二五、五〇九、三
麻類	同	同三十三年 同三十四年	一四、九八八、七 一三、八三四、一	大麻 一四、一八六、一
繭	同	同三十三年	九六八、三 七〇六、一	桑園 八三、三
乾藍	同	同三十三年 同三十四年	八二四八、三 五五四〇五	鞣藍 六八九四四
生卵	同	同三十三年 同三十四年	一〇六九五、二 一一、二〇二	一〇、九〇六
羊毛	同	同三十三年 同三十四年	四五二、三五〇、〇 四九五、二三〇、〇	四七二、三五〇
乳膏	同	同三十三年 同三十四年	四、七〇〇、〇 四、三七八、〇	牧場 四七、八六三、〇

品名	年度		平均	
砂糖	同	同三十三年 同三十四年	四八、九四、一 五二、一五五、九	甘蔗
精糖	同	同三十三年 同三十四年	六四、八四四、〇 八六、四〇八、三	甘蔗 七五、一〇六、一
棉	同	同三十三年 同三十四年	五五六、六二五、〇 五五三、三四〇、一	實棉 五五九、九七、六
棉子	同	同三十三年 同三十四年	七二、八九、三 六四、四〇六、五	大豆 二五、五〇九、三
麻類	同	同三十三年 同三十四年	一四、九八八、七 一三、八三四、一	大麻 一四、一八六、一
繭	同	同三十三年	九六八、三 七〇六、一	桑園 八三、三
乾藍	同	同三十三年 同三十四年	八二四八、三 五五四〇五	鞣藍 六八九四四
生卵	同	同三十三年 同三十四年	一〇六九五、二 一一、二〇二	一〇、九〇六
羊毛	同	同三十三年 同三十四年	四五二、三五〇、〇 四九五、二三〇、〇	四七二、三五〇
乳膏	同	同三十三年 同三十四年	四、七〇〇、〇 四、三七八、〇	牧場 四七、八六三、〇

品名	年度	本邦生産地積（臺灣を含ます）作付反別	平均	我生産面積に對する輸入品面積の百分比例
米	同三十三年 同三十四年	二、八六四、四九、三 二、八四七、五五、六	二八三、九二、五 町	米 二、六六
小麥	同三十三年 同三十四年	四六八、四六八、二 四六六、八四四、九	四七、六七、六、六	小麥 一三、九三
大豆	同三十三年 同三十四年	四七、六七二、七 四七、九五三、三	大豆 四五、八三〇	大豆五、三六
大麥	同三十三年 同三十四年	六四四、五九五、五 六四四、八五九、六	大麥 六四六、九四六	大麥 〇、三六

第十節　清國の農業及ひ農政

◎總說

清國の地形は大陸的なれば高原と低地とを問はず廣袤自ら大なり。山岳の如き

も其傾斜概ね緩大なり。氣候は概して北部は寒冷、乾燥、南部は溫暖、濕氣あり。又冬夏の寒暖の差著しく、冬の凍寒に拘らず夏の炎暑に依て北部も亦作物好く生育せり、且北部の乾燥なるは植物の病虫害を減じ、果物に適す。水利は南方最宜しく北は比較的不十分なり。

清國の農法に就ては最新のものに通商彙纂第二百三十六號上海總領事館米作報告あり、又明治三十二年に加藤農商務技師の清國出張復命書あり、要するに我國と大同小異にして特に見るべきものなし、其精巧なる點に於ては我寧ろ彼に勝る多し。

尙一言せんと欲するは日本人が農業經營の爲に清國に移住を企るの無益なること是なり、第一清國に未開地乏しく、第二我農民は清人の勤儉と競爭すること能はざればなり。（後節清人の特長中滿足の部參看）

種苗に就ては元來舊物を代へざるの主義なるにより改良精撰等のことなく從て品質粗惡なりと雖、長江筋の如きは氣候溫暖、地味肥沃なるが爲比較的良收穫を爲す、又改良精撰を怠るの結果として何物によらず種類少數に限られ、我米四百種

百種と云ふが如き弊害なきは一得と謂ふべし。

肥料は雜草、畜尿、人糞、油粕等を主とすれども、概して用量少く又價を拂ふことを要する肥料は最節儉す。例ば油粕の如きは稻、甘蔗等數作に限らる、人糞は南清に於ては溜壺に貯へて使用し、北清の乾糞製造は之に比して善し。

耕耘は北清稍や大農を行ふにより、南清に比すれば粗なり、概して我國の精に及ばず。

作物に就ては長江沿岸は米を常食するにより田地米作多く北清は麥黍を常食するにより烟地の穀作多し。而して殊に北清に於ては總て畦作を爲すに拘らず、尙同時同地に數種の作物を雜植するの陋を免れず。例ば高粱と大豆、大豆と玉蜀黍又は粟黍と云ふが如し。蔬菜栽培は城市附近に必ず見る所にして其墻圍を設け て床を奇麗にし肥水を注ぐ有樣は普通農業に比して精巧なり。

果物は北清、四川、南清の或る部分に於て良好なり、就中桃、梨、葡萄等優等なるものを見る。我國の風土に於て尙能く同一のものを生產し得るや否や之を試驗せざるべからず。

收穫に至て最缺點あり、作物の莖根を薪炭に代用するが爲には往々作物を根扱きとなし、又之を土上に排列して石臼を轉回して打穀するの法なるにより總ての穀物は多量の土砂を混入す。

農具は何れも古風の物にして專ら木石を以て之を作り、本邦に於て之に摸擬するの價値あるものなしと雖、唯其古風の器械を動物に曳かしめて巧に且力めて之を使用するに至ては我農民の及ばざる所なり。清國の農民は犁、耙、中耕、打穀、粉穀には多く牛馬を使役す。

農家の副業としては豚禽の飼養幾と普及す。內地に於ては前日の我國に於ける が如く棉を紡き布を織るは婦人の主なる事業なるべし。蘇州杭州の如きは絹織物の本場なれば附近の農夫は或は絹機を織り或は縫箔を爲すを見る。

勞働者としては男女共に田圃に從事すれども、女は纏足を爲して不自由なるにより小き腰掛を携へ、掛ながら長柄の手把を以て屆く所たけつゝ除草を爲す。農民の勤怠は各省大に異なるものあり、湖北省の如きは勞働者概して懶惰なり、又近年都會移住者一般に多きを加ふと云ふ。

農屋は總て平屋にして下等なるは土塗り草葺上等なるは瓦葺、煉瓦壁なり。概して南清は上等に北清の黃色土の塗り小屋は甚醜陋なり。是一は建築材料の有無に依る、一體無木の國なれども屋邊村圍には必ず樹木あり、多く楊柳を植へて日を防ぎ風を遮るは甚だ善し。又村邊に溜池を設けて炊事、洗濯の用に供するあり。

◎水利

水利に就ては先づ運送の事を言ふべし、清人が陸に馬、水に舟を用ひ力めて人の荷擔を省くは太古人口稀薄なりし頃よりの遺習ならん。去れば少しく水あれば舟ありて一切の運送に便す。灌漑の手段は我國の如く堰を造り樋を設け縱橫に用水路を開鑿して以て稻を養ふが如き組織は清國に於て稀なり、彼は銘々龍骨車を使用して田地に揚水す、湖北に於ては低き平地を畑とし、高き丘麓を田地と爲すを見たり。是丘頂に天水溜池を造りて田地を設くるに依る。支那に於ける器械か悉く古代的なるに拘らず、上海、蘇州間の灌漑には文明器械の應用せらるゝありて、從來は龍骨車を回轉するは總て人の手足を以てせしに、流石に上海に接近せる同地方は齒車を仕掛けて水牛に龍骨車を運轉せしむ。堤防は清國に於て

之を見ること稀なり、杭州を護れる錢塘江沿岸の堤防の如きは最完全なるものなるべく、近年張之洞の造れる武昌の堤防は一部は市街の擴張の爲なりと雖、大部は美田を作るの用に供せらるゝを得べし。其他長江筋に於て點々薄く低き假提防を以て農地を護るを見る。此等は只少量の出水に堪ふるのみ、且此等堤防の在る所を見るに總て片堤防なり、若し兩岸に築かんか何ぞ數十尺の增減ある長江の出水を防ぐを得んや其危險却て計るべからざらんとす。蓋し支那の大河江に於ては到底兩堤防を以て出水を防ぐことを能はざるべきにより、無堤防の現狀は却て危險と入費とを減ずるものならんか、且甲板上より長江の兩岸廣大なる地面が蘆葭の滋蔓に委せらるゝを見るときは甚だ惜むべきが如しと雖、此等の蘆葭は年々刈て藥材となし編み物となし、「アンペラ」となし、決して不生産に屬するものにあらず。但し出水なきを僥倖せんとして間々蘆を刈り麥黍を栽る者あり。新に水利を起すことに付ては或は水路を開鑿し、或は揚水機械を設け以て湖江の水を尙多く利用することを得べく、北淸に在ては掘拔は試むべきの一ならん。

◎農産物

農產物に就ては氣候の寒暖により各省多少の差ありと雖、概して豐富なり。余某外人の四川紀行を見て讀みがら其農產物を記し置かんと思ひしに、あらゆる農產物の存するを知て其無益なるを發見せり漢口商局に於ける湖北省重要物產の調査は左の如し。

湖北省重要物產表

（漢口商局調査）

武昌縣	菜油、棉花（緞子）、葛布、綠麻、爆料紙
鄂水縣	甘蔗
黃岡縣	棉花、黃絲
漢川縣	白布
黃陂縣	藍
京山縣	小布
應山縣	蜂蜜
文門縣	紬
蒲沂縣	石炭、磚茶
麻城縣	黃紬
廣濟縣	棉花、生絲、繭
監利縣	花絲毯
潛江縣	傘
咸寧縣	斗紙

均州	陽城縣	煙草、木耳、桐油
沔州	陽城縣	棉花、生絲、繭、麻
應州	陽城縣	藍、石膏
長州	都縣	石炭、子油、紙、藥材
宜州	城縣	皮油、子油、木炭、蘆
通州	都縣	葛布
興州	山縣	漆、黃柏
長州	樂縣	野蠶蛹、苧麻
興州	城縣	棉花、生絲、繭、布
鍾祥	縣	絲布、麻油
襄陽	縣	米
棗陽	縣	茶
崇陽	縣	石炭、麻（麻、春麻、寒麻）茶、布、紙
興國	縣	菜油、布
荊門	州	土硃
化	縣	硯石
鶴	州	野木、龜膠
黃	縣	白布
麻	州	銅
隨	縣	藍
建始	縣	漆
巴東	縣	茶、銅
鶴峯	州	

石	縣	魚肚
松	縣	礪礦石
當	縣	石炭、繭紬、生絲、班竹細工、紙、繭
房	縣	水耳、漆、黃蠟、杜仲
竹	縣	銅、綠松石、桐油
鄖	縣	桐油、漆
大	縣	銀、鐵、石灰、石炭
首	縣	
滋	縣	
陽	縣	
山	縣	
西	縣	
冶	縣	

◎家畜

家畜に付て未た言及せさりしは是特に多く言はんと欲する所のものあるか爲なり。蓋し支那の農業に於て最賞すべきは家畜養飼の一事なり。先つ第一に家畜の種類及び頭數の多きことなり。其頭數は之を詳にするに由なしと雖、各家何種かの家畜を養はざるなきを見て其夥しきを察すべく、其種類は馬、騾、驢、牛、水牛、豚、羊、山羊、駱駝、鷄、鵞皆在り。近世の家畜學より其體格を論するときは勿論歐米の改良動物に比すべからすと雖、亞細亞の家畜としては實用に耐ふる所の善良なる動物なり、之に改良を加ふれば益〻其効用を多くすべし。第二は其馴養の巧なることゝ、其利用の盛なることとなり。清人の牛馬を管理するや其性質を極めて温良なら

しめ、蹴ることなく、噛むことなく、喧囂ならず多數群居し能く使役に服す。水牛の如きも稚女幼童の命を聽て反かず、馬、騾、牛は一般に用ひ、騾は北淸滿洲に最多く、水牛は南淸長江筋に專なり、豚、禽の肉は淸國に普く需用され、其燻肉、丸揚の如き善く貯藏運送に堪へ、又家禽は其卵は食用又は蛋白製造用に、其羽毛は塡裝に用ひらる羊、山羊は肉と毛とを用ひ、駱駝は運送の外絨毛の用あり、去勢の往時より行はるゝ如きも感服すべし第三は飼養法のことなり。右の如く飼畜の盛なるに拘らず、支那本部には牧場なし、滿洲と雖農業に多數の動物を使役するに拘らず、牧場を有せず。牧場は天然の蕃殖生産地たる西伯利亞境邊蒙古、伊犁等に之あるのみ。然らば如何にして家畜を飼養するやと云ふに、圃場の緣邊點々の草地、墓地等ありて禽豚の放牧等には用ふべきも、一體の家畜の飼料は耕作して之を得るに外ならず。北淸滿洲に於て幾と耕地の大部分を占領すると思はるゝ高粱作の如きも多分は家畜の飼料に供す。是甚た愚なるか如くして否らず、我國に於て嘗て犁を施し種子を蒔きしことなき枯渴の原野より、蕭疎たる雜草を刈り來て以て始めて家畜を養ひ得べしと爲すものに比すれば彼の方法は遙に歐米的なるものなり。

◎蠶桑

蠶も亦人の養ふ所の動物なれば家畜の一なりと雖、蠶種には病毒浸漸し蠶兒の飼育法も拙にして取るに足らず。然るに五口取りと爲すべき解舒容易なる繭を產するは一は氣候濕氣少きの然らしむる所なるべく、一ば桑葉の善良なるに因るべし。育蠶の拙劣なるに反して魯桑の善良なる既に我國にも多く之を移栽せり。又栽桑の法に付ては拳式と云ひ、整枝と云ひ、能く萎縮病を防ぐに足りて我國に於て之に則るの價値あり。數百年間の老桑幹に接穗を爲すか如きも彼等か栽桑上に特に秀たる所あるを知るべし。蠶桑に關しては明治三十二年松永蠶業講習所技師及び明治三十二年本多同技師の複命書あり。

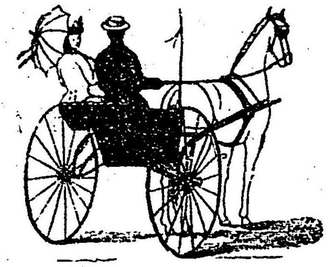
◎農政

最後に農政の事を語らんに、淸國の識者は農國本の語を暗記し容易に之を口にすと雖、彼國に別に農政なるものなく又其經綸を有する者稀なり。近年杭州に蠶學館を設けたる、武昌に農務學堂を置きたる保定に農務大學を開きたる如き先づ以て農政の創始と云ふを得んか。元來上下一定不變主義の淸國に在て智識なく剌

載なく、四圍の事情に通せざる農民か、改良の念を發することの甚だ遠望なるに加ふるに清國の政治法其他一切のものか又此の改良を阻止するを免れず。前段の養蠶を例に取て一言せんに、清國蠶兒の病毒を殄滅せんには檢査を加へ制裁を施さゝるべからず。然とも是清國の政治に望む能はざる所なり。又清國養蠶か屢々凶作を告くるは群密に蠶兒を飼ふて穢沙を除かす、狀態極て不健康なるか故に僅少なる氣候の變動と雛虫を害するに至る。本年(三十五年)の如きも清國養蠶大不作にして、少きは二分、多きも五分作なりと云ひしに、武昌に於ても杭州に於ても我教師の飼育せる蠶兒は完全の生育を遂け十分の結繭を爲せり。其病根明なるも如何にして之を治せんか、法制立つべからず、然らは說くに衛生の理を以てせんか、彼等農民は陰濕の屋舍に群接して虎列剌黑死病も之を天命に歸するの外其恐るべき所以を知らざる者なり。何ぞ蠶兒衛生に首肯するに至らんや。其他一般農事に於ても撰種より收穫に至るまて改良の餘地あらさるはなしと雖、其難きこと概ね此類なり。

余の經驗に依れば舊法を其儘に改良することよりは一躍新規なることを誘導するを以て行はれ易しとす。例は我國に於ても唐箕撰を反覆するよりは鹽水撰を奬むるは易く、害虫驅除を勵行せしむるには斷然丹柵苗代より導くを効ありとするか如し。除草の回數を增すことと耕土の深さを增すことなと頗る行はれ難き事に屬し、寧ろ雁爪或は除草器を用ひしめ、又牛馬耕を奬勵して自然に同一の結果を收めしむるに如かす。在來の牛馬を精撰改良するは難く、一躍洋種馬を以てするは寧ろ易し。去れは我國の前途に就ても餘りに現狀に拘泥せすして寧ろ一躍進を遂けしむるを以て却て容易にして且効果多かるべきか如く、清國に於ても上海附近に於て龍骨車に齒車を用ひ、湖北に於て大阪製の棉繰器械を賞美するに至りたるか如き又此理を例證するものなり。彼の蠶種の如きも清國に於て改良することを爲さんより我國に於て健全なるものを製し之を賣て廣く用ひしむることを計るは捷計ならん。余は清國に聘せられたる我農業教師か第一に忍耐を有し、大體の結果を永遠に期し、先づ當初は人の養成を以て其任務及ひ快樂と爲し。第二に前述の理に依て必しも舊法と現狀とを根據として之を改良することにのみ固着せす、時々新奇の手段を授けて恰も外科醫か奇抜の治療を爲して名聲と信用と

を博するか如くならんことを望む



第五章　清國國人の競爭力（專ら商業に就て）

第一節　清人の特長

◎簡單

清人特長の一は簡單不變なり簡單なるが故に敏活となり不變なるが故に信用生ず。去れば清人の商法は同一の方法に依り同一の人と同一の品を幾代幾年となく取引するにありて往復照會隨て簡捷となり能く一諾を重んじ一信を以て何程の大取引をも辨じ得るなり。清商が外人との競爭に勝利を制するは決して複雜の事情の下に應變の術を得たるにあらず又商業上の智識の特別に明敏なるにもあらず寧ろ彼等は妙術なく明敏ならざるに依て平凡の方法に固着し坦々たる大道を徐行する如くにして成効す。之に反して外國の商人就中我同胞は難道を急行せんとして脚踵を傷め船車を破り結局蹉跌するものなり。曩に輸出入の全權を有せし外商が今や清國の注文により仕入する所の取次商に變化し來りたるは畢竟清商に一着を輸したるものと謂はざるを得ず。

◎共同

商品は其數量の多きに從ひ品質良齊原價低廉なるは何人も之を理解する所なり。清人又此平凡の事理を實行して優勝者となる。彼は常に此點に着眼して結合を計れり。新近の實例は滿洲にあり、今や滿洲は鐵道の便通したると、露人の入込みたるとに依て盛なる雜貨需要地とならんとし、雜貨の上等なるものは獨逸品なりと雖、其多分は日本品なり。然るに其日本品の雜貨商は清人にして日人は遙爾たる小賣商に過ぎず、我品を以て我商人は何故に清人に競爭し得ざるや、是仕入方法の全く異なるに因る。我商人の爲す所は各自孤立的仕入注文を爲し、其數量の少き其手數の多き、勢高價惡品たらざるを得ず。清商は之に反して所在の同種商相合體し、阪神在留の清人に發信して事を辨せしむ、其手數の少き一郵電費のみ其中間に在る者一人のみ、而して其注文量の多き往々數量を限らずして何程にても出來るだけ引取ると云ふを以てす。斯の如く既に仕入に於て天壤の差あるが故に到底彼等の先頭に出る能はさるなり。否今や我雜貨商は直仕入を止めて清商より卸買を爲すの最利便なるを認めて甘して彼の背後に座するに至れり。

◎攻守

敵を防ぎ他を制するには其手段と實力となかるべからず、誰か無力無手段の下に屈服せらるゝものあらんや。清人又此尋常の道理を踐み違ふことなし。彼は其手段として會館組合を結び其實力として同鄉或は同業團結せり。其團結精神の普及せる乞食、盜賊にも組合あるなり、殊に清國政府の薄弱にして生命財產の安固を托するに足らざるや益々團結自衛を鞏固ならしむ。抑も會館組合の種類組織は必しも一定ならずと雖、其精神は名譽利益の保全、相互の扶助救濟にあらざるはなし。（會館制度に付ては在上海農商務省實業練習生稻石謙造氏の報文あり）清國都市に於て建築の壯大なるもの必ず何々の會館たりと云ふを以て如何に彼等が會館に重きを置くやを推知すへし。會館組合は力めて相互の保護に任すと雖、苟くも信用を毀ち廉恥を破る行爲あるときは又假借せず。而して一たび除名せらるれば全然自己の立脚地を失ふに依り非行あること少し。爰に利益保全の例を擧げんに日本の皮革商某々清國皮革の必ず廉價なるべきを察知し、或は之を日本に仕入るべく、又は彼地に製革所を設立せんとの目的を以て某地に遊べり。甲皮

革商に就て其價格を調査せしに甚だ不廉なり、轉じて乙丙丁に就て問ふ又同じ、爰に於て到底清國皮革の見込なきを思ふて去れり。何ぞ知らん皮革組合は組合員に檄を飛ばして日商に利を奪はれざるが爲其間に對しては一同原價幾何を以て答ふべしと定めたるなり、若し又外商物品を齎らし來らんには組合は其原價を調査し、其金利を內探し遂に其物品を持歸らざるべからざるか、若は之を投賣するに至るべき價格を推定し、之を組合員に通知して其以上の價格を以て引取ることならしむ。斯の如く攻守の策周到にして能く競爭を避け自家の商利を保全し、組合の約束は又背反する者なし。斯の如きは朝鮮各港に於ける我穀物商が米豆を買ひ競ひて何人も利すること薄く、却て無智蒙昧の韓人にみすみす最多の利を占めらるゝの醜態なるに孰れぞや。又我諸組合が法律の下に組織せられ儼然たる書面上の規約あるに拘らず、事實粗製濫造、拔賣競買の弊害續出するに孰れぞや。

◎信用

箇人國家の對語は人多く反對の場合に慣用せり。余は之を一致のものと思ふ。去れは完全なる箇人は完全なる國家の中に在るものなり。清國は國家薄弱にして箇人隨て危殆なり、或は清國人を以て箇人主義の最發達したるものなりと看做す者ありと雖、是國家薄弱なるにより不得已箇人自衛の手段顯著となれるなり。交通に於ける南船北馬に對して危險に於ける船賊馬賊あり。官吏の徵求土匪の侵暑、瞬昧の刑罰、壓制の警察等は常に清國の政治を論議する者の口頭に上る所なり。斯かる狀態なれば官府の威信微弱なるべきに往々絶大の强壓力を有することあるは是人民官府に信賴して服從するにあらず、其徵求を免がれ其毒牙に觸るゝことを避け、其身體及び營業に關する妨害を脫せんが爲にする所の敬遠主義の服從なり。去れば其家屋の構造と門戶の出入の有樣とに於て既に家屋即ち城廓の實を備へ、又村邑には其附近に壁廓を搆へて賊襲に備ふるものあり。嗚呼斯の如き國狀の下にある人民は相排擠して共に倒るゝか若は又相信任して互に利するにあり。幸に清國は後者に出で其信用の發達は實に驚くべきものあり、清國の資本は多くの人の信ずるが如く豐富なるものにあらず、主として信用的融通に於て大取引を決濟するものなり。

◎勤儉及ひ滿足

清人の勤倹は何人も認識する所にして余は言を加ふるを要せず。滿足とは何ぞや。請ふ之を説かん。

夫れ善悪苦樂總て比較より來る去れば。母國人口の稠密なる職業の不足なる政治の不良なる生命財産の安全ならざる清人は之を去て何れの國土に移住營業するも善且樂ならざるはなし。且母國の氣候景色に於ても別に懐慕すべき快美なるものなきに加ふるに元來潔不潔の差別なく動物的忍耐力と慾心とに充たされたる彼等は何の地に在るも無遠慮に習慣の衣食住を營み新開地に來るも他國に踐み出すも樂ありて苦なく冀望ありて不平なく土着的持重滿足的節倹を以て生存する者なり。去れば如上の點に於て全く反對なる外國人就中日本人が不平不愉快を以て夕を送り朝を迎へ若干の利を懐にして故山に歸るを專念とする者は到底彼の對敵たる能はざるなり。

◎結論

余は現世界の實業に二樣あるを見る舊世紀的實業新世紀的實業是なり。蓋し實業發達の原則として屈指すべきは勤勉倹約一致信用是なり。舊世紀の實業とは此原則の外に出でざるものにして固細亞諸國に行はれ清國は實に其發達したるものゝ摸範なり。新世紀の實業とは此原則を實行する外に尚多大の資本文明の利器及び專門の智識を應用するものにして歐米諸國に行はれ其摸範として見るべきは北米合衆國なり。清國の實業はたとひ舊世紀的に屬すと雖其能く原則を勵行するや結果に於ては頗る見るべきものありて優に不十分なる新世紀的實業國と拮抗するに足る。大なる平凡人大なる常識者は小なる非凡人小なる機智者より能く大業を企て安全に成功するが如し。要するに清人の特長は何人も熟知する所の原則を勵行するに過ぎずして而して是他國人の最も當り難しとなす所なり。

轉じて我國實業の狀態を顧るに原則は知て而して實行すること清國は勿論歐米諸國にも遠く及ばず。資本機械智識の應用に至ては清國に超ゆる所ありと雖未だ新世紀的實業國の資格を備ふるに足らず。是變遷の時代に於て幾分已むを得ざるものありと雖競爭場に登て能く實業發達の地歩を確取せんには原則の勵行には清國を摸範とし新世紀の班に入らんには米獨を師視すべし。余は我同胞

に責むるに清人の如く簡單なれ、無敎育なれ、守舊不變なれ、動物的なれと云ふを以てせずと雖、清人の勤儉團結信用に對しては我又之に當るに同一の原則實行と及び非常なる忍耐とを以てせざるべからざるを言はんとす。若し我人文の發達、政治の改良にして唯生活の上進乃至奢侈、又は權利の發達等のことを以て終るが、くんば抑も亦何の益かある。

第二節　清國の資力

清國の資力は何人も明瞭に之を解決せしことなき問題なれども、余は試に左の如き皮想の觀察を下したり。

◎貧富の懸隔甚し

清人の大々多數は貧賤なる農民なり、彼等の間には些の蓄積餘裕なくして一朝天災あるときは忽ち途に横はるの餓莩となる者多し。彼等の多くは啻生存するのみ、彼等は吝儉守錢奴なりと稱せらるると雖其蓄積の分量は案外微々たるものにあらざるなきが。某巡撫余に語て或る地方の農民は粟を貯蓄して必要の都度物に代ふるが故に、現金を貯蓄するが如く賭博又は女色に浪費する憂少く、又他の地方は錢をばらにして貯ふるに運送の困難あるが爲盜難に罹る恐少しと云へり。蓋し都會に接近せる農民には間々相當の蓄財を爲す者あるべしと雖內部の多數は生存を爲すに止りて、たとひ貯蓄を爲すも雜穀小錢の類ならんのみ、決して佛國農民の千萬の貯金又は債券を有する如き比にあらざるべし。

◎資本の增殖緩漫なり

從來清國に於ける資本の增殖は內國貿易に依りしこと勿論なり。然るに政治の不良交通の困難は別として既に國民の大多數か貧賤に屬し、其生活は質素にして其需要は土人的程度を超ゆること僅々、且新陳代謝と云ふことを事實にせざるにより、內國貿易の如きも畢竟衣食上の純粹必需品に止り、原料にあらざれば僅に人

工を加へたるもののみ。彼に製造工業なく又高貴物、美術品の需要稀なり。去れば投資の事業自ら稀少にして資本増殖の緩漫なりしこと知るべきなり。

◎投資の目的物は不動産なり

製造工業なきに加ふるに薄弱の政府を戴き横行の盗賊に圍まる、投資の目的物は勢不動産たらざるを得ざるなり。去れば農地及市街宅地幷に建物の富豪の所有に屬する者甚だ多く、又益〻兼併の傾向を有す。一說に斯の如く投資の主目的物が土地にあるを以てすれば地價自ら比較的高貴ならざるべからざるに田畑の地價比較的廉價なるは偶ま遊資の左まで多からざるを反證するものなりと云へり、又謂はれなしとせず。

◎近時の投資は本國を離る

同じく不動産なりと雖元來利を好む所の資本は近時近くは清國内の各國居留地遠きは亞細亞諸邦幷に歐米の亞細亞殖民地に於ける土地建物に向て既に大に投下され尙益〻投下されんとす。是一方には清國に若干の遊資ありしことを證し一方には其遊資か他に投下さるゝだけそれだけ本國に減少することを證明するものなり。

◎各種の資本如何

所謂零碎の資本なるもの又あるべし、然ども其多くは死守埋藏せられ資本的効能を爲すこと甚だ少きが如し。官吏の私服金は慥に商店錢莊票號に融通せられて民間の經濟を助くる一大原因なりと雖是亦思ふ程に多からざるべし。何となれば大小の官吏が人民より徵收したる内一部を上司に納め一部を公費に充て其殘餘の私服金中より自己の奢侈親戚附庸食客等の扶助の爲に消費する部分又少々ならざればなり。

然るに近時往々官吏豪商の輩が外人と共資事業を營まんとし又開港場に於てコンプラドルか資本を懷にして外人と共同的に貸資的に又は幇助的に之を利用せんことを欲しつゝあるを見て、清國の遊資夥しかるべしとの感想を懷く者あるも是專ら彼等の信用利用なることを考ふべし。彼等の信用ある者は能く所有正貨の十倍二十倍の融通力を有し、廣き意味の資本には相違なしと雖是を以て正貨の多寡を計るは當らず。

◎結論

清國民の大體貧賤なることは視察者の等しく認むる所なり。其財政を維持するや直接稅を低廉にして釐金、鹽稅、鴉片稅、關稅の如き其他各地方に於ける諸種の徵收の如き專ら間接消費稅に據れり。去れば其國土人口に比して財產は寧ろ乏しきものならん。然ども此大國に於て幾千年の間に塵積て山と爲りたる資力は輕微ならざるものあるに依て、能く今日迄輸入超過を支へ、償金を支辨し又國外に夥しき不動產と商業資本とを有するに至れり。之と同時に今や本國の資本は減退せることを示すものにして彼に金貨なく、又一說に印度には目方七十萬磅の銀量あるも清國には十五萬磅あるに過ぎずと云へり。現に帝室西安に蒙塵中兩湖總督は之に送金せんとて二十萬兩の正貨を漢口市場より引上げたる爲に漢口の恐慌を來したりと云ふを以て正貨の缺乏を證すべく、清國の資本は其主體寧ろ信用にあるを思はしむ。

去れば現狀のまゝ推移せんが、今後數十年間毎年幾千萬の償金を仕拂はざるべからざる清國は國としては益々資力減少に傾くの恐なしとせずと雖、彼は幸に外國の助勢と投資とに依て此困難を凌くことを得るのみならず、更に資力を發達することを得べし。何となれば彼は資力增進の要素を有すること左の如くなればなり。

廣大且肥沃なる土地
多數、勤儉、忍耐なる人口
鐵、石炭等の鑛山
便利なる河湖、多數なる港口
他に移住して成効する人民及其本國への送金

第六章　日清貿易の方針

第一節　清國より輸入

貿易は則ち賣買にして國際間の輸出入なり。既に叙述したる如く清國は世界に對しては否らずと雖、我國に對しては強大なる農産輸出力を有し、且其力は左の理に依て益〻助長せられんとす。

第一商人は己れの利を計るに忙しくして國家經濟に思及するの暇なく、他に安きものあれば買ひ來て利せんことを企て、我商人次第に彼の内地に侵入して農産物買入に從事す。余は漢口に於て十餘の日本商店を訪ひ一の雜貨店一の藥種商店一の綿繰器械賣店及び三井の枕木扱店の外は悉く清國農産物の買入商なるに驚歎せり。之に加るに支那商人も亦次第に我農産事情と需要とに通曉するに至るへし。

第二清國は地價安く生計實少く、加ふるに清人の動物的勞働は收穫物に對する生産費を低からしめ、根本的に我農産物と競爭するの餘力を有す。運賃諸掛りに付ても陸は鐵道、水は汽船開けて搬出愈〻便に、釐金漸く廢止の期に近きて諸掛り手數を減せんとす。尚銀貨は金に對し常に下落の傾を有して彼より我への輸出に利なり。

第三政法の革進及び物産の改良增殖はたとひ遲々たりとも間斷なく行はれて是亦輸出に利便を加ふること必然なり。

第二節　清國へ輸出

右の如き情勢なるにより彼の物産を我へ輸入するは最容易なる事業に屬し、之を商業者に一任して別に奬勵を加ふるの必要なきのみならず、時に防制の手段を施さゝるへからずと雖、我より彼への輸出に至ては之に反して少からざる困難あり。

左の如し

各國の競爭
銀貨の下落
我工業の不振
我商人の小資本不信用不一致不熟練

我國力の不十分
右は世人の同感を表する所、別に說明を要せすとして日淸貿易の現狀を見るに

日淸間貿易表

	支那（輸出	香港（輸出
明治三十三年	三一、八七一、五七六円	三九、一七七、四五五円
同　三十四年	四二、九二五、五七九	四一、七八六、六四七

〔參考〕日香間貿易表

	支那より輸入	香港より輸入
明治三十三年	二九、九六〇、七四〇円	一〇、六五九、八五五円
同　三十四年	二七、二五六、九八六	一二、一四一、七八八

此の表の如く輸出超過の趨勢あるは喜ぶべきに似たりと雖、明治三十四年の淸國輸入總額二億七千七百十三萬九千七百三十五兩に對する我輸入三千二百五十六萬七千六百五十六兩は一割一分五厘に過ぎずして尙八割九分五厘の大なる競爭範圍あり。我對淸輸出貿易上豈更に大發展を見ずして止むべけんや。輸出奬勵の方策として力めて彼の農產物を買ひ彼の購買力を增すべしと說く者ありて、或は彼に强ふるに米穀の輸出解禁を以てせんとするが如きは正鵠を失ふの甚しきものなり。請ふ各國の爲す所を見よ、何れの邦國が食物の供給を他國に强求するものやある、否百方其輸入を防制するを是力め所謂經濟上の獨立、關稅の戰爭、政治家の成敗と云ふは多く斯點に要領を得ると否とに依る。我は旣に砂糖に藍に棉に又淸國の雜穀に麻に非常なる侵害を蒙りたるに、尙も求めて米穀の供給を淸國に仰がんとするが如きは獨り農本を轉覆するの害のみに止まらざるなり。去れば淸國他日進て解禁を斷行するの時ありとするも、我は其時に臨て適當の手段を講ずるの必要を存す。

或は曰く國と國との輸出入は平均するものとは幾分か輸出入を平均せしめんとするの作用を有すべしと雖、今日の爲替賣買貨物輸送は何れも世界的なるが故に其作用微弱にして顧るに足らず。彼の米國が多く賣りて少く買ひ、年々數億金の超入を來して以て迅速に國力の發達を爲し遂ぐるが如く我又專心多く賣ることを力むべし。尙左の日淸と各國との貿易表に於ても多く買ふ國と多く賣る國と合致することなくして、國と國との輸出入平均と云ふことの殆ど無意味に歸することを知るに足るべく、去れば我國は淸國よ

り物を買ふの多少に頓着なく益〻輸出を進むることを力めて競爭上の一等勢力者たることを期せざるべからず

日本輸出入國別表

日本より輸出

明治三十三年	日本より輸出
米	五二、五六六、三九五 円
香港	三九、一七七、四五五
清	三一、八七一、五七六
佛	一九、一五〇、四二三
英	一一、二六二、九九七
韓	九、九五三、二七二
英領印度	八、七〇四、三一八
伊	七、一二九、三一〇
蘭	三、五五五、六一四
露領亞細亞	三、五四一、八三三
英領亞米利加	二、九五〇、六六三
布哇	一、二九四、七九〇
墺	四九七、一九四
白	二九六、五一二
瑞西	一一七、八七八
佛領印度	一一四、四〇七

日本へ輸入

	六二、七六一、一九六 円
	一〇、六五九、八五五
	二九、九六〇、七四〇
	八、〇九五、八一九
	七一、六三八、二二〇
	八、八〇五、六一八
	二三、五一六、三五一
	四五〇、一〇六
	二九、一九九、六九六
	五、七一六、七〇五
	三一六、六六九
	五、二六四
	四、五〇二、四七七
	七、九四九、二五四
	三、〇一二、五〇五
	三、六三二、六四三

總計

明治三十四年	清國輸出入國別比較表
	二〇四、四二九、九九四
香港	清國より輸出 一、四三五、一〇三 兩
歐洲大陸露を除く	二九、二六八、九一三
日	一六、八七五、七二五
米	一六、五七二、九八八
英	八、五六一、〇四五
印度	三、一四八、三六九
	二八七、二六一、八四六
	清國へ輸入
	一二〇、三二九、八八四 兩
	一七、〇四六、四五三
	三二、五六七、六五六
	二三、五二九、六〇六
	四一、二三三、五三八
	二八、九四九、三五八

第三節　清國の貿易力

余は爰に於て進て清國貿易力の將來を講究せんことを欲し左の表を製せり（專ら用治三十三年度の數に依る）

各國貿易力比較表

	人口一人に對する輸出入總額	一平方哩に對する輸出入總額
白	四一二、〇〇〇 円	二四二、四〇〇 円
英	二〇九、二〇	六三、六九〇
丁抹	二〇五、八四	三、三〇〇
諾	一一八、八九	二、一四八
佛	一一六、〇〇	二一、六〇〇

獨逸	九五、〇〇	
瑞典	九二、五一	
米洪	五八、二〇	
墺	四〇、〇〇	
希	三八、六七	
ブラジル	三八、〇三	
以	三七、六〇	
西	三六、〇〇	
ルマニア	三五、〇六	
瑞西	三三、六二	
墨	二五、二三	
秘	一五、七七	
露	一四、七九	
日	一三、三八	
韓	一〇、六九	
支那本部	三、六四	
	一、三四	

本表に依て清國の貿易力を見るに面積に比例しては風土熱惡、人口稀薄なる南米と衰弱の韓國とに勝るあるも、人口に比例しては世界の最低位に居る。夫れ清國の人口は世界の四分の一を占め合衆國に比しては五倍なり（本部及び滿洲の地積は、合衆國の五割）人口佛に十倍して貿易額佛の十分の一なる、又其面積は亞細亞の三分の一世界の十二分の一に當る老大國の貿易力の如何に微弱なることよ是其理由なくんばあらず。

第一●●清國の事物は自然の儘にして人爲を加ふること少く、却て人爲によりて自然力の利用を妨害せり。

第二●●清人は動物的の慾深きも衣食住の人類的需要程度淺し、且其需要は大概國內產出品を以て供給するに足る。

第三●●何物によらず廢棄、變更、新調、流行等のこと稀なり。

第四●●內地開放せず、外國の人及び事物と接觸せず、智識見聞を交換擴充せず。

第五●●輸出品には農產物あるのみ。

蓋し清人は永久に比較的需要少き人種なることを信ずと雖、良好なる廣大の土地勤儉なる多數の民口を有する清國の貿易額が今日の如く僅少なる所以は、其貿易と云ふ事柄が唯其口岸即ち皮膚に接觸したるまでにして未た內奥即ち筋肉脈絡に到着せざるに因る。彼等と雖外國の人及び事物と接觸し未た見聞せざるもの

を見聞するときは、男女貧富貴賤、都鄙各其分に應じて新しき需要と嗜好とを生起し來るは開港地幷に其近傍の清人の變化に依て之を推定するに難からず。

現在の清國の需要と之に對する日本の供給との狀勢は別表(一)兩一圓四十錢換、明治三十四年度の數の如くにして、清の需要品は概ね我國に於て之を生產供給するに難からず而して清國の購買力は決して今日の如く世界の最低位に在るべきの理なくして鐵道の開通、船運の增進、鑛山の開掘、內外人及び事物の接觸、政治の改良、幣制自働的又は各國他動的の誘引に因り、次第に貿易力を伸張して其地位の上進することは疑を容れざる所なるにより我國民就中工商業家は大に發奮する所あり政府も亦之が爲に積極的奬勵を施さんことを希望す。

清國總輸入中日本品輸入比較表

	總輸入	日本よりの輸入	總輸入一〇〇に對し日本よりの輸入比較
洋藥類	四六、一一一、二一一兩	〇兩	〇
綿布類	一三九、五一二、七九九、	一九、二九五、四〇一	一三、八
絨毛布類	六、六一八、三一九	二五、三九九	〇、三八
雜標布類	九八六、八一九	五二六、七三六	五三、三
綢緞類	一四、六〇〇、一二七	八〇三、九五五	五、五
雜貨類	一六七、七九四、八一〇	二二、二七四、〇八八	一三、二七
計	三七五、六二四、〇八五	四二、九二五、五七九	一一、四

を見聞するときは、男女、貧富、貴賤、都鄙各其分に應じて新しき需要と嗜好とを生起し來るは開港地幷に其近傍の清人の變化に依て之を推定するに難からず。

現在の清國の需要と之に對する日本の供給との狀勢は別表(一兩一圓四十錢換、明治三十四年度の數)の如くにして、清の需要品は概ね我國に於て之を生産供給するに難からず、而して清國の購買力は決して今日の如く世界の最低位に在るべきの理なくして、鐵道の開通、船運の增進、鑛山の開掘、內外人及び事物の接觸、政治の改良等清國自働的又は各國他動的の誘引に因り、次第に貿易力を伸張して其地位の上進することは疑を容れざる所なるにより我國民就中工商業家は大に發奮する所あり政府も亦之が爲に積極的奬勵を施さんことを希望す。

清國總輸入中日本品輸入比較表

	總輸入	日本よりの輸入	總輸入一〇〇に對し日本よりの輸入比較
洋藥類	四六、一一一、二一一円	〇円	〇
綿布類	一三九、五一二、七九九、	一九、二九五、四〇一	一三、八
絨毛布類	六、六一八、三一九	三五、三九九	〇、三八
雜樣布類	九八六、八一九	五二六、七三六	五三、三
鋼鐵類	一四、六〇〇、一三七	八〇三、九五五	五、五
雜貨類	一六七、七九四、八一〇	二二、二七四、〇八八	一三、二七
計	三七五、六二四、〇八五	四二、九二五、五七九	一一、四

第七章　日清貿易の奬勵

第一節　國民の覺悟

近く清國に於ける外國の利權擴張を誘導せしは二十七八年日清役の結果なり。而して我は血を流して財物を戰庫に入て財物を涉獵するは外人に委せり。而して我は血を流して寶庫を開き其寶庫に入て財物を涉獵するは外人に委せり。最近の北清役に於ても我は卒先して寶庫の安全を計りしに、其結果は矢張倉番の名譽職を奉ずるに過ぎず。是豈我國民の滿足すべき所ならんや、少くとも今後に於て我國民は倉庫内の經營に加はり、其利を分收するの覺悟を備へ、當番の外交官と軍人とは又其案内と保護とに任せざるべからず。

我國は清國に對し實業上何程の事を爲しつゝあるや、前段に揭げたる貿易表と左の表とを見て其大概を知ることを得べし。

在清各國船舶住民商居比較表

國旗	使用船舶總噸數の百分比例	住民數	商店數
英	五四、〇一	五、四一〇	四二七
獨	一五、五八	一三、二九	一、五三一
清	一一、四〇	二、二九二	四、一七〇
日	一、八五	一、三六一	二、二八九
米	一、五一	一、六四八	九九
佛	〇、八四		六四
露			一九

右の如く我國旗の下に在る船舶は清國各地出入噸數に於て一割一分を占むるのみにして、尚回送權は多く英獨に歸す。又住民及び商店の數は英國に次ぐと雖實力と効果とに至ては其少數なる他諸國に比して甚だ及ばず。日清貿易と雖清人及び外國人の掌裡に屬するもの多し。

夫れ我國は清國の善隣、同種同文なるに拘らず、彼の購買力の一割二分を利用するに過ぎず、彼への輸出就中工業の發達に依て製作品を賣ることは彼の現今の貿易力の極て微弱なるだけそれだけ前途に於て極て多望なるものあるを思へば、實に我全力を投ずべきのことたり。之に付或は食物の低落を以て我競爭力を增加するの最良手段なるが如く思惟する者ありと雖事實は之に反して食物廉價なる國は人民遊惰、工業不振なり、我は運賃に於て歐米に比し大に利なる所あるにより、將

來歐米及び清國と工商業上の競爭を爲すには勞働者をして滋養を取て勢力を養はしめ之をして勤勉ならしめ及び職業に熟練ならしめ又機械を多く且巧みに使用し資本を裕にし信用を厚ふする等に在り。

最後に余は我國民が對清優者たらざるべからず又優者たり得べき理由を列擧すべし。

一生活信仰其他種々の點に於て彼我相類似し交際し易く意氣投じ易し。

一距離接近せり。

一同文なるが故に談話讀書寫字等我に取りては容易なり然るに他國人に取りては是其最困難とする所にして或る外人の語に支那語を習得するは眞鍮の體鋼鐵の肺樫の木の頭彈力鋼鐵の手鷲の眼使徒の心天使の記臆メシユセラーの長壽を有する人の仕事なりと言へり。

一支那に於ては我國人は歐米人と同等に畏敬せらる。

第二節　輸出見込品

現在の輸出品は貿易表に依て之を知ることを得べし將來に付ても亦清國貿易表に依て推測を下し得べく且清國の開發に伴て新奇なる需要生起するに至るべしと雖余は爰に雜貨木材綿絲綿布の三類に就て一言する所あらんとす。

爰に雜●貨●と云ふは廣き意味のものなり人或は雜貨を輕視し又雜貨の結局見込少きを言ふものありと雖是我雜貨の粗製濫造に流れて不況に陷り又は大なる需要に應じ得ざるの有樣を見て判斷するに過ぎず。雜貨其物は普及的需要ありて獨り歐米のみならず亞細亞に於ても清韓西伯利亞印度等需要廣く且多し。故に品物を精良堅牢にし價格を適當にし其品物を實用的たらしむると同時に需要國の意匠を酌み取り且生產販賣組合を結ひて齊一なる品物を造りて多量の注文に應し得る如く爲すときは又帝國の一大物產たること、を得るに足る殊に我國は手技に長し小事業に慣れたるのみならず雜貨の製作には小資本を以て家庭の婦女老幼も利用し得へきか故に實に自然的雜貨生產國なりと謂ふへし。

木●材●は清國に於て最缺乏せり去れは建築には多く土石を交へ燃料には作物の莖根草萱等を用ふと雖家屋の組立器具の製造等到底絕對に木材を排すること能はさるなり。往復一年を費して來る所の貴州及び湖南の材は南京安慶迄の楊子江

沿岸地に於て消費され、上海の用材は寧波、溫州等より仰きて價格は日本に一倍し北淸の需要は多く鴨綠江上流地よりすと云ふ。淸の土地比較的山少く山あるも木なく內地の探檢家は同音に淸國の無木なるを言へり。されと農地を變して平坦林と爲すか如きは斷して能はさる所、又諸山の造林の如き遠大なる國家的事業は淸政府の容易に手を下し得さる所なれは、木材は益々減少し愈〻拂底すへし。從來の建築、什器、棺槨、船車等に於ける用材にも不足なれは近時の新需要を供給することは尙能はす。例は鐵道の枕木、銃砲の臺木、充裝の函樽の如し、余は漢口に於ける淸人の燐寸業を見しに其軸木、函の板材皆日本より輸入せり、又蛋白製造所にては製品を容るゝの樽を得難きか爲に石油空罐を改造して用ひたり。北淸より鷄卵を輸出せさるは其容器を缺くことも一理由なりと云へり。是豈我林業家の注意すへきことならすや。元來木材は遠距離の輸送を償はす亞米利加松の如きも我木材商は競爭上恐るゝに足らすとなせり、我國に於ては既に水害防禦、氣候調和、農業保護等の爲に營林の急要を認むるに、前途又營利上の目的明確なるに於て森林經營の迅速且大規模ならんことを希望して止む能はす。（杉原林學士の淸國

木材視察報告あり）

綿絲綿布の二者は、現在に於て然るのみならす將來に於ける淸國の最大需要品なり。蓋し手紡績、手機織か次第ニ機械紡織に其業を讓り其品を換るは何れの國も徑路を等ふする所にして、我國に於ては近く二十年間に其經過を踏みたり。然るに此兩貨は最競爭の激甚なるものに屬して、支那本國自ら其產棉と低廉なる勞力とを以て競爭に加はり、米國、英國及ひ印度は各自國若は殖民地の產棉と豐富なる資本と熟練せる工業とに依て有力なる競爭者たり。我は原料を他國に買はざるへからざるに加ふるに資力足らず大工業不熟練なりと雖、此競爭に打勝つに非ざれば我對淸貿易は半は價値を失ふものなるにより、余は此二業に對してはあらゆる保護奬勵を加へんことを欲す。但し當業者の奮起忍耐は根本の必要にして、近年綿絲貿易の或は印度に壓せられ、或は米國に市場を占有せらるゝが如きは甚だ言甲斐なき事に屬す。細物は英國、太物は日本、印度など云ふ內に米國は總ての絲布を製せんとす。綿絲綿布の對淸貿易に付ては元名古屋商業會議所書記長中村桂次郎氏の著述日淸貿易策能く其要領を盡せり。余は尙上海に在る日本某會社

長の談を最趣味あるものとして爰に記載すべし。曰く現今我國に於て生産する所の紡績絲八十萬俵（ベール）一俵に付十圓を我國に落すが故に八百萬圓の純益となり、大切の事業には相違なしと雖賃銀の安き印度、支那と間斷なき競爭を爲さゞるべからず、寧ろ將來の方針は織布に向けるを可とす。何となれば工業の競爭には難きを避けて易き敵を亡ぼすを秘訣とし、我國は賃銀の低廉に於て歐米に競爭し易きが故に、歐米より輸入する綿織物の如きは取りて之に代らざるべからずと。今年綿絲の清國輸出衰退を見ても益〻更に之に加工すべき綿布業奬勵の必要を思はしむ。

第三節　工業

我工業を盛にして清國の輸出貿易上優勢の地位を占むべき必要は既に述べ盡せり。爰には清國の工業と之に對する我方策とを述べんとす。先づ清國工業の現狀を語らんに、現在工場は長江筋主として上海に其若干を見るのみにして、將來も原料、運送用水、氣候、鐵、石炭、勞働者等の關係よりして長江筋を以て工場地と爲すべしと雖、現在の工場は概ね振はざるものなり。蓋し清國の資本は信用を主とし其信用關係に依て隨分見るに足るべき商業を營むと雖、工業は清人未だ慣熟せざるのみならず資力の部にも述べたる如く多額の現實資本を提出することは彼等の案外困難とする所なるにより、現在の諸工場は多く官立か半官半私か若は大官の私財より成り、現在に於ても亦近き將來に於ても清人自ら進で大に企業を爲すの資力と智識と判斷とを有するものと思惟し難し。又彼國の社會及び政治は近世の大工業を營むに適當せざるものあるが故に、結局清人は外國人の企業に投資又は合資する場合多かるべし。

清人企業の諸工場の振はざる所以は第一に重役の姻戚故舊等に委員其他の名義を與へ多數の無職者に給料を仕拂ふ、第二に技術者を缺き外國の技術者を聘用するも十分に委任せず、又其手足となりて働くべき者なし。第三に工場經濟に最必要なる秩序と云ふことなく、記帳計算の如きも頗る曖昧にして社長始め何人と雖明確に之を知る者なく、十二月末に至て始めて或る計算が出來る位の始末なり。第四に總辨又は社長を始め諸役人皆中間口錢を取ること殆ど當然と爲すか如し其他種々の理由ありと雖要するに清人の習慣は大工業に最不適當なるものにし

て、某造紙公司の如き蘇國生れの老技師ありて始めて能く營まるゝものにして、嘗て清人之に代りしことありしに忽ち大損を醸せしと云ふ。聞く所に依れば我紡績所は二萬錘あれば一晝夜七十個生産し、上海の興泰號は始め生産少かりしも日本技師入りて二萬錘にて六十個生産するに至り、武昌官局は九萬錘を以て一日七十個を生産するに過ぎずと云ふ。武昌官工局の窮態は世間既に知る所、蘇州杭州の製絲局も又估哉の狀態にあり。

右の外清國の工業經濟上勞働者に關する大困難あり、婦人の纏足は製絲工場に於ては大なる支障を見ずと雖、他の工場に於て多少功程を減するのみならず、內地に在ては小女濫に外出せざるの例に依て最初は工女を集むるに困難を見出すべし。之に勝る所の支障は清國に戸籍なきことにして、且男女の勞働者を集むるは請負に據らざれば甚だ困難なるに依り、唯々工場に何人の勞働者從事すと云ふのみにして各人の去就常なく其姓名を問ふの要なく、其技術を訓練し又は之を賞與するの途なく、經驗あるもの初心なる者相交り、觀覽者あれば手を束ねて凝視し、時を擇はず食事を爲し、中には兒に哺乳せしむる者あり、實に亂雜なりと謂ふべし。又彼等の無責任なる絲の斷れたるを繼がず、器械の汚れたるを掃はず、剩さへ製品を盜むの類なり。

外人の企業は清人の如き情弊なしと雖、右の如く勞働者の不都合なること、役員技師の高給なること高給の外人を多く使用し得ざるに於て、勢事業の大部分を清人に任せざるべからざること等の爲に又頁好の成蹟を得ること能はず。去れば清國の工業は甚だ望なきに似たりと雖、二個の理由ありて漸次發達するに至るべし。

第一 現今不引合の會社は或は株券の切下を行ひ、或は轉々讓渡して遂に引合ふべき點に達す。斯の如くして次第に事業に慣れ又熟練したる職工輩出するに至て一般工業の發達を助くること。

第二 日本人が清國工業の要路を占むるに至ること。

余は第二の點に付て聊か論ずる所あらんとす。日本人は今や稍々工業に慣れ、工業の敎育を受けたる者も亦少からず。職工勞働者にも習熟せる者あり、勿論清國の一工場に一二人の日本人を入れたりとて唯技術の一部を擔任するのみにして

工業經濟の全般に對し其効なしと雖若し日本人が技術長、技手、監督員其他要部に配置され、即ち日本人か事業の全權を引受けて而して低廉なる支那勞働者を使役する時は始めて効績あるを見るべし。勿論其給料は日本に於ける一倍を拂ふことを要すれども、外國技師に比すれは低少なり、浦東に於ける某造紙公司の如き此適例にして、我王子製紙會社長事業の全權を握り、荒井某常に工場に在て實務に當り、既に初年より利益を擧け今や工場を擴張せんとす。又上海の某號は多年損失を重ねし紡績事業を技術上に於て日本技師某に一任し、爾後利益の見込立つに至れり、某は則ち男工十七名女工二十三名の日本人を配置して事業を督勵せり。蓋し斯の如くして工場の事業は日本人に任し資本の融通原料の供給及び内地の販路に付ては清人之に當ることゝせは彼か得意の地方連絡と信用融通とに依て最好結果を奏すべく是實に双方の長所を利用するものなり。或は斯の如く清國の事業を助くるは求めて勁敵を作て我自滅を知らさるものなりとの憂は一理なきにあらすと雖、支那は我專有物にあらさるにより早晩外國人か之に著手し、又我にして彼を助けされは彼は他の外人に依頼するは必然の勢なれは、我は進んて工業の要部に立入て以て其先を制し其實權を握るに如かす。元來資本に於て歐米諸國と對峙を竝る能はさる我は智識技能を以て競ふの外はあらす斯の如くして能く成效せは我内外の企業に向て外資自ら之に隨ふの信用と動機とを形成すへく又日清の關係に於て勢力自ら增長し、清國の事業に必要なる物品の供給を我に於て司るは勿論、日清共資事業をも誘起し直接間接の利益は清國の發達に伴ふ購買力の增加と共に我國に於て多く之を獲得するの便益あれは決して我國の前途を憂ふるに足らさるなり。

第四節　鑛業鐵道及ひ水運

清國本部の農地の殆と開拓し盡され農業の普及せるに反して、鑛業は全然未開なりと雖、鐵、石炭、金、銀、銅を始め各種の鑛物に富むことは調査の示す所なり。支那の鑛業の前途は農業に比すれは更に有望なるものと云ふへく、急に清國の利を興し速に其の購買力を加ふへきもの鑛業に如くなし、去れは各國は爭て其採掘權を獲得し且採掘の利は一に運送の便利に伴ふにより併せて鐵道敷設權をも取得せり。近時清國政府は鑛山と鐵道とを各別の問題と爲さんことを欲すと雖、鐵道を營む

には石炭を要し、鑛物を搬出するには鐵道を要するにより是は到底離隔し難き問題に屬す。蓋し清國版圖の大なる既に著名の鑛山は各國の權利に屬するが如きも實際に於ては尙一部に過ぎざるべし。我國に於ても調査を繼續し、良鑛を發見して清人と共に企業すること最急要なりと謂ふべし。鑛山は概ね山奥に在るにより其採掘の爲には自然內部に侵入し、內部と連絡を通じ、又之に依て汽車汽船の開通を導き、沿道には企業國の威化を與へ商利隨て發達すべし。

鐵道に就ては佛人某の支那現勢圖を見て如何に列國が其政略及び商畧に於て機敏なるかを知るべし。米國經營の粤漢鐵道は我九州線に比すべく、漢口上海間は山陽線に比すべく、白耳義シンヂケートの盧漢鐵道英獨經營の天津上海間鐵道は中仙道及び東海道鐵道に比すべく、關內外鐵道は青森線に、露の東淸鐵道は我北海道鐵道に比すべし、其他露、獨、英、佛、白、伊、等の經營に係るもの數線あり。斯の如くんば則ち淸國に於て最主要なる線路は既に各國の權利に屬して又甚だ望なきに似たりと雖、更に歐大陸又は米大陸の地圖を繙きて蛛網的に敷設されたる鐵路を見よ、狹長なる日本の地形より見れば所謂幹線は自ら一長線を爲すと雖、大陸の地形よりするときは縱橫幾條の幹線あり又之より分岐し之に連通する所の支線は幾條なるべきを知らず。支那は既に開けたる土地及び稠密なる人口を有す、將來內外接觸し鑛工商業發達するときは鐵道の前途も亦多望なり。去れば決して現時の既定線に失望せずして敢て大小長短を問はず有利なる線路を調査して敷設權を得ることに力むべし。夫れ鐵道は獨り其物の營業利益のみを貴しとせず、之が爲に彼我の親接、貿易の媒介、附近人民の威化並に之あるが爲に生ずる所の權勢を以て重しとするなり。去れば水運と共に鐵道に對しては我國家に於て相當の補助を與ふることは其必要と義務とありと謂ふべし。尙鐵道の威化力の至大なる由を言はんに、試に盧漢鐵道に乘るべし、其會社に從事し其他直接に該鐵道の利益を受くる所の大小の淸人は多少の佛語を辨じ佛人(白を含む)に親炙し、佛人を崇拜するを見るべく、東淸鐵道に乘るときは露淸の關係又此佛淸の關係の如し。

ポリユー著ゼ、アウェークニング、ヲフ、ゼ、イースト」の最末の語句に「鐵道は支那の開化を導くべき最良の傳道師なり」と言へるは余の最同意を表する所なり

水運に就ては支那の自然水路一萬哩、其他運河、湖水等多し、現時支那ジャンクの夥

しき岳州漢口間のみにて十萬と號す。汽船業又は引船業の見込あること知るへし。大東汽船會社の既に成効し湖南汽船會社の將に起らんとする甚た賀すへし。唯現に後者の構造に係る汽船に對しても疑問あるか如く支那の水位は四季甚しき差あり、船の構造及び營業の方法に於て特に注意を加ふへし。

第五節　調査

軍用地理調査は知らず、實業的調査に至ては甚た缺乏せり。從來清國の內地に入込みたる日本人の數は必しも各國に比して少しとせすと雖、此等の探檢者は多くは歌慷慨の志士にして實用的の人にあらさりしを如何せん。外人は宣教師に至るまて實用的視察力と記述力とを有して、公然、秘密の有益なる著書又は報文少しとせすと雖、我同胞の著眼は歷史的興亡の跡又は山水探勝にありて實業上の視察力に乏しく農商と往來せす。隨て調査報文等の見るへきもの稀なり。元來清韓に於ける調査の困難は余の辯解を要せさる所にして外人の書中に支那に於ては一に事物を明確に知る人を見出すこと能はす。二に其考ふる所又は知る所を眞實に話す人を見出すこと能はす、三に一の事件に付二人以上の言說の符合する場合を見出すこと能はす、四に其符合せさる言說に依て事の眞相を發見せさるへからさるの困難を免るゝこと能はすと曰へるは實に適中せり。去れは實地の調査は愈々其必要を唱道せさるを得す。

近年漸く實業家の來往する者あり、又農商務省外務省より時々專門家を派遣することありて此等の人々の見知及び報道は自他に裨益すること甚た大なりと雖、多くは僅少の時日と不完全の準備とを以てし未た日清役後に行はれたる佛國商業會議所聯合派遣委員の如き、英國商業者の派遣委員の如き、米國の國費調查委員の如き、又は彼の獨逸のリヒトホーヘン及びクナップ氏の率ひたる官費調查の如き大規模なる調查の我國に行はれさるを遺憾とす。蓋し各國か斯の如く特別に調查を爲す所以は大體調查の必要の外、其利害、其祕密に於て各見地を異にすれはなり。

各國の經營に就ても殊に各鐵道線路の如き我は大に開通後に貿易の利を占むることを企てさるへからさるか故に、豫め其線路地方の一體の狀況、貧富、需要、物產、將來の變遷、仕向方法、諸掛等に付て調查し置くの必要あり。

調査の項目は農商務省刊行の「清國派遣員調査事項に關する意見」なる小冊中に其要領を登載せるか故に之を略す。余は各地の商業會議所か各其地方の將來の日清貿易に必要なる調査を爲し、又聯合して重要なる調査を行ふに鋭意ならんことを希望す。

外務省の通商彙纂、農商務省の隨時報告、支那調査會の支那通商、黒龍會の東亞圖等近時見るへきものあるは甚た喜ふべし、尚公私の報告著述飜譯等益々其多からんことを望む。

從來調査視察は人心の向ふ所主として歐米諸國にありしと雖、歐米に就て學ふへきこと做ふべきことは多年幾多の人士を經て略ほ其緒に就き、將來に於ても各種の連絡に依て智識交換の途絶へざるにより感服摸做のをみやげ勝なる歐米旅行は暫く適度に止めて、自今は大に亞細亞の新舞臺就中清國に於て實際營利的演技を爲さんことを欲す。其清國に旅行する者は歐米に於て感服を以て終始すると異なり自尊敢爲の積極思想を誘起することを覺るへし。

第六節　教育

我國は獨り清國の教導に任するのみならず、實際同國の實業に立入て技術上の勢力を占むることの必要得策なるは敢て疑を容れさる所なり。之か爲には我農商工鑛の專門教育は獨り我國の爲のみならず、將來亞細亞の舞臺に於ける運動上の最大勢力を基することを信す。但し必しも大學教育を要せず、却て大學者の其地位を選ひ其職務に好惡を爲す者よりは、場所と職柄を擇はす前途に望を屬して忍耐勤勉せんとする專門者を多數に養成すへし。又實業學校、徒弟學校等に依り職工長、上等勞働者を養成し、實業全般に其人を得せしむることを計るへし。

我貿易練習生も亦直接に日清事業の爲必要なるものにして多々益々可なりとす。現今農商務省より各國に派遣する者歐米六十八人、清國三十二人、其他十一人なりと云ふ。自今愈〻清國派遣の比例を多くするのみならす尚全體に其數を增加することを望む。是は獨り清國に就て言ふのみならす總て新進新開の地には練習生を置て他日通商の地歩を得せしめ且其通信を徹することと最良法なり。

上海天津等に日清語學校を設置し、通商上の目的を以て彼我の子弟を敎育することも亦捷徑の一なり。現時此類のものなきにあらすと雖不完全なるにより我政

府は之を補助監督するか又は官設するの必要あるへし。

第七節　日清協資

清人は工業、鑛業、鐵道業を始め總て新世紀の事業に慣れざるにより、外人との協資經營は其望む所にして將來益〻行はるゝに至るへし。而して其一私人の出資事業は別とし、其他半官半私責任歸著點の明瞭ならざるか如き企業及び出資あり。是は清國の特有にして例は武昌の諸工業官局の如きも此類なり。若し日本人にして之を危まは協費の機會を見出すこと難し。故に萬一の場合は外交上直間接の援助を求め得ること、して彼を信用するの外なし。而して彼と協資するときは其官府なるときは製品の專賣其他對人民に於ける各種の便宜あり、又其私人なるときは原料の仕入、信用的融通、製品の販路等に於て利すること多し。小なる事業に於ては多少の資本を有する「コンプラドル」と協同するも亦便法なり

第八節　北清經營

爰に北清に就て特に言ふ所以は滿洲と共に新進新開の地にして彼よりの輸入には大豆、豆粕、羊毛等、我よりの輸出には綿絲、綿布、雜貨等前途益〻見込あるのみならず、近く東清鐵道、盧漢鐵道、山東鐵道の開通あり、農、牧、林、鑛の產物歲月を追ふて增加す。而かも外國人の着手南清に於けるか如く多端且輦固ならす、且我は距離近く金融、運送等にも其便多きにより南清に比すれは一層我經營の餘地あるものと謂ふへし。而して其經營の根據を得るが爲滿洲の開放北清及び滿洲に於て互市場の開設居留地の設定を必要とす。蓋し日清戰役の結果、天津條約の如きも其主眼を長江筋及南清に置きしに因て却て漁夫の利は諸外國に占得せられたるは北清に於て一生面を開くの必要あり。

第九節　我物產の改良及ひ組合の設置

工產物、水產物、雜貨等によらす堅牢と廉價とを旨とし、常に先方の嗜好に注意し、裝飾意匠に至るまて能く彼の意を迎ふるに力むることを要す。

我商人の最大缺點は其一致せざるにあり、之が爲に賣買共に自ら損して而して益々信用と勢力とを失ふ。故に居留地に於て產業組合を結ぶを必要とす。或る在清日本商人に非すして同胞の裏切なりと言へり。

第八章　清國雜記

第一節　人心民情等

孔孟は崇拜せらると雖形式に止りて事實上清人の精神を支配し居らざることは、其教旨と現今の清人の行爲とに一致を見ざるを以て明なり。

清の識者貴人は天命を樂み醫藥を採らざる者多し。農民は其不作を、商人は其損失を天運に歸するが故に淡然としてあきらめ好し。余の同行せる通譯は日本に三年在留し、又多年佛人英人に附き居て稍開化せる者なるに拘らず、本年の虎列刺は北清怨靈の所爲にして之を免かるゝには銀を與ふるの外なし、(支那には銀紙を燒て兩銀に代ゆるの習慣あり)との卷說を信せり。

支那の文學に付最感服したるは健腕直筆の能書と詩文は勿論額面招牌廣告等に用ゆる語句の多趣巧妙なることゝにあり。且其文字を貴ふや反古にて臀を拭ふときは備婦厠を掃除することを拒むの類なり

科學は皆無と謂て可なり

武は文は比し尚卑しめられ。近時漸く武を練るの風を養成し、文武昌の自强學堂(中學)に於て盛に兵式體操を行ふが如きは甚だ可なり。

或る經驗者は清人は青年の時は中々敏賢なりと雖長して遲鈍に化すと云へり。早婚其の理由なるべし。又留學生の日本より歸朝せし者に會せしに概ね生意氣の風ありて或は政治を豪談し、或は長老を嘲罵す。我教育者宜しく注意せざれば彼等は其地步を確取する前に排斥を蒙るへし。

清國の習慣法に依れば自ら白狀して伏罪するに非ざれば罪せられざるなり。故に犯罪の踪跡をくらまし得へしと信ずる場合には中々に大小の罪惡を爲す。僕童の如きも罪を恕するの豫約を與ふるに非ざれば斷じて自己の惡行を白狀することなし。

清人は能く働き能く貯ふと雖彼等にも亦全く道樂の無きにはあらず就中賭博と女色と鴉片と是なり。賭博の爲には一年の貯蓄を正月一度の遊に全失するあり。女色は錢を惜まずして上下の貧る所鴉片の例は米穀の最大輸出港たる蕪湖に於て米穀多く出づれば從て鴉片多く入るを以て、所得を之に投ずることの甚だしき

を察すべし。

清人が能く公衆と共に樂むは感心なり。上海の四馬樓茶館及張園に於けるが如きは最著しきものにして、其他各地の茶館は外國の「カムエー」と同しく料理店も矢張外國風なり。

清人の排外思想は各地厚薄あり、又訓令行屆きたる所は容易に發動せずと雖、何れの地も其思想の全然脫却せられたるに非ざるべし。余は武昌に於て一度土片を、漢口に於て小石を投げられたり、何れも物蔭よりせる無智の青年なりし。唯田舍に入るときは夥多の群衆に圍繞せらるゝが故に往々間違を生じ易し、誤解より生ぜし一騷動の例としては外人二名河南省に入り、例の如く圍繞せられて其臭氣を拂ふ爲香水を吹きたるに彼等は是ぞ外人が毒氣を散布するものなりとして寄り掛て叩き伏せ又其携帶品を奪掠せしことあり。

第二節　下層人の性行

我國は德川三百年の太平の間幾分文弱に流れたることあるべしと雖、幸に人心沈萎せずして義俠の氣を存し事物の發達も亦見るべきものあり。故に開國の場合に當て國の品位上外人の憐愛を招きしことあらんも輕侮を受くるには至らざりし。然るに清國に在ては何の理由に淵源し、何の時代より浸漸せしを知らずと雖、其下層人民は他の國民に特異なる性行を有せり。余は之を表現の徽證に依て動物的性行と名くるの已むを得ざるものあるを思ふ。余は前節清人の特長を論じたれば爰には憚なく其反面を叙すること、を忘るべからず

遂ぐるは一は此の性行あるに因ること、を許せよ。但し彼等の物に堪へ事を數理の智能を缺く 蚊複雜の事項を理解せず、自然を信じ天運に托す、諸事一定不變にして天性の保守なり觀察思考の力に乏しく又其念慮を缺く。

同情に乏し 他の災難に對する極て冷淡にして溺れて死に瀕する者を平然看過するも良心に苦痛を感せず、人を責め又は命を絶つにも力めて殘酷の手段を選ぶ。

情誼を缺く 知人の關係は利益的に主從の關係は給料的なり。凡て下人を用ふるには命令を反覆して記憶と注意とを喚起し、且監督を嚴にせざれば心情の關係なき彼等より效果を收むる能はず。

遠慮なし 所謂遠慮氣の毒、氣をきかす等の觀念なく、我物を大切にすることほど

左樣に人の物を粗末にし、己れの儉客なるだけそれだけ他の經濟には無頓着なり。物を請ふに節制なし　彼等は慾に飢へ慾に飽かざる者なり。錢食其他物を請ふに節制なく謝意なく多く與ふれば益〻求む。

清濁を辨ぜず　支那の江河は曾て清まず、清人の潔不潔を辨ぜざる猶其如し。彼等は同一の布巾を以て一切の物を拭ひ、便器を洗ふことゝ米を研くことゝを同時同流に於てするを意とせず、清人の不潔は世間の通りものなれば又反覆するを要せず。

高尙の氣を缺く　美術、裝飾、觀光等の觀念に乏しく、隨て家庭に交際に凡俗を免れず、殺風景を極む。

名を輕んし利を重んず　或る外國人は清人の特性として體面を重んずることを論ぜり。然とも是眞に體面人前的にして良心より出てたる名譽心にあらず。己れの信用を損せざらんとの利益觀念より湧き來る。傳道師も彼等の信仰心を喚起するに未來の幸不幸を以てするは遠くして難く、現在の損益を以てするは近くして易しと示へり。彼の風水論の如きも亦損益觀念に基くものなり。

身體は頑強なり　彼等は粗食に堪ふ、寒暑に對し比較的感覺少し、彼等の群聚喧囂を意とせざるは尙群羊を見るが如し、其退屈を知らざるは門前主を待つ牛馬の如く、四五十日間舟中の客と爲て倦怠せず又燥心せず、彼等は石を枕にし土を床にして安眠することを得、傷痍の癒へ易きは人體として稀に見る所、他國人の致命傷も彼等に取ては重輕傷に止る。

第三節　衣食住等

建築は北清は材料の缺乏なるに依て醜陋を免れざれども、南清は木と石と煉瓦と瓦と塗土とを用ひて中々に廣大且堅固なり。概して清國の建築は不燃性、耐久性なり。

何物によらず修繕せず清掃せざるは清國の風なり。故に修繕を加へずして朽廢殆く用を爲さゞるに至て新築するが故に、隨分汚穢不體裁を極むと雖、固と堅牢の物質なるにより用に耐ゆるなり。彼の如く餘りに修繕を爲さゞるも不可なりと雖我國の如く山に河に堤に家に器具に人の體まで一切萬事修繕的なるは決して誇るべきことにあらず。我國は堅牢主義の發達せんことを希望す。

庭園の趣向は人造の巖窟と、青藻に滿ちたる停滯水の池と、雜草の生へたる地面と回廊とより成りて千篇一律なり。

室內の裝飾は最粗朴單調にして木の椅卓と、能書及び惡書の掛物あり。美術品は最缺乏なり。

衣服は最大多數は淺黃の棉服なり、貴官富豪に於ては絹布毛皮を用ひ其價も高貴なるものあり。

食物は我國と大に異なりて彼等は果物の外生物を食ふこと稀なり、其果實は彼等の最好む所にして各種の普通果物は勿論、木の實爪の核に至るまで常に食膳に供ふ。先つ常食は米、麥、黍、粟を始として豚、羊、家禽の肉、諸乾物、水產物、野菜等なり。何れも熟煮し、食ふ毎に煮て其冷へたるを用ひす、但し燻肉、油揚肉の如きは冷菜として廣く用ふ。概して貯藏物乾物を多く用ふるにより運送便利にして我國の漬物桶、味噌桶、醬油樽生物等を常に携帶せさるへからさるに比して萬事に利なり。用水は在るものを用ひ淸濁と流滯とを問はすと雖彼等の決して生水を用ひさるは感心なり。飲食には勿論掃拭にも煮て之を用ふ、所謂開水なり。市街には常に

多量の開水を用意して之を賣買す。

宴席は西洋的に卓を圍み獻酬を爲さすして對手を指名して盃を擧け、時に乾盃を促すなと獨逸のプロジット、アウストリンケンに似て善し。

大官の面會は頗る手數を要す、先つ照會して面會の日時を定め、而して先方は此時門戶の開閉、守衛の警護等儀式を作り、主人は服を代へ下僚を率ひて客を迎へ應接室には菓果洋酒を供ふるなと双方に取て多くの時間と手數とを要するの不便大なり。是等は多忙の時勢に於て速に變改せんことを欲す。

美術及び工藝は前代に其盛を極めしことあるも淸朝後は寧ろ退歩して發達せさりしものゝ如し。骨董店は概して豐富ならす、文房具、玉細工、書畵、陶磁器を主とし北京上海には偶ま優品ありと云ふ。其他舊來の都市には骨董店あれとも明朝以前のものにあらされは見るへきものなく、之も長髮賊其他時々の亂により毀却せられたるもの少からさるへし。

余か武昌滯在中聞き質したる物價左の如し、但し一吊は千文にして例は湖北米一石四吊八百文は四千八百文にして、當時銀一弗は八百七十五文なりしにより銀五

弗四十八錢に當る。

清國武昌物價表

物名	數量	價格	地名	調査月日
北米	一石	四吊八百文	武昌	三十五年六月十二日
湖南米	一石	四吊八百文		
豚肉	一斤	一百十文		
牛肉	一斤	六十四文		
鷄肉	一斤	一百二十文		
骨共腹	一斤	一百六十文		
小鷄子肉	一斤	九十六文		
魚肉上等	一斤	八十文		
雜魚肉	一斤	六十四文		
鵞	一斤	一百二十文		
家鴨子無毛羽	一個	八文		
黄瓜	一斤	十六文		
白菜	一斤	十二文		
蘿蔔	一斤	五六文		
白菜上等品	一斤	八文		
茄子	一個	三百二十文		
白菜本地	一斤	二百八十文		
火腿上等	一斤	一吊九百文乃至二吊四百文		
全魚下等	一斤	八百數十文乃至九百六十文		
海參	一斤	八百文乃至九百六十文		
香菌	一斤	九百文乃至九百六十文		
鰷魚乾	一斤	五百文		
鮑魚乾	一斤	九十六文		
黄花菜	一斤	六十文		
木耳	一斤	六十四文乃至九十六文		
豆腐乾	一斤	四十八文乃至六十四文		
豆腐	一斤	三百六十文		
麻油	一斤	一吊七八百文乃至二吊文		
醬油	一斤	二吊七百文	蔡甸	三十五年六月六日
紅白醋	一斤	百十文	仝	仝
煤炭	一斤	百十文		
板炭	一石	五吊六百文乃至九吊	仝	仝
大豆	一石	三十吊乃至四十吊	仝	仝
豆粕	一枚八斤弱	二十吊乃至四十吊	仝	仝
豆油	一斤	幾吊乃至十幾吊	仝	仝
大豆	一斤	百六十文	興隆集	三十五年六月八日
牛	一頭	百四五十文		
黄田	一斗田(即一畝)	二吊六百文		
水田	一斗田(同上)	三吊文		
旱田		十二三吊文		
鋸鎌	一把	百六十文		
草鎌	一把			
唐箕	一組			
二人用水車	一組			
五人用水車	一組			
除草鋏	一個			

普通帆　一個　三百文
手　一個　三百二十文
熊　一組　一吊文
羆　一組　一吊文
紐

言語は各地異なれども北京官話は最廣く用ひられ、官吏及び學文ある者と談話するには毫も差支なし。然ども之を知らざる者及各地に於て農家商人等下流の者と談話するには通辯を用ひざるべからず。

通辯は旅行者に取て最緊要の關係あるものにして食事の世話、靴磨き、遊覽案內等には清人の通辯は誠に適當せりと雖、旅行の目的調査を爲すに在るときは適當の通譯を得るに於て困難少なからず、啻に寂寥を辨ぜざるのみならず豆、麥、犁、耙なと云ふ言葉をも知らざる者多し。又大官に面會して必要の談話を爲さんには必ず日本人に通譯を依頼する要す、清人の通譯は要領を失ひ且信頼するを得ざれば忽り。

旅行の困難、道路交通の不便、旅店の不愉快、携帶品等のことは略す。

第四節　經濟所感

清國に於ても都會熱起れり。長江筋の如きは都會多きにより著しく農業者減少を見るに至りしと謂ふ。都會の職業には限ありて早くも社會の不運兒と化せる者多し。去れば都會は遊民、無頼漢、乞食の淵叢となり、又勞働者と稱する者も人に比例して業少なきにより如何なる賤業酷役にも爭て從事せり。例ば旅館の門を出て又は波止場に下り、又は車站に着きて見よ、數十の車夫、揖夫又は擔夫は周圍に蝟集して己れ其賃錢を得んとする有樣恰も餓虎の肉を爭ふが如し。

清人忍耐勤儉の結果自然に頭角を顯はす者殊に新開地に在りと雖、彼等は大體其分を守り之に安んずる者なり。夫れ官吏とならんには平素文學に從事して試驗に應ずるの閑日月を有するか、又は官を買ふの資を有する者ならざるべからず。良商賈とならんには信用と得意と組合員資格とを持たざるべからずして是等は一朝にして得べからず、其狀恰も我維新前に於て役人は士族に限られ、商人は問屋株に制せられ、勢分限に固着せざるを得ざりしと同し。

清國に於ては若干の現金あれば餘は信用に依て幾倍の商賣を營むことを得。去れば現金は又最貴重さるゝ所にして資力豐に現金多き者は格別に利を占むるこ

と多し。清國の仕拂は各地習慣を異にすれども五月八月十二月の三期なと云ふが如し。就中十二月末は何れの地方に於ても大切の決算期にして、此時に不拂或は遷延を爲すときは將來の信用を減ずること非常なるにより現金の貴重なること此時に如くはなし。故に平素二十兩の品物も仕拂期節に現金を以てせば能く十八九兩を以て、又十二月期なれば能く十六七兩を以て仕入ることを得べし。斯の如くして有力者は益發達し、小資者は容易に發達するの期あらざるなり。

清國上海が殆と外國となりたるの實あるに懲りて張之洞は自開港場なるものを設定せんことを企て、既に岳州を開き又將に武昌を開かんとし、湖南の市府にも及ほさんとす。是妙案に似たりと雖清國法權の下に能く商港の發達し得るや否や疑問に屬す。思ふに行政に警察に要路に外人を置て安心を與ふるにあらざれば內外人來集の望なかるべし。

清國に於ける銀の下落は獨り該國の困難を增すのみならず我國に取ても痛心すへきことなり。何となれば第一我國への輸入を增し彼國への輸出を減し、第二外國市場に於て彼我同種物產の競爭上我國を不利益ならしめ第三蠶糸茶の如き貿易品は彼國の安賣に連れて我國產も下落するを免れさればなり。

清國に於て新なる歲入を要する場合には請負納稅主義に依て總督以下便宜稅目を定むれとも、前にも言へる如く多く之を間接稅に取る。例は今回の償金分擔に付ても或は亞片稅を增し、或は大市街に店舖稅を課するが如し、武昌農務學堂の經費を徵するには牛皮稅を徵し、又武昌の警察設定の爲には不動產賣買稅を起し、漢陽縣の農學校の爲には豚の賣買稅を起せしと云ふか如し。

清國の改進を促すへき大計は敎育に在りと雖、現實に効果を見るへき手段は鐵道、汽船、機械の如き物質的誘導にあり。且早晩施設すへき改革の項目は凡そ左の如きものなるへし。

官吏の任免俸給及び官衙の組織
政治の統一及監督
警察及司法
法規
戶籍

生命財產の安全、匪賊の退治
諸稅法及釐金
殖產
交通
度量衡
貨幣
兵備

江蘇、浙江の兩省は清國文明の中心且清國の富源と稱せらる、民富み人賢く又大官の養老地たり、天然の風景あり、名所古蹟あり、元來土地肥沃、水利に富み、交易容易なるに依ると雖其此に至れるは米を作りて食物を買はず、生絲を賣り絹織物を製して正金を取るか故なり。是實に農工商併進の一小模範地と稱するに足る

亞細亞大陸は概して風景に乏しく、南清以南は大陸島嶼皆炎熱加るに一般に惡疫流行す、又人種は土人に非されは未開にして歐米人の友とし語るへき者なし。清國は現在將來に於て亞細亞の最大貿易國として逐年外人の入込み來ること多し

と雖、商利を外にしては外人の境遇甚た憐むへきものあり。氣候身體に適せす見るもの目に可ならす平原なる土地濁りたる水不潔なる市街鄙しむへき人恐るへき惡疫に常接しつゝある外人は少くとも夏期に於て暑を避け病を逃れ精神を養ひ以て一年間の心身健全を計るへき補養地を求るは必然の勢なり。而して其の補養地は我日本國を外にしては他に在ることなし、我明媚なる山水親切なる國人、清潔なる風習各種の名所古蹟及び美術品等は果して外人の心身を補養するに足るへし。我は瑞西に比して海あり伊太利に比して東洋的の美あり、若し漫遊客を迎ふるに益設備を完全普及せは世界の一等公園亞細亞の不二樂土となり得へきこと必せり。我は之に依て數億の正金を利することの計を怠るへからす。

唯此一等公園地不二の樂土に生れたる我國民は幸か不幸か之か爲に對外勇氣に乏しく一度出たる者は早く還らんことを希ふ斯の如くんは又國勢の伸長に害あるか故に我國民は勇氣の源泉たる體力を養ふことに注意し、殊に教育上に於ては體育智育の各適度を得ることに深く注意する所なかるへからさるなり。

第九章　韓國ノ價値

第一節　總說

清國を見たる後の韓國は玉を見たる後の石の如く、重量に依て之を比せは釣鐘と提燈との如く價値に付て論ずれは肉と骨との如し。然とも其內情を研究し深切に觀察を下すときは政治上の關係は之を措き、我國との經濟關係に於て遺棄すへからさるの價値あることを思ふ。

韓國は開港場に於て單純なる交易商業あるのみにして純然たる農業國なり。是は韓國の輸出品名を見ても明瞭なり。蓋し將來韓國の實力を形成するものは此農業と若干の鑛業とに外ならさるへく余は專ら農業上の觀察を下すべし。

韓國の地勢は寧ろ急なり、是は島國半島國の常に屬す。諸開港場に入て前面を見渡し、又は群島の間を縫ひ沿岸を舟行して目を左右に放つときは、流にあらざれば山にして韓國の殆ど農耕地に缺如せるかを思はしむ。（韓國の地勢地質は小藤理學博士の調査報告あり）

雷に沿岸のみならず內地に入るも亦山嶽重疊旅行者の面前に山の屹立せざること稀なり。

韓國は比較的大河江に富むものなり。（豆滿、鴨綠、大同、漢江、錦江、洛東の六大江あり）唯淺くして大船を進むべからずと雖小帆舟は能く數十里を行るべし。此河川も亦其口に於て見るときは左右山迫り、大河に伴ふ所の冲積の沃壤は韓國に於ては又之を見ること能はざるかの思あらしむ。去れば外觀に依て判斷するときは韓國の農產殆ど望なきが如しと雖實際は否ら ず、余の多少の實見よりする推想と內地旅行者の談とに依れば沿岸は山を以て圍むも內部には平地少からず、又重疊せる山と山との間には必ず或る面積の平地と耕やし得べき山麓とあり、河川も亦少しく溯れば入口の緊縮せるに反して奥は平地廣延す。

右の如く農耕地に乏しからざるに反し山林の荒廢は一朝に救治すべからざる、慨陷なり。豆滿江及び鴨綠江上流には尙欝蒼たる森林ありと云ふと雖是韓國の一小部分に過ぎず我國に於ては藩政時代の山林取締頗る嚴重なるものありしに

より、維新後濫伐の今日尚激甚なる荒廢を免れ居ると雖、韓國に於ては多年造林を忘れ村民勝手に之を伐りて更に植ることなく、恰も我原野の草刈に似たり。一方には建築其他普通用の外冬期溫突を燒くが爲に多量の燃材を消費し、山勢急なるによりて愈裸禿に陷り易く、今や山骨の露出せるもの少からず。近年に及では良材あれば無償にて官に徵發せられ、剩へ其運送まで負擔せしめらるゝが如き事あるにより、啻に造林の計を爲す者なきのみならず速に伐り盡して後害を免れんとするが如きは歎ずるに堪へたり。

氣候は大體我國に彷彿たりと雖其冬寒夏熱の差の著しきと乾燥なるとは北淸又は我北海道に類似し收納に宜しく、果物に適し、又病蟲害少かるべし。

地味は余の廣く目擊せざる所なるにより之を概言するに苦むと雖先づ中等なり。赤松の生へたる又は生へざる赭山より推察する所に比しては田圃作物の生育宜しく、余の目には大に肥沃なる土壤も甚だ痔薄なるものも觸るゝことなかりき其組織に於ても强粘なるもの、純砂なるもの少く、多くは耕耡し易き中位の性を有し寧ろ砂質に傾き好味なる米穀を產するには適當なりと思へり。小藤博士の實査に依れば南韓の山脈は南北に連り、北韓の山脈は東西に走るの差ありと雖地質は總て花崗石なりと云へり。去れば農地の地味我山陰山陽諸地方に見る所のものに類似せるは自然の理なり。

第二節　農法及び農作

農業の方法其他各般の農事上の事項に付ては近年京釜鐵道線に付て調査せる加藤農商務技師の報告あり。（又本年農事雜報第五十號以下數號に連載せる千葉縣商橋某の朝鮮內地農業談は適實にして要領を得たり）余が旅行の際目擊したる主なる作物は米、大小豆、玉蜀黍、粟、黍、胡麻、荏、棉、麻、煙草、野菜等にして農法支那よりも更に拙劣に、農業幼稚の徵候たる數作雜植の如き韓國の圃地には最普通なり、田畑は天然の起伏を其儘區域とし、肥料は人糞、畜屎、灰、塵芥、雜草等の若干を用ふるのみ。蓋し拙中の巧は米作にあらんか、韓國に言ひ傳ふる所によれば韓國は日本に棉作を授け、日本は韓に稻を移植することを傳へたり、時は即ち豐公の征韓の折糧食維持の爲加藤淸正等韓土に於て日本風の米作を爲せしに始ると云ふ。家畜は比較的多く牛、馬、驢、豚、山羊、禽各村にあり犁耙には多少牛馬を役すと雖動物は概して普

通小種に屬し賞すべきなし。唯馬の小なるに反し牛のみは東洋の秀逸と云ふべく、就中牡牛美大なり。朝鮮牛の特に洋牛に類似せるは必ず其原因あるべしと雖余は之を知るを得ざりし。

韓國の傾斜地に富めるや將來に於ては蠶桑業及果物作を誘導するに利なり。我國に比すれは氣候乾燥なるにより安全に結果を收むることを得へし。但し養蠶に付ては蠶室と栽桑法とに付韓情に適當なるものを考究するを要す。

牧畜就中牧牛も亦見込ある事業なるへく、江原道は其適地なりと云へる人あり。

第三節　農事改良と其手段

韓國の農事は微頭微尾改良を要せさるはなしと雖之を彼の農民に期すること能はす。其政治の萎靡せる其所得は却て身の危險を招くか如き農民の無智懶惰なる其赤貧にして貯蓄心なき精神に物體に規模の極小なる之を清國人に比し一層改良の望遠し。去れは物産の增殖改良に付ては清國の部に於て論じたるか如く新奇なることを以て彼等の改良心を導き需要と價格とを以て其增殖を誘ふの外なし。

韓國の最大生産物にして又最大貿易品たる米穀に付新奇の手段として先つ用ふへきは溜池の構造及び稻扱（コキ）の使用なるへし。韓國の米作は專ら降雨に依頼して水の貯藏を缺くにより屢旱害に罹りて凶作を招く。又移植の期節に雨なきときは元來雨量に應して移植するか故に移植の時期長期に亘て從て收穫を損し、又他日十分の降雨あるも最初移植を減したるか爲其雨澤を蒙るに由なきか如きこと多し。主なる米作地方に在ては畳一二枚位の小池を田圃間に掘て、幾分水を貯ふるの裝置を爲すと雖其効用甚た不完全なり。然るに地形に於ては溜池を設くへき場所到處に在り、山に木なきは已むを得すと雖三面は山、一面は堤を築き底を固めて之に雨水浸透水を貯蓄すれは一層安全に移植を爲し、又生育中の灌漑を十分ならしむることを得へし。（釜山に日人の造りたる飲料貯水池あり水原府に韓人の築きたる灌漑池あり、其他に見るへき貯水池なし）雨水の外河川の水を引く場合は天然勾配に依るのみなれは是亦簡單なる揚水車又は唧筒を仕掛くへし。次に韓國の米穀は穗を木石に叩き付け籾を地上に落し篩にて掃き集むるの收納法なるにより土石を混すること夥しく之か爲に撰米の手數を要し價格を減すること甚し。